
悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

【Nコード】

N0858Q

【作者名】

かがみん

【あらすじ】

次元世界に舞台を移した、ソール11遊星主と護、凱達の戦いはなのは達の参戦を得て新たな局面へ。ジェネシクと魔法、神話と伝説が交錯するシリーズ第三弾。

オーブニング

ファンタジー
リリカル幻想

抱きしめた 小さな願い
熱く燃やせ 奇跡を起こせ
傷ついた 貴女の涙
助けたいよ 遥かな次元
ファンタジー
リリカル幻想
そうさ夢だけは
誰も奪えない 空への翼だから
リリカルなのは
少女はみんな
リリカルなのは
小さな勇者 Oh yeah
リリカルなのは
エースのように
リリカルなのは
今こそ 羽ばたけ
どこまでも 輝く空に
なのはだけの 魔法を目指せ
その日まで 負けられないさ
悲しみ秘め 挑んだバトル
ファンタジー
リリカル幻想
誰かを支える
友情という翼広げ 飛んでゆけ
リリカルなのは
少女はみんな

リリカルなのは
孤独な天使 Oh yeah
リリカルなのは
エースは不屈
リリカルなのは
今こそ 闘え
リリカル幻想 ファンタジー
そうさ 夢じゃない
誰も目指してる 約束の空だから
リリカルなのは
少女はみんな
リリカルなのは
未来のエース Oh yeah
リリカルなのは
魔導師の杖で
リリカルなのは
今こそ 撃ち抜け

前回までのあらすじ

三重連太陽系で、ソール11遊星主はGGGとジェイアークに優勢な戦いを演じていた。しかし獅子王凱ししおうがいがジェネシク・ギャレオンとフュージョンする事で劣勢は挽回する。

ジェネシクに脅威を覚えた遊星主のリーダー、アベルはピサ・ソールの爆発を目くらましに逃走を図るが、それが時空間に亀裂を生み出し、その衝撃から、遊星主と凱達は別の世界へと飛ばされてしまう。

彼らが落ちた世界は魔法が日常的に存在する宇宙 次元世界であった。

そこでは第一管理世界ミッドチルダの存亡をかけて、時空管理局とドクター・スカリエッティが争っている最中だった。

この戦いに遊星主は介入し、甦った古代ベルカの戦艦《聖王のゆりかご》は崩壊、スカリエッティは遊星主ピア・デケムに殺害される。

さらに、聖王ヴィヴィオが遊星主に拉致され、何処かに消え去った。それからすぐに、次元航行部隊のクロノ・ハラウン提督が新たに出現した人工天体を確認した。

それこそ、遊星主のベースであるピサ・ソールである。遊星主の一人にして、物質復元装置……。だが、彼らは行動を起こさず、じつと身を潜め続けていた。

スカリエッティの事件から間もなく、機動六課の八神はやて隊長は遊星主に危機感を抱き、新設部隊の計画を管理局地上本部に提案した。

それが、機動勇者隊。主に六課のメンバーに獅子王凱、卯都木命、あまみまもる天海護、ルネ・カーディフ・獅子王、ソルダートJを加えた精鋭部隊である。クロノ提督やナカジマ陸佐らの協力を得て、普段は対立しがちな陸（地上部隊）と海（航行部隊）が手を携えて誕生した組織だ。

はやては三重連太陽系のオーバーテクノロジーを調べ、新装備の開発発にも着手。遊星主にたいする有効な技術の研究が進められた。

一方、先の戦いで異変が生じた六課分隊長高町なのはのインテリジエント・デバイス、レイジングハートは、管理局・本局において修復と再調整を受けていた。それも完了し、レイジングハートを再び手にするなのは。三重連太陽系に生まれたGストーンが融合したレイジングハートは、新しい機構を加えられてレイジングハート・ジエネシスとして新生した。

同刻・獅子王凱は赤の星で作り出された宇宙最強の戦艦ジェイアークのコンピュータ、《トモロ》を目覚めさせる作業に没頭していた。アベルが三重連太陽系で捕らえた生体兵器アルマ・戒道幾巳に、彼しか知らぬ緊急停止コードを用いてジェイアークの動力を遮断していたのである。凱はエヴォリユダーの能力を使って停止コードを解除する試みに挑んだ。

ジェイアークが復活できれば、戦況は有利になる。Jは凱に託した。

だが。JS事件終結から一週間になろうかというその日。ミッドチルダでは、衛星軌道上の拘置所が何者かに襲撃された事が報告され、その直後、ミッドチルダ各地にスカリエッティの手足となって行動したガジェット・ドローンが出現し、人々を困惑させるのだった。全てのガジェットは事件終結時に停止したはずでは……！？

疑問を解消する暇もなく 首都クラナガン周辺を警備していた隊員達は、破壊活動をはじめるガジェット群を迎え撃つ事となった。その中に、はやての守護騎士《烈火の将》シグナムもいた。

かくして、戦いの幕は切って落とされたのである……

第一話 RED ALERT（前書き）

登場人物

獅子王凱 G G G機動隊長。超人エヴォリューダー。

高町なのは 魔導師。《エース・オブ・エース》

天海護 浄解能力者。カインの子ラティオ。

ジェネシック・ギャレオン（ギャレオン） ジェネシック・ガオガ

イガーの中核をなす、宇宙メカライオン。

フェイト・T・ハラオウン 執務官。《金の閃光》

卯都木命 G G Gオペレーター。凱の恋人。

ヴィヴィオ 古代ベルカの聖王。

ルネ・カーディフ・獅子王 G ストーンのサイボーグ。凱のいとこ。

ソルダートJ サイボーグ戦士。アルマの守護者。

トモロ ジェイアークに搭載された生体コンピュータ。

アベル 遊星主のリーダー格。赤の星の指導者。

パルパレーパ 遊星主。

八神はやて 機動六課創設者。《最後の夜天の主》

リインフォースEE はやての融合騎。《蒼天を渡る祝福の風》

ヴィータ 魔導師。《鉄槌の騎士》

シグナム 魔導師。《剣の騎士》

シャマル 医師。《湖の騎士》

ザファイラ 《盾の守護獣》

クロノ・ハラオウン 時空管理局提督。フェイトの義兄。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ 機動六課フォワード。なのは

の教え子たち。

戒道幾巳 生体兵器アルマ。浄解能力者。

第一話 RED ALERT

……第一種警戒警報発令。

第一管理世界ミッドチルダの首都、クラナガン。

そこには、時空管理局地上本部がある。地上部隊の全てを統轄する部局で、本局が海……次元航行部隊のベースならば、こちらは陸……地上部隊のベースともいえた。

クラナガンは政治的、軍事的に重要な施設や人物が集まる都市であり、その防衛には多くの労力と技術が注ぎ込まれていたのだ。それゆえに、陸士隊戦力の保有数は、他の世界の比ではない。

今から一週間以上前、地上本部は大規模なテロ攻撃を受けた。魔法攻撃には万全な体勢を整えた地上本部は、質量兵器という盲点を突かれ手酷い被害にあう。最も、テロの首謀者スカリエツティにとつては単なるデモンストレーション以外ではなかったのだが。しかし、この事件で地上本部はプライドを傷つけられた。

地上の守護者を以って任ずる砦が、次元犯罪者のテロを許したのだから……

苦い思いを抱いた地上部隊の責任者達は、再度のテロリズムに備え、防衛機構を強化した。

そして、それに挑戦するが如く、再び同じ敵が現れたのだ。

地上本部に緊張が走る。モニターには、以前とほとんど違わぬ光景が映し出されていた。

Ｊ・スカリエツィが目的遂行のために操っていた機械兵器。ガジェット・ドローンだ。

触手を伸ばしたカプセル型のガジェットⅠ型。全翼型航空機のガジェットⅡⅡ型。その大型機のⅡⅡⅡ型。

その集団が、地上本部に攻撃してきた。まさに、ＪＳ事件の再現だ。その時にはバリア内に侵入され、甚大な危機に陥った。まだ記憶に新しい、悪夢のような事態だ。

「なんで……」

ガジェットの出現は、八神はやてをはなはだ困惑させた。

ガジェットは、スカリエツィや戦闘機人ウーノ達が倒された時点で全機が停止していたはずだ。仮に秘密の場所に隠匿されていたとしても、勝手に起動するとは考えにくい。

「ガジェットの総数、三百〇四百と推定されます」

と、はやてに報告される。

ガジェット群はクラナガン、港湾地帯、ベルカ自治領に別れて襲撃を行っていた。

「ガジェットⅡⅡⅡ型が本部に向かってきます」

ズズンツと衝撃が伝わる。建物が震え轟音が響く。

地上本部は攻撃に耐えた。

前回のスカリエツィ襲撃事件に鑑み、管理局は対質量兵器の為のセキュリティを強化するよう改装が施された。ガジェットの特線や体当たりにも対応した多重結界により、地上本部の陥落は難しくなっていた。

「地上本部機動部隊、ガジェット群を迎撃中。各地より応援要請が届いています」

「本部の人員はあんまり割かれへんが……」

それでもはやては非番や待機中の隊員を増援に送り込んだ。

「なるべく、苦戦している場所に送ったって」

「了解しました」

オペレーターを担当するアルトが命令を部隊に伝えた。

空戦魔導師の数は少ないが、JS事件で活躍した精鋭達である。きつと地上部隊の窮状を救ってくれるはずだ。

「八神長官。あのガジェット……何かおかしく感じませんか？」

若い士官である、機動勇者隊副官・整備部隊長グリフィス・ロウランが、首を捻ってはやてに言った。

「どういう事や？」

怪訝そうに訊かれ、グリフィスは躊躇いがちに答えた。

「なんというか、色素が薄いというか、くすんだような機体のとに

かく以前に見た物とは違う印象が――

グリフィスは艦艇や兵器に詳しく、はやての部下の中でも造詣が深いほうだ。その彼は、目の前のガジェットに違和感を覚えた。とは言え、何かがおかしいと思うのだが、はつきりと違いを指摘出来ずにいる。まるで幻術にかけられたかのようなもどかしいが、うまく説明できそうにない。

（色合いが違う……幻術……？）

はやてが視線をさ迷わせて考えこんだ時、モニターにウィンドが開いた。

『それは、レプリジンかもしれません！！』

護がそう、指摘した。彼はいま、ジェネシクマシンの整備のため、地下格納庫で作業している最中である。

ガジェットの映像をそこから見ていたのだが、記録されたガジェットの情報と見比べて、それが複製された機械だという結論に護は達した。

「こいつらが、遊星主が複製させたという、レプリジン……」

はやては得心しながら思考を巡らせた。

奴らはガジェットを複製して、攻撃をしかけてきた。これは遊星主の宣戦布告なんやな！

「連中め。うちらとやる気になったんやな……」

望むところと、はやての闘志は燃え上がった。

こうして地上本部を攻撃するということは

「遊星主め。このミッドチルダを制圧するつもりか」

護は今までの戦いを振り返った。遊星主はガジェット群のみで勝負を決しようとは考えていまい。

このガジェット群は囷……デコイではあるまいか？

（戦力を分散させる陽動？）

自分達をこちらにくぎづけにし、アベル等は別の場所で行動に移す

……

「本局より緊急通信」

「なんやて」

次元の海に浮かぶ時空管理局本局、そこに遊星主とおぼしき者が現れたという。さらにガジェットも一緒に侵入したらしい。

「本局からの応援は難しかったなあ」

と、はやてがこぼした。

あちらには海の精鋭達がいる。フェイトたち執務官やなのはも揃っている。陥ちる可能性は少ない。それよりも、ミッドチルダの地上だ。

ここで奴らの侵攻を防がな、せつかく守った地上の平和が台なしや。はやては、ガジェット群の一掃を改めて各部隊に指令した。

「複製とは言え、ガジェットなんぞAMFさえ対策とれば……」
勝てる。

私達のストライカーが経験を積んだいまならば。
はやての思い通り、各地に散らばったガジェット群は、魔導師達の活躍で着実に数を減らしていつている。

（けど、油断はでけへん）

いざとなれば、はやて自身が魔導騎士として出陣するつもりであった。ラインが本局にいるのがネックだが、それでも夜天の主の力は
大した戦力になるだろう。

『八神長官、お願いがあります』

と、護がはやてに言ってきた。

『僕にも出撃の許可をください！』

「なんやて……！？」

思わぬ訴えに、はやて達は目を丸くした。

『ギャレオンの修復は完了しています。僕達も皆さんと一緒に戦わせてください』

「でも、あんた。危険やで」

ギャレオンは対遊星主で切り札になる。そう、告げたのは護自身だ。

それなのにギャレオンを出撃させようとは。

『たぶんガジェットは遊星主の囷です。一刻も早く撃退して、主力の襲撃に備えないと』

「その目、覚悟は決めとるんやな……」

はやては通信モニターを覗きこんだ。

『僕にも戦う力があります。だからお願いします。世界を護る事に協力させてください!!』

真摯な護の言葉に、はやての心が揺れた。

「……よし」

意を決してはやては命じた。

「天海護客員隊員に、ガジェット迎撃に加わる許可を与えます」

『ありがとうございます』

G G G 式の敬礼をしながら、護は嬉しそうに言った。

護は急いでギャレオンが納まった格納庫へ走る。

「ギャレオン。僕達の出番だよ」

鋼鉄の獅子は優しげな眼差しで、護を見下ろした。頷きの色が目に浮かんだような気がして、護は安堵する。

なにしろ、遊星主そのものとの戦いではないのだから、拒否された

らどうしようもない。

だが、ギャレオンは護の朋友だ。これまでも、苦しい時こそ力を貸してくれた、強力な味方だったのだから。

今度もまた僕達と共に立ち上がって、ギャレオン。

護は「行こう」と、促すと、ギャレオンの口蓋部に収まった。未だ最終調整段階のジェネシクマシンを残し、黄金の獅子は発進ポートへ移送される。

護の意思を受け、ギャレオンがスラスターを噴かせた。
曇天の空へと飛び立つ。

「あの目の輝き」

はやては微笑しながら、その姿を見送っていた。

あの、クリスマス・イブの夜。初めて夜天の主に目覚めた日に、はやてが見た輝き。

「あん時のなのはちゃんと同じ輝きやったな……」

ひたむきな、強い意思を宿した瞳。

「機動部隊へ」

機動部隊は、遊星主戦を考慮して、新たに編成された部隊である。陸戦／空戦魔導師の混成チームで、六課時のスターズ、ライトニング分隊をもとに、十二の各小隊で構成されていた。
第一／第二はなのはとフェイトが受け持つ。

「護くんのサポートを、最大限にお願いや」

指令に応え、機動部隊がギャレオンを追跡した。

さらに、研究部にはギャレオンの性能を計測するよう命じる。対遊星主戦で、どれだけの能力を発揮するのか。この眼で確かめたい。

機動勇者隊スタッフの注目が、護とギャレオンに集まった。

一方。警ら中のシグナムは、ガジェット・ドローンⅠⅠ型と交戦していた。

「紫電一閃ッ」

雨天。レヴァンティンが全翼機を両断する。
斬られたガジェットが、光の粒に分解され消滅した。

「複製……か」

港湾地帯上空に浮かぶレプリジン・ガジェットに、鋭い視線を投げ掛ける。
色が、薄い。

「だが、能力や耐久性はオリジンと変わらぬようだな」
カートリッジをロード。

レヴァンティンが紅い光輝を纏う。

熱線をかき潜り、炎の魔剣を振るう。ガジエットの熱線は、雲の中では威力を低下させていた。シグナムの防御魔法でも充分に防げる。

そして。火竜フリードリヒに騎乗した機動部隊のキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルが少し離れた空域で、ガジエットを撃退している。JS事件で頼もしく成長した二人は、見事に戦っていた。

「良いコンビだ……」

ふっと、シグナムは微笑んだ。

「もはや私が教える事など、ないのかもしれないな。テストロッサ……」

呟きつつ。斬撃をガジエットへと振り下ろした。一機が消える。数ではガジエット群が上だが、全く不利を感じさせない戦いぶりだった。

そのあとも、シグナムはさらに、剣を振るい続けるのだった。

同時刻。

ヴィータは、ガジエットI型の集団に襲われていた。その数は八十機あまり。

くろがねの伯爵が、グラーファイゼン魔力の鋼球を打ち出す。

四方からガジェットに迫る。高速の弾がガジェットを穿つ……かに見えた瞬間。機体を守るアンチ・マギリング・フィールドが魔力を失効させ、鋼球は霧散。それを目撃したヴィータは舌打ちする。

「また、AMFかよ」

ゆりかご内で味わい尽くしたというのに。氣に入らない。

「ヴィータ副隊長！！」

触手のような器官　アームケーブルの一撃を避けたヴィータの隣から、スバル・ナカジマが飛び出してきた。

マツハキヤリバーを疾走させ、ぐんぐんガジェットに向かう。アームケーブルがしなつて、スバルを襲う。

機械の鞭が当たったスバルは、音もなく掻き消える。

機動部隊のティアナ・ランスターによる幻術だ。

本物のスバルは回り込んだ下から蹴りを食らわす。加速した足が巨大な無人兵器を後方に飛ばす。すかさずスバルが拳を胴体の真ん中に打つ。

リボルバーナックルが一直線に打ち込まれる。

ガジェットはAMFを発動。魔力結合を解く無効化フィールドは近代ベルカ式魔法といえども効果はあるはずだった。

だが！

スバルの拳はAMFをすり抜け、本体にヒットした。

魔力は最初から使用されてはいない。

振動破碎と呼ばれる、スバル固有の《IS》先天技能による一撃だった。

それは機械などに最も効果を表わす。

ガジェットは内臓機器を粉碎され、消滅した。

「まったく、弟子に負けてられるかよ」

若い二人に、ヴィータは称賛と悔しさのないまぜになった念を覚える。

「アイゼン!!」

《Jawohl!》

カートリッジを二発消費。

「ラケーテン……ハンマー!!」

まばゆいジェットを噴射して、ドリルとなったグライフアイゼンが激しく回転する。

勢いをつけて、ヴィータはアイゼンをガジェットの頭部に叩きつける。

「AMFごと」

凄まじい轟音がして、ドリルが表面にめり込む。装甲がひしゃげ、内部が削られる。部品が飛び散り、スパークして火が舞う。

「ぶっ潰す!!」

バットのように、振り抜いた。

ガジェットはぐしゃっと、上部を潰されながら、吹っ飛んでいき、

亜音速で仲間に衝突する。そして消えた。

守護騎士で最も破壊力を誇る、鉄槌の騎士ヴィータの力は、なお健在だった。

「凄い……！」

スバル達は畏敬の思いに打たれながら、そのあとに彼女と共にガジエット群を倒していった。

古代の伝統を伝えるベルカ自治領、自然に囲まれたアルトセイム地方では、聖王教会の者達と機動勇者隊とが手を携えて、ガジエット群と戦っていた。

聖王教会で管理局にも名を連ねる騎士カリム・グラシアが指揮を取り、戦闘地域においてはシャツハ・ヌエラらが近代ベルカ式デバイスを存分に振るう。

いつもは慎ましやかなシスターのシャツハだが、このような時は率先して敵にぶつかる。

シグナムと互角と言われる彼女は、打撃系に特化したベルカ式を駆使して、ガジエット群を撃破していった。

皆が戦っている。

早く。早く。

護は戦場へと、急いだ。

第一話 RED ALERT（後書き）

機動勇者隊 組織図

長官

八神はやて

機動部隊

総隊長

獅子王凱

第一小隊 隊長

高町なのは

同・副隊長

ヴィータ

第三小隊 隊長

フェイト・T・ハラオウン

同・副隊長

シグナム

第四小隊〜第二小隊
隊長

ゲンヤ・ナカジマ、ほか

整備部隊

隊長

グリフィス・ロウラン

同・副隊長

アルト・クラエッタ

研究部

主任

シャリオ・フィニーノ

同・副主任

リインフォースEE

医療部

主任

シャマル

通信部

主任

ルキノ・リリエ

輸送部隊

隊長

ヴァイス・グランセニッツ

航行部隊

隊長

クロノ・ハラオウン

第二話 その名はGガイガー!! (前書き)

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ガイガー」

無敵王トライゼノン

「突き進め戦艦『暁』」

第二話 その名はGガイガー！！

時空管理局地上本部。

結界越しに、ガジェットII型の放つ熱線が見えた。光学兵器のビームは対物理障壁に吸収され、散華する。しかし、その衝撃だけは結界内部にも浸透し、護のいる屋上ポートを揺らせた。

ギャレオンは数十キロ上昇したあと、停止した。そこは結界と外部が接するぎりぎりのラインだ。護は本部に通信を送る。

すぐに結界の一部が解除され、ギャレオンがその外へ飛び出した。わずか数秒の出来事だった。結界はまた元に戻る。

（よし！）

気合いを入れた護は、己の力を解放する。髪が逆立ち、全身が淡く緑色に発光する。背には羽が生まれ、まばゆいオーラを発していた。

はやてはおとぎ話に出てくる妖精のようだと思った。

浄解モードになれば肉体的にも強靱となる。

そして、護達はガジェットとの攻防する戦場に踏み入った。

天を、鋼鉄の獅子が駆ける。

ギャレオンの機動力は目を眩^{みは}らせた。
ガジェットⅠⅠ型を上空から、鋭い爪で切り裂き、大型のⅠⅠⅠ型すらも体当たりで打ち落とす。護も本来の力を発揮して戦った。攻撃を防護の左手で防ぎ、反撃は破壊の右手から強力な念動力を繰り出し、ガジェットを叩く。

（凱兄ちゃんは　　）

ギャレオンの傍で戦いながら、護は思考していた。

（もう一人の僕がどうしたかを、教えてくれた……）

数十機のガジェットの攻撃を捌く。

（レプリジンの護にできたのなら、オリジンの護にも、できるはず……！！）

決意を固めた。

（もう一人の僕が、果たし得なかった思いを。僕は果たす）

ギャレオンがガジェットの翼を砕いた。

護は数少ないⅠ型から攻撃を受けるが、体内をサイキックで破壊する。

「ギャレオン！！」

護は叫んだ。

「凱兄ちゃんのかわりに……僕に君の本当の力を貸して！」

信賴をこめて護は言った。

「僕が真にカインの息子なら、君の力を受け止められるはず」

ギャレオンは咆哮を以って返答した。拒否する反応ではない。

「ギャレオン……！」

護は嬉しそうに頷いた。

ギャレオンが動きを止め、準備駆動に入る。護は距離を取って叫ぶ。

「行くよつ、フュージョン……！」

護の体が、ギャレオンの内部に収容される。

「食べられた……！？」

それを見た者達が、ギョツとした顔になった。

少年はギャレオン内部へと運ばれ、複雑な機器やケーブルと神経を接続される。ギャレオンと一体化した護の感覚は、今までよりも研ぎ澄まされたものになった。

（これが……フュージョン。凱兄ちゃんはこんなふうに世界を見ていたんだ……）

ギャレオンが変形する。

獅子から人型へ。システムが組み換わり巨大なメカノイドへと、

姿を変える。

『ガイ……ガーツ!!』

額にGストーンが鮮やかに輝いた。

「ほんまに巨大ロボットや」

と、はやては呆然となる。

フュージョン成功。巨人の身体を手に入れた護は、建物を避けて広い道路の上に降り立った。

「もう一人の僕にはできなかったこと……」

護の宇宙で、レプリジン・護はパピヨン・ノワールの命を奪った。なおかつ、レプリジン・ガオガイガーにフュージョンし、凱と戦闘すら行ったのである。遊星主パルパレーパに操られていたとはいえ、それはレプリジンにとって、償いきれぬ過ちだったに違いない。

彼は本心ではその力を悪いことには使いたくはなかっただろう、とオリジンの彼は思う。

だから。今度は僕が、君のかわりに勇者の力を、冷酷な殺戮ではなく、誰かを護るために使ってみせる。

「そのためにも、遊星主を　　！」

ジェネシック・ガイガーは、ガジェットに向かった。

「ジェネシック・クロウ」

腕部に装備された鋼鉄の爪が、セットされる。

ガイガーは凄まじい速度でクロウを振るう。遊星主のパーツキューブすら一撃で破壊する爪だ。ガジェット群はわずかな時間で撃破されていった。

（体が軽い　ガイガーの四肢が手足の延長みたいに感じる）

かつてのガイガーとは数段も出力が違う、ジェネシク・ガイガーの猛攻。

ガイガーは魔導師達と連携し、地上本部を襲うガジェット群は次々に粉碎されていった。

「これなら本部防衛は我々でもなんとかできます。護さんは、他に苦戦している地区の援護を」

「そうやね。救援要請があちこちから届いてる。護くん」

『こちら海上隔離施設、ギンガ・ナカジマ』

そこへ、スバルの姉から緊急通信が入った。冷静な彼女にしては焦った表情だ。

『現在、ガジェット百数十機の襲撃を受け抗戦中。でも戦力が足りません。八神長官、増援を寄越してもらえませんか？』

画面の奥では、ガジェットII型と撃ち合う魔導師の姿が映っていた。

「よっしゃ、解った。いい助っ人を向かわすよ」

はやては即答した。

『助かります。では』

ギンガは通信を切った。

「護くん。さっそく助けに向かったって。座標は」

『はいっ』

旧ガイガーはステルス・ガオー装備でないと、飛行は不可能であったが、元来、宇宙戦を想定して設計されたジェネシック・ガイガーには推進装置がついている。

ガイガーは海上隔離施設の方角に向かって、飛翔した。

「ついでや」

と、隔離施設の近傍にいる隊員を確認する。

はやては、さらなる助っ人として、港湾地区で戦っていたシグナムを送り込む事にした。

はやてからの命を受けて、シグナムはエリオ達に現場を任せ海上隔離施設へ、飛んで行った。

第二話 その名はGガイガー!! (後書き)

しばらくなのはさんの出番がなさそう……ファンの方はすみません
(――)

第三話 幻惑する銀幕（前書き）

今回のイメージBGM

緑山高校・甲子園編・

「TANKARA LOWLEEN」

「Power Hits」

レジェンド・オブ・クリスタニアはじまりの冒険者たち

「神王の伝説」

ほか

第三話 幻惑する銀幕

ウインググロード。ナカジマ姉妹の先天魔法だ。

これにより、飛行魔法を使えぬ陸戦魔導師でも空中で戦える。

美しく優美さを持った女性だが、たおやかな外見と違い、ギンガは激しさを秘めた魔導師であった。ブリッツキヤリバーを唸らせ、勇躍してガジェットに挑む。

しかし。それでもガジェットⅠⅠ型の機動性に着いていくには、骨が折れた。

近代ベルカ式と、シューティングアーツの優秀な使い手たるギンガも、ガジェットの大群はさすがに手に余る攻勢だろう。

隔離施設の警護戦力では、空戦魔導師は二人で、あとはギンガと同じ陸戦型しかない。総数二十五名の部隊である。収容者の反乱を怖れての常駐部隊とは言え、囚人への能力封印に安心してそれほど嚴重な警護とは言えなかった。警備部隊の保有戦力はB→A Aランク止まりで、はやての部隊とは比べものにならない。いや、はやての部隊が異常なのかもしれない。普通の部隊にエース級の魔導師はそう何人もいないからだ。

囚人を逃がさないためか、戦闘より結界魔法に長けた術者が揃い、現在でもガジェットの侵攻を防ぐため建物全体に張られている。

だが、魔力のみの防御は、海上から現れたガジェットⅠ型によりたやすく破られてしまう。

魔法を無効化するAMFだ。

テロ事件の教訓が生かされていない、と、ギンガは思った。
遠距離戦に不慣れなギンガでは、近接戦に持ち込む必要がある。

ギンガは、ウインググロードの上をブリッツキヤリバーで疾走。

その上空を、大型のガジェットII型が飛び交っている。それが、
赤光のビームを撃ってきた。

トライシールドで弾き返し、ギンガは跳躍する。

ガジェットII型に蹴りをぶち込む。ガツンと、真下から衝撃を受け、ガジェットは機体制御が不安定になった。そこへ、さらに拳撃が打ち込まれ、ガジェットは大破。そして、飛来したガジェットを踏み台に跳び、別機を葬り、ウインググロードに着地した。

（キリがないわね……）

高町空尉のように砲撃が使える、数機まとめて倒せるのだが……。ほかの魔導師たちも、地道に敵機を削っている。

と、

背後からガジェットII型が襲ってきた。

ギンガは振り向きざまに攻撃をしかけようとする。が、横合いから空戦魔導師の放った直射魔法が、ガジェットを消滅させた。

「ギンガ、ここは俺達に任せろ。お前は地上のI型を何とかしてやってくれ」

「わかった」

頷き、地面に降り立つ。ガジェットI型はアームケーブルをつねらせ、隔離施設に迫り来る。

ギンガは警備員に加勢し、打撃を、蹴りを、複製された機械兵器どもに浴びせかけた。

「くっ、数が多いな」

「戦闘機人よりはましよ」

魔力を乗せた拳がガジェットの腹を破壊する。

『緊急、施設内にもガジェットが侵入した！』

「なんですって！？」

『ガジェットは囚人のいる房を目指している。数人、援護に来てくれ！』

悲痛な叫びが、施設警備責任者から漏れた。

「ギンガ、行ってやれ」

「えっ、でも」

「あの戦闘機人達はお前の担当だったろう。万一、逃げ出したりしたらお前にも責任を負わされるぞ」

担当、というのは、ギンガが捕まったナンバーズの教育等の更正の指導の事である。

同じ戦闘機人として、戦う以外の人生を教えるのが、ギンガ自身に課した使命であった。前非を悔やみ、更正しようとしている戦闘機人達の新しい生を手伝いたい。その想いの強さに、ナンバーズの面々も彼女には心を許していた。また、ギンガもスカリエッティに改造を受けて悪事に手を貸したという、過ちがある。今回の教育係を引き受けたのは、その贖罪でもあるのだ。

今更、あの子達が逃げ出すとは、彼女には考えられなかった。とは言えこんな混乱した状況である。何が起こるかわからない。懸念は能力を封印された彼女達が、ガジェットに襲われたらひとたまりもないという事だ。無論、ルーテシアやアギトもだ。

急ごうとするギンガの前に、ガジェットが立ち塞がる。

ギンガは猛攻で粉碎して駆け出した。

「ギンガ！」

宙から彼女の名を呼ぶ声が。聞き覚えがある。

一人の女性が、ガジェットを鮮やかに切り捨て、降り立った。

「シグナム一尉！！」

ポニーテールをした切れ長の瞳の女性が、炎を宿したアームドデバイスを手にも、短く伝えた。

「助勢に来た」

「助かります！」

「他にも、心強い助っ人がいるぞ！」

言いつつ、ガジェットを撃つ。硝子の様に砕け散るガジェット。

「心強い、助っ人……ですか」

と、首を傾げつつ、I型を倒す。

「お前は早く戦闘機人達の元に向かえ！」

「わかりました」

ギンガは走り出した。

シグナムはレヴァンティンを鞭状連結刃・シュランゲフォルムに変える。

火龍一閃で、薙ぎ払った。

「む、空でも苦戦しているか」

シグナムはガジェットI型を撃破すべく飛び立った。

護が到着すれば、戦況は有利になるはずだ。

あらかじめミッターを解除している為、シグナムの戦闘能力は、他の隊員達の追隨を許さなかった。

その戦いぶりを、さらなる高みから眺めている影がある。
影は大型のIII型に佇立し、冷やかに戦闘域を見下ろしていた。

茶色がかった髪に、眼鏡をかけた女性である。その姿は索敵にも映らぬ、不可視の状態を維持していた。故にまだ管理局には存在を感じられていない。

「また、機動六課」

彼女は、忌ま忌まし気に呟いた。

「そろそろ、本気を出させてもらっわ……」

片腕を上げて、影は瞳に炎を燃やした。暗い炎だった。

私のすべてをぶち壊した機動六課には、死の制裁が必要なのよ！

「IS発動！」

「なっ……？」

シグナムの目の前のガジェット群が、不意に分裂した。少なくとも、彼女にはいきなりガジェットが数百に増えた様に見えた。

「増援！？　一瞬でこれだけの数を転送したのか」

馬鹿な。

ガジェット群は凄まじい大群で攻めてくる。

「どうなってるんだ!？」

「ちっ、多過ぎるぞ」

「キリがねえ……!」

対応する隊員達が悲鳴混じりに叫んでいる。一方、シグナムの胸には、疑惑が芽生えた。

「もしや」

一機にレヴァンティンを振るう。

ガジェットはふっと、煙のように掻き消えた。

「やはり……!」

幻術か。

だが、これ程の大規模な数を幻影で生み出せるとは。そのような術者が敵にいるのなら、侮れんが……。

とにかく。主はやてのような広域攻撃ができない以上、虱潰しに叩くしかない。

しかし。それが本物でそれが幻惑かわからぬ隊員達は、がむしゃらに攻撃を繰り返し、魔力を無駄に消費しているようにも見えた。

「せいぜいガジェット相手に踊るといいわ」

影は次は海上隔離施設そのもののコントロールを掌握するべく、己のインフューレント・スキルを放とうとした。

が。

「そんな幻影、僕には通じない!!」

彼方より空を駆け抜けてきた白い巨人が、思わぬ一撃を彼女に与える。

『なっ……』

そう。ジェネシック・ガイガーが、ようやく隔離施設に到着したのだった。

護は、ギャレオンと知覚を共有している。そのセンサーが、確実に姿なき襲撃者を捉えた。

巨大な爪が、空間の一点を風ぐ。

「きゃあっ!?!」

危うく直撃するところだった。回避は成功したが、掠った衝撃で彼女の不可視の力が解除されてしまう。

「そんな……!?! 私のシルバーカーテンが……」

彼女が乗っていたガジェットIII型が、引き裂かれる。消滅した。

「しまっ
」

彼女に飛行能力はない。たちまち墜落していく。
護は彼女を捕らえようとする。

『待てっ』

「ちいい!!」

彼女は、手近な場所に浮かんだガジェットを操作し、どうにか上に乗る。立ち上がり、少し離れた空域にいた管理局員を一瞥。確か機動六課の副隊長だったか。

「貴様は
!!」

シグナムには、その女に見覚えがあった。

「そうか。衛星拘置所が襲撃を受けたとは聞いていたが……」

昂然と立ったその女に、厳しい視線を向ける。

「ふっ……」

彼女は不敵に笑った。すでに幻影は打ち破れ、ガジェット群は元の数に戻っていた。

「ナンバーズ……No.4……クアットロ」

また、罪業を重ねに出てきたか！

シグナムはレヴァンティンを握る手に力を入れた。

「護隊員のおかげだな……」

クアットロを戦場に引つ張りこんだガイガーが、隔離施設に降り立つ。

そしてレプリジン・ガジェットに、彼は攻撃を振るった。

いまだ、クアットロは余裕だ。シグナムは何か奥の手を隠しているのか、と訝しむ。

その頃。ギンガは隔離施設内部に入り、地下から侵入したガジェットと戦っていた。

一刻も早く、戦闘機人達の元へ行くために。

「邪魔！」

ガジェットは打撃を食らって、粒子と化して散る。

所詮は複製された雑魚機に過ぎない。

だが、数が多い。

それでも、一機一機を潰して歩く。

「あの子達は、私が、守る……」

決意を込めた拳が、機械を打ち抜いた。

隔壁を砕き、前へ。

そんな彼女にも、予想のつかぬ破壊の化身が、すぐ後に現れることになる。

その事は、この場所でクアットロだけが知っていた。

第三話 幻惑する銀幕（後書き）

クア姉です。次回、他のナンバーズも出せるといいなあ。

第四話 襲撃（前編）（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「緊急召集」

無敵王トライゼノン

「侵略のための力II」

ほか

第四話 襲撃（前編）

ミッドチルダの太陽が中天に迫ろうという時刻。

（……来る……？）

次元の海に浮かぶ、時空管理局本局。
その遙か上空に現れた巨大な影。
三層式の飛行空母。

卯都木命にとって、見覚えのある艦が本局に近づく。

（何よ、これ！？）

名状し難い感覚により、命の意識は別の空間に飛ばされたようになった。

（幻　　）

それが、命の秘められた能力が発現した最初の兆候であった。

（敵が……来る）

一瞬の現象の後、命は呆然と立ち尽くした。

彼女は本局の食堂に向かう途中だった。凱に食料を届けるためだ。

管理局員が通路を横切る中、命は不安を抱きながら、今起こった事を考えていた。

（今は、一体……）

頭の中に流れたイメージ。それはソール11遊星主の旗艦である。
ピア・デケム・ビット

それが、本局の方に向かって来るのだ。

（……まさか……）

予知能力？

パピヨン・ノワールのセンシング・マインドの様な

（そんな、馬鹿な）

自分はそんな特別な人間ではないと、首を振った。

自分は普通の人間だ、と。

『 ！！ 』

だが。再びあの感覚が訪れ、命は顔を上げた。

来

はっ、と気づいた時には手遅れだった。本局の外側から隔壁を突き破って、巨大な物体が突入してきたのだ。

見慣れぬ機械兵器が二体、通路に浮かんでいる。その卵型の自律機械について、管理局の人間なら正体を知っていただろうが、命にはわからない。

得体の知れない怪物にも等しい存在だった。
逃げる暇もなく。

構造材が瓦礫と化して飛び散る中、命の身体は紙の様に、吹き飛ばされた。

壁の裂け目から、命は広大な次元の海に放り出されてしまう。

『 きゃああつ！！ 』

悲鳴は、誰の耳にも聞こえなかった

「なんたることだ！」

これほどたやすく侵入を許すとは、本局のセキュリティはどうした！？

提督達は混乱し、口々に喚いた。

長い間、本局は敵から進攻を受けた経験が皆無だった事もあり、彼らがショックに陥るのも無理のない話といえよう。

何しろ地上本部がテロにあったのも、イレギュラーな事柄だと思っていたのだから。あの事件は地上の無能者が招いた自業自得だと、海の間人達は嘲笑していたほどだ。

それが、今度は自分達が同じ様な目にあい、まさか自虐するわけにもいかず、やり場のない怒りに苛立つ者が続出した。

「すぐさま迎撃せよ！」

この危機に、冷静な態度で指揮を採ったのはクロノ・ハラウン提督で、彼がたまたまにせよ本局に居合わせたのは皆にとって幸이었다。若く有能な彼の存在感が、局員達の士気を大いに高める役割を果たしたからだ。

非戦闘員を避難させ、魔導師達には、襲撃者の攻勢に対処するよう指示を与えた。

「まさか……ミッドに続いて此処にも」

ガジェット・ドローンI型。

かつて広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが使用した、自律型機械兵器である。純粹な魔法の産物ではなく、禁じられた質量兵器の技術が用いられた機械だ。スカリエッティは主にロストログリアレリックの探索と奪取にガジェットを使っていた。

最も、本局を襲ったガジェットは、ミッドチルダに現れたのと同様

にレプリジン、つまりは複製体だったのだが。
レプリジンは遊星主の基地であるピサ・ソールの物質復元装置の能力から作り出されるコピーだ。

ガジェットⅠ型は本局内部に侵入、破壊行為に邁進していた。いくつもの爆発と碎音が木霊する。
本局の外に飛ばされた命を救ったのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンだった。

（危なかった）

偶然、破壊されたブロックからすぐ近くの宙域に浮遊しているのを発見していなければ、彼女は助からなかっただろう。次元の海に漂い、エネルギーのうねりに翻弄される命は、もう少しで生命を失うところであつたのだ。

金の閃光の二つ名の通り、フェイトは神速で飛び、命の身体を抱き留めた。防御魔法のフィールドが、意識のない命を直ちに保護する。

（気絶しているだけか……）

フェイトの腕の中で、命はぐったりとしている。別に擦り傷以外の外傷は見当たらないから、安静にしていれば回復するだろう。
フェイトは命を医務室に連れて行った。

念のため検査を受けたが、異常は感知されなかった。

命の事を知らされた獅子王凱は、ひどくうろたえた。

恋人が危険な時に、傍で守ってあげられなかった事が激しい後悔を呼んだ。

だが、フェイトはそんな彼に自分を責めるな、と諭した。

いま、凱はジェイアークの為に大切な作業を行っている。遊星主と戦う為には、貴重な戦力の復活が待ち望まれているのだ。こんな状況で、四六時中恋人の身を守ってやれと、彼を非難できる者はこの本局にはいない。凱は凱にしかできないことに集中しろ、とフェイトは言った。

そのかわり、命は自分達が命懸けで守る、と金髪の執務官は約束した。

『わかった……俺もなんとか一刻も早く、こいつを目覚めさせてみせる』

「進捗具合はどうなの？」

『あと、もう少しなんだ。もう少しで、トモロの中枢にたどり着く』

凱の声には疲労が滲んでいた。驚異的なエヴォリユーターの能力とはいえ、それは凱の肉体にかなりの負担を強いる。それでも凱は、精神力を振り絞って進めていた。勇者は諦めない。

「すまんが、急いでくれ、凱！」

」が焦燥感を含んだ声を伝えた。

「奴ら、ジェイアークの周辺を集中的に攻撃しはじめた」

「ジェイアークの破壊が、彼らの目的なの!？」

「おそろくな……」

」はドックの入り口に立ち、ガジェットと交戦していた。

修復作業は中止させよう、という意見が挙がったが、クロノは修復は続行する命を下した。武装隊を動員して、ジェイアークの守護を貫く構えだ。

『フェイト、君もジェイアークの護りに参加してくれ』

「了解した」

フェイトは艦船ドックに駆け付け、ガジェットの撃退に加わった。

「ジェイアークの停止コマンドが解除されるまで、なんとしてでも持ちこたえないと……!!」

AMFを展開するガジェットとの戦闘では、魔導師達が相当手こずっている様子だった。

優秀な人材を擁する次元航行部隊ではあるが、エース級の魔導師がそう何百人もいるわけではない。空戦S+ランクのなのは・フェイトや総合SSランクのはやて達のような『化け物』レベルの魔導師を数多保有するには、様々な制約が部隊に課せられる。はやてはリミッター制限によるランクの下降という苦し紛れの裏技を使って、機動六課というチームを作ったのだ。

本局にいた部隊はそこまでの戦力では無かったが、それでもよく訓練された逸材揃いであり、フェイトの参戦もあって、徐々にガジェットを退けつつあった。なのはも自ら前に出て協力し、巧みなチー

ムワークで着実にガジェット達を倒していく。
なのはとフェイトは緊急事態につき、リミッターを外す許可を得た。
エース二人は、遺憾なく実力を発揮し、目覚ましい戦果をあげていた。

「ジェイアークは、私が守る！」

ソルダートJは気合いと共に、プラズマの剣を振るった。
ガジェットI型のアームケーブルが切断される。
魔導師ではないため、AMFなど意味はもたない。戦闘サイボーグの蹴りが、ガジェットの胸部を易々と凹ませた。
再度、光の刃を切れ込まれ、ガジェットは機能を停止した。

「むっ………！」

戦士の勘でJはそこを跳び退いた。一瞬の差が命拾いとなった。

高速で飛来したミサイルが、先程Jのいた場所を爆破する。

「これは………！？」

ガジェットの攻撃ではない。

「ピア・デケムの艦載機かつ」

その頃。

凱は戦いが起こっているのを知りつつ、出撃できない事に苛立っていた。

だが、自分にやるべき事があるのだ。

「待っている、ペンチノン……もうすぐ解放してやる」

全神経を集中し、トモロの停止コマンドを打ち砕かんと戦いを続ける。

「遊星主自らお出ましか……」

クロノはモニターに映りこんだ艦影に、苦々しく呟いた。

次元の海を越えて本局の前に現れた巨大空母。

ピア・デケム・ピットの威容は、遊星主のおごましさを象徴しているように思えた。

「空間転移とは……便利な技術ですね」

ローブを着た少女　アベルが隣に立つ人影に言った。

「お褒めにあずかり、光栄ですわ」

そう答えたのは、背の高い、美貌の女性である。彼女がガジェットI型の集団を本局へと送り込んだ人物だった。

「時空管理局。我々にどこまで抵抗できるでしょうか……」

「ところでアベル様、彼女も出撃させますか？」

「もう少し見物してからでもいいでしょう。ウーノ」

冷たい遊星主の微笑に、戦闘機人ウーノは、似たような笑みを浮かべて頷いた。

ピア・デケム・ピットには、無限に小型艦載機を生産できる機能がある。

ガジェットのような半自律型ではないが、体当たりも辞さない攻撃は厄介とも言えた。

その艦載機の群が空母から無数に飛び立っていく。
提督達は緊張の中、稼動可能な艦船を指揮し、戦陣を組んで激戦に備えた。

「ジェイアークを破壊させるな」

クロノは艦隊に命令した。

本局の周囲は、内外が戦場となり、力と力がぶつかり合う。

「ジェイアークは私のモノです。あなたがたの好きにはさせません……」

アベルの声には暗い情念がこもっていた。

「そろそろ彼女を向かわせなさい」

「かしこまりました」

ウーノが一礼し、かつてスカリエッティに対していたように、うやうやしく頭を下げた。

「さあ。お行きなさい ジェイアークを取り戻す為に」

ウーノは一人の戦士を転送した。

ガジェットの残骸が散らばる路の真ん中。

彼女は音もなく実体化した。

その場にいた武装局員達は、一様に驚きの表情を浮かべた。

「新手の敵か!!」

魔導師は彼女を囲むように配置につくと、直射型砲撃魔法を放とうとする。

「ISS」

彼女は、短く口にした。

「ライドインパルス」

電光のごとき攻撃だった。

目に追えぬ速度で彼女は武装局員を打ちのめす。

「……!？」

何が起ったのか理解できぬまま、倒れ伏す者達。

「こいつ、まさか！」

「戦闘機人……!？」

JS事件について知識のある者が、青い貌で身を震わせた。
そして

「はあああつ!!」

破壊の嵐を撒き散らす様に。戦闘機人トーレは、通路を塞ぐ魔導師
を瞬く間に打ち倒し、疾駆した。

目指すは白き箱舟 ジェイアークである。

第四話 襲撃（前編）（後書き）

後編に続く

第五話 襲撃（後編）（前書き）

今回のイメージBGM

緑山高校 - 甲子園編 -

「HANAOKA」

「Power Hits」

「Legend of KOSHIEIN」

勇者王ガオガイガー

「パリアツチヨ」

「デイスクX」

ほか

仕事で忙しくてつい執筆が遅れました……orz

第五話 襲撃（後編）

「おとなしく、観念しろ」

シグナムは、レヴァンティンの切っ先を戦闘機人に突き付けている。ガジェットII型の上に立ったクアットロは無言でシグナムと相対した。その表情にまだ余裕を崩してはいない。

ジエネシク・ガイガーとシグナムに挟まれ、クアットロは不利な様に見えた。

しばし、時間が凍りついた。

周囲ではガジェットと魔導師との戦いが続いている。

「これ以上罪を重ねてなんになる」

シグナムは投降を促した。

「せっかく自由の身になったのに、どうして投降する必要があるの？」

外套をはためかせ、クアットロは告げた。燃える瞳で睨みつける。

「私は……今度こそ、ドクターの夢を叶えるのよ」

ギリリ、と彼女の眼鏡が光ったような気がした。

「その前に。お前達を潰す　計画を成就させる儀式として、ね」

完璧なはずだった、スカリエッティと彼女の計画。

しかし、それはエース・オブ・エースの予想だになかった力の前に頓挫してしまった。

クアットロにとって屈辱的とも言える敗北だ。

「管理局の牢獄からあの方達に救い出され、今一度、夢を果たす機会を得た……」

（あの方達、だと？）

シグナムは軽く引つ掛かりを覚えた。

「そしてまた、罪なき人々を巻き込むのか」

シグナムの怒気を含んだ言葉も、クアットロにはくだらないざれ言だった。

「ふん……」

軽蔑の視線をベルカの騎士に送り、

「私達の計画の再始動の前段階として、六課全員を皆殺しにする

」

妙にうつとりとした、歌でも歌うような調子で、クアットロは話した。

「それからついでに、ドクターを裏切ったお馬鹿な子達を始末してあげるの」

その時の事を考えると、様々に残酷な想像が浮かび、たまらなくなつた。

「自分の姉妹たちを手にかけるつもりか」

外道め、とシグナムは思った。

「あんな馬鹿な子たち、もう妹でもなんでもないわ」

クアットロは鼻で笑った。

心の底から妹機を蔑視しているようだ。

「……ならば、ここで仕留めておく必要があるな」

レヴァンティンにカートリッジ・ロードを命じる。

「私を見くびらない方がいいわよ」

彼女は、不敵に発言した。

「いままで散々、姑息な手を使ってきた者の言葉とも思えんな」

ゆりかご戦において、安全な場所に隠れ、ヴィヴィオになのはを倒させようとした。参謀としては優秀だが、戦闘機人としての戦闘力は大したものじゃなかったはずだ。

「お前みたいな下っ端相手なら、別よ」

なのはやフェイト……あの、化け物エースがいないのなら。勝ち目はあると確信していた。

守護騎士についてある程度、情報を入手していたが、ベルカの騎士など時代遅れのガラクタだと認識していた。

クアットロは手を振り、ガジェットII型を呼び寄せる。

II型とIII型が八十機。

「雑魚をいくら呼んだところで……」

シグナムは跳ぶ。

護が同時に動いた。

挟撃するつもりだ。

「ふっ」

次の瞬間、クアットロとガジェットの姿が掻き消えた。

「奴のインフューレント・スキルか！」

先天技能シルバーカーテンには、大規模な幻術で対象を透明化する能力があった。

シグナムは消えた敵を探ろうとした。そこへ、何もない空中から熱線が発射される。ガジェットIIのビームだ。
すんでのところで回避し、体勢を整える。

（奴自信は自ら戦わない……あくまでガジェットに攻撃させるはず）

敵の位置が掴めないのでは、近接戦が得意な彼女には不得手だ。

（せめてテストロッサか主はやてがいればな……）

だが。

「僕には通用しない！」

ガイガーはクアットロには騙されない。センサーがその姿を捉えた。

「坊やこそ、私の力を知らなすぎよ」

クアットロはISを発動させた。

「！？」

ガイガーは突然、動きを停めた。

制御機構が働かない！

すぐに、推進力が失われた。

「うわあぁっ　　！！」

「電子機器を自在にコントロールする……それが私の《シルバー・カーテン》の真骨頂よ……ふふふ」

ほくそ笑む彼女の前から、巨人が墜落していく。

「くっ、間に合えっ」

とつさにガイガーを追いながら、シグナムは防御魔法を展開。

魔法がクツションとなり、地面に衝突しようとするガイガーをどうにか救った。

しかし、ガイガーは破損は無かったとは言え、横たわったまま指一本動かす事ができなかった。ガジェットから機体を守るため、さらにシグナムは結界でガイガーを包んだ。しばらくはもつだろう。

「《カインの遺産》とやらも、所詮は機械。私の力の前では無力も同然。」

シグナムは再びクアットロの声のする方へ飛んだ。

「あの巨人は用無しになった。次はベル力の騎士……お前をいたぶってあげる。」

「貴様。」

「八神はやての部下は一人残らず八つ裂きにする……。」

狂気とも呼べる妄念が、クアットロを支配していた。だが、それでもシグナムは怯まない。

「やれるかどうか、試してみるか。」

淡々と言い、レヴァンティンを構えた。

姿なき敵群に囲まれてもなお、冷静だった。

クアットロが想像した動揺は全く見られない。

「この……！」

クアットロはその態度に、怒りを覚えた。

一方。

海上隔離施設の中では収監されたナンバーズ達が、不安におののきあっていた。

「なあ、なんで……ガジェットが襲ってきてるの？」

「そもそもどうしやって動いてるんだ」

「あいつらって、ドクターや姉様の指示で行動してなかったっけ？」

「じゃあ、ドクターや姉様達は捕まってないのかよ」

「管理局が嘘ついた、と……？」

「私達を助けに来たのかな！？」

彼女達を別の場所に避難させるため、武装隊員二人が駆け付け、連れられて房を出た直後、ガジェットが通路の壁をぶち抜いて出現した。ガジェットは撃退されたが、ナンバーズ達の動揺は収まらない。彼女達は姉等が拘置所を脱走したことや、遊星主がそれに介在した事を知らないでいた。ましてや、姉のクアットロが彼女達を抹殺しようと考えているとは、思い付くわけもなかった。

「あいつら私達も破壊しようとしたよね……！？」

「ガジェットは半自律型の機械だったな。それが暴走しているのか

……？」

デイエチの言葉に、チンクが首を捻ったが、明確な答えは出ないまままだ。
とにかく、避難だ。隊員に先導されて彼女達は通路を先に進んで行った。

「ルールー……やばくないか、なんか」

犯罪者の更正を行う施設でもあるこの建物には、レクリエーション施設もあった。そこをルーテシアはアギトに付き合っで散策しているところ、ガジェットの影響に見舞われた。二人は慌てて自分達の房へ戻ろうとしたのだが、その途中でガジェットI型が地下から出現し、進路を阻んだ。

戦闘の余波で、周囲に熱線や炎が飛び散ってくる。

「どうなってんだよ……一体っ」

「……わからない」

ルーテシアは呟いた。

まさか、別の宇宙から来た者達による計略だとは夢にも思わない。

「ヤバイよ、ガジェットがこっち向かってくる」

「……！」

どうする？

全ての能力が封じられているため、ガリユーや白天王を召喚する事も不可能だ。

アギトも炎熱能力が使えない。ならば。

「逃げるのよ、アギト」

ルーテシアは踵を反して走り出した。

ガジェットの一撃をよけ、施設内に逃げ込む。

（私達の様子は常に監視されてるから……すぐに助けが来るはず）

それまでに、ガジェットに捕まらなければ……。

ルーテシアとアギトは小さな身体を必死に動かし、逃走した。

その場にクアットロが居れば、「私達を裏切った罰だわ」と言ったかもしれない。

ガジェット三機。威嚇するように、ナンバーズ達に凶器を向ける。

「おいっ、早くそいつを倒せよ」

ウェンディがガジェットと戦っている隊員に叫んだ。

遭遇したガジェットは五体。

隊員は各一機と交戦中だ。

「ISが使えないって時に……」

能力の封印で、反撃する余地がない。戦闘機人だから、そうやすやすと破壊はされたりはしないだろうが、それも時間の問題だ。

「畜生、狂いやがって。目を覚ませ、私達は仲間だろ」

かつてドクターに仕えた仲だというのに……。

「聞く耳は持っていないようだ！」

繰り出されるアームケーブルの打撃を回避して、セインが言った。

「デープ・ダイバーが使えれば脱出もやりやすいんだけど……」

なぜ。執拗に私達を狙う？ やはり狂っているのか。

「妹達は」

チンクが皆の前に出た。

「姉が守る……！」

例え《ランブル・デトネーター》が使えなくても、戦う。大切な妹達を傷つけさせないという気迫が、小さな背を大きく見せていた。ソルダートと同じく、守るべき者の前に立ち、不動の構えをとった。

「チンク姉……！」

アームケーブルが、力を封じられた戦闘機人に襲い掛かる。

電子機器を狂わすクアットロのISによって、ガイガーは金縛りにあつたかのように、自由を喪失していた。

（身体が動かない……）

唇を噛んで、もがく護。

（くっ。僕じゃ駄目だったのか……）

これが凱兄ちゃんなら、エヴォリユーター能力で機体の制御を取り返していただろうか。

（本当の勇者なら……こんな攻撃に……）

びくとも動かぬ四肢に焦り、煩悶する。

（ギャレオンへのフュージョンは……やっぱり凱兄ちゃんできゃ、駄目なのかよ!?!）

ギャレオンの意思是、そんなことはないと伝えてきたが、護の胸には悔しさでいっぱいだった。

上空ではシグナムが戦っている。早く、手助けをしに行きたい。だけれど……

（僕だって、凱兄ちゃんみたいに……！）

護は氣力を振り絞った。

Gストーンに意識を集中する。

（勇氣ある限り！Gストーンは無限の力をくれるんだ……！）

Gストーンが輝きを増していく。

少年は、無限情報サーキット・Gストーンの奇跡を願った。

かつて、物質昇華に苛まれた勇者を、超人エヴォリューダーへと進化させた命の宝石を。

音なき咆哮がガイガーから響いた。

「はあああああっ……！」

ジェネシック・ガイガーの額のGストーンが、鮮やかに光を発した。

「……………なっ……！」

まばゆい緑光の放射を下方に見て、クアットロが驚愕する。

「馬鹿な。私の……」

澄んだ碎音と共に、ガイガーが立ち上がった。

折しも、曇天の空が緩やかに晴れていき、一条の陽光が地上に差し込んだ。

まるで祝福のように、太陽がガイガーを照らす。

「そんな。シルバー・カーテンの力が……」

クアットロは激しく狼狽した。あれほどの余裕が吹き飛んでいる。

「またか」

私の目的はあと一步のところで阻害されるのか。

胸中で罵り言葉を叫ぶ彼女に、ガイガーが跳躍した。

「次は負けない！」

ジェネシック・クロウの攻撃は、的確にクアットロの乗るガジェットを引っ掛けた。

「しまった!!」

クアットロはガジェットから放り出された。衝撃に彼女は透明擬装を解除する。

自力で飛行せざるを得なくなった。

「ちっ……」

姿を現した戦闘機人に、シグナムが向かう。

「紫電一閃！」

神速の斬撃が叩きこまれる。
が、シグナムが斬ったクアットロは

「幻影か……！」

以前にも使った手だ。

クアットロは幻影を操るのを得意とする。

「ふん。なまくらデバイスなんかに私がやられるものか」

数十人のクアットロが、一斉に言った。

「騙されちゃだめだ。僕が」

護がシグナムに近寄った。

「……クアットロ、貴様こそベルカの騎士を舐めているぞ」

ガシュッ！！

カートリッジ・ロード。

「見せてやろう。古代ベルカの騎士の本当の力を……！！！」

「滅びた文明の騎士風情が　なにを」

「烈火の将にして、剣の騎士シグナム、参る！」

レヴァンティンが炎を纏う。

シグナムの先天資質。炎熱変換である。

「ふん」

クアットロはシグナムとガイガーを、ガジェットに包囲させる。幻影を使いその数を増やした。

「まずはお前達の屍を築いて、八神はやてを絶望の淵へ落とし込んでやるわ　そして、殺す」

「させん！」

「とつとと、死になさい　　！！」

ヒステリックな絶叫を合図に、四方からガジェットが迫り来る。

「陳風一閃　　！」

《Sturmwind》

シグナムが、レヴァンティンを振り抜いた。

「やった！」

護がはしゃいだ声を上げた。

シグナムの一撃はガジェットを数機まとめて葬る威力を見せたのだ。

「くつ。距離をとって集中的に熱線を浴びせるのよ！」

ガジェットから雨のようなビームの攻撃が撃ち込まれた。

「うわっ！」

ガオガイガーと違い、ガイガーは防御能力を持たない。それゆえ彼の分まで、シグナムが防御しなければならない。バリアではないフィールド系ではガードがしにくい。

「レヴァンティン!!」

《Schlangeform》

刀身がシュベルトフォルム（剣）から、シュランゲフォルム（鞭）へ、形状を変えていく。

《Schlangebeissen》

糸玉が解けるように、長い、刃の連結した鞭と化したレヴァンティンから、近・中距離用攻撃が繰り出された。

掬い上げるような、動作の後に、ビームごと、ガジェットが爆散していく。

「なんだ。この魔力は カートリッジ式とは言え……」

「生憎だが、事前に主はやてに頼んでリミッターは外させてもらった」

普段は魔導師ランクを下げるため、はやての部隊ではリミッター制限をかけられていたのだ。しかし、未知の遊星主相手であるため、隊長陳や守護騎士達はリミッターを外す許可が出ていたのである。

「す、凄いや！」

歓声を上げた護は、スラスターを吹かせガジェットに立ち向かった。

「僕も頑張らなきゃっ」

ガジェットを鋼爪と拳で打ち崩す。

「ガジェットは僕が引き受ける。だから貴女は」

「承知した！」

シグナムは加速した。

クアットロを撃墜するつもりだ。

「ひっ……！」

怯えた彼女は、シルバー・カーテンで再び透明化しようとした。

「そうはいかん」

シグナムはレヴァンティンを鞘に容れていた。
クアットロがいた位置まで一気に飛翔する。

「カートリッジ・ロードだ!!」

《Jawohl》

カートリッジ三本消費。

《Explosion!!》

鞘に収めたままロード。
魔力が刀身に圧縮される。

「わ、私を守りなさい」

クアットロはまたガジェットに命じて、我が身を守る盾にした。

《Schlangeweisengriff》

鞘から抜かれた時、レヴァンティンはシュランゲフォルムになって出てきた。

その連結刃は炎を宿していた。

空を火焰の鞭が疾^{はし}る。

空間全体を切り裂くような。
凄まじい破壊だった。

「そんな……！」

ガジェットは碎かれ、微粒子となって消滅した。

だが。そんな仲間達の敗北も、ガジェットを退かせる事はできなかった。

感情を持たぬ機械故に、怖れもなく騎士に殺到する。

「飛竜一閃……！」

放たれた技が、レプリジン・ガジェットの群れを塵埃に還す。

クアットロまで、もう目の前だ。

「覚悟しろ」

紫電一閃を撃つ構えで、シグナムは上空から襲い掛かった。

「ひえっ」

情けない声を発し、クアットロは逃走する気配を見せた。

ISを発動させ、今度こそ透明擬装を

「うつ!？」

追撃するシグナムに向かって、炎が直撃した。

まるで、クアットロと彼女とを分かつようなタイミングだ。

炎熱変換の資質を有するシグナムには、何らダメージを与えるものではなかったが、氣勢を削ぐ事には成功していた。

「何者だっ」

シグナムが誰何した。クアットロはその正体を知っている。

仰いだ目に、蜂に似たシルエットが逆光の中に浮かび上がった。

「眼鏡ちゃあん。小物相手になにを手間取ってるの？」

その女は際どい衣装に身を包み、巨大な針を尻から生やしていると
いう、異形の姿の持ち主であった。

「ピルナス！」

「そろそろ、面白い事が始まる時間よ。戻ってらっしゃいな」

「でも、こいつらを」

「いつでも潰せるでしょ、こんなの」

シグナムを一瞥して、ピルナスは答えた。明らかな蔑みを含んだ口調であった。

悔しがるクアットロだったが、内心では、命が救われた事に安堵している。

「どうして、お前が！？」

ガジェットを片付けたガイガーがシグナムに合流した。

クアットロの隣に遊星主ピルナスを認めて、護は驚いた。

「ラティオ……久しぶりねえ」

ピルナスはカインの息子に、懐かしがる様な声で呼び掛けた。

「残念ながら、お前の相手は別に用意されてるの。遊んであげられなくてごめんなさい」

なにを企んでいる！？

護は問い質そうとした。

「間もなく、アベルの計画したフェスティバルが始まる。大人しく

待っていないさい」

「それは」

ピルナスはクアットロを促し、戦場から離れようとした。

「ラティオ。あの子猫ちゃんによろしく言っといてね。このピルナスがまた、たつぱりいたぶってあげるって。ふふふふ……！」

遊星主は、ルネへの伝言を預ける。

「次こそは、お前達を必ず」

そう言い残し、クアットロが遊星主ピルナスと一緒に上昇していく。

「待てっ！」

護とシグナムが追いかけるが、ガジェットの残機が邪魔をした。

「退け！」

複製された機械兵器は二人の攻撃に、あっさりと倒される。

しかし。その時にはもう遅く、敵影はすでに天空の彼方に消え去った後であった。

「く……」

苛立つシグナムだったが、ふと、地上の騒擾が視界に入った途端、あっとなった。

「そうだ、施設はどうなった!？」

ギンガ達なら大丈夫だと思うが、クアットロの妹に対する憎悪を目の当たりにした彼女は一抹の不安に駆られる。

「私は隔離施設を救いに行く。お前は残ったガジェット共を！」

「わかった!!」

シグナムは急ぎ、施設上に降下していった。

魔力で強化された打撃が、ガジェットの胴を貫いた。
鋼鉄を突き刺す貫き手。

「貴様……タイプ・ゼロ」

己の大破を覚悟していたチンクは、呆氣にとられた顔で、ギンガを見上げた。タイプ・ゼロとは、以前、ギンガがスカリエッティの13番目の戦闘機人として協力していた時、彼らから受けていた呼称である。

「よかった。間に合った」

続けざまに蹴り技で一体を潰し、最後も髪をなびかせたギンガは、シューティング・アーツで鮮やかに打ち倒した。

「ギンガ！！」

「ふう、壊されるかと思ったぜ」

「助かったあ」

「みんな無事みたいね」

ギンガは笑顔でナンバーズ達を見回した。

「ギンガ、早く彼女達を転送ポートへ」

「ええ」

武装隊員の言に、ギンガは頷いた。

「すまん。助かった」

チンクが礼を言った。

「私はいわば貴女達の保護者だしね、当然よ。それより皆着いてきて、脱出するわよ」

「どこに？」

ノーヴェが疑問を口にした。

「アルトセイムよ。その地下にここみたいな隔離施設があるの」

「山の中かよ。こっちの海のとこのがいいのになあ」

と、海上の景観が気に入っているウェンディが零した。

「一体、何が起こっている？あのガジェット共は……あんな消え方をするなんて」

「あのガジェットは貴女達の仲間だったものとは違うわ」

と、ギンガはチンクに答えた。

「じゃあ、つまり」

「ガジェットは複製なの。それを創りだしたのが、別の世界から来た遊星主とか言う存在よ」

一行は立ち止まる。またガジェットが現れたのだ。ギンガ達はまた戦い、粉碎した。

「遊星主って？」

セインが訳がわからぬ表情で訊いた。

「とんでもない質量兵器を使う、常識外れの連中よ」

「ゆりかごみたいなの？」

「ゆりかご以上ね」

ナンバーズ達は絶句した。

「後で映像記録を見せてあげる。信じられないわよ、きつと」

ギンガは軽く苦笑しながら言う。戦闘機人は半信半疑で、彼女の後ろを着いて行く。

やがて。

ずううん、という、鈍い音が遠くから振動とともに聞こえてきた。

空での戦いは護と二名の空戦魔導師に任せたシグナムは、いまだ地上に数多くうごめくガジェットI型に剣を向けた。

II型、III型はほとんどがシグナムとガイガーに駆逐されているため、急務は拘留中の犯罪者達と施設の救援である。

武装隊は健闘していたが、一気にガジェットを殲滅する事はできなかった。

「あれは」

くぐもった爆音がした。

見れば、施設の奥まった場所から炎と煙が吹き出ている。

「あそこは転送ポートだぞ」

『警告！！転送ポートはガジェットの攻撃で破壊された』

呻く声を皆は発した。

『本局やミッド各地の中継ポイントに転送する事ができなくなった……』

転送ポートの警護に当たっていた隊員は、自責の念に満ちた顔で、そう告げた。

「なんてことだ」

シグナムは建物の中を駆けながら、ギンガ達を探した。

拘留者を転送ポートから逃せる事が不可能になったため、別の手段をとる必要がある。

そこにヴィータから連絡が入った。

『おい、シグナム。大丈夫か』

「ああ、なんとかな。だが、転送ポートが破壊された。我々は自力でミッドまで拘留者を護衛して運ぶ」

『あたし達は、首都の敵をほぼ掃討した。いまそっちに向かって通信モニターには、ヴィータが海上隔離施設に向けて高速で飛んでいるのが映っている。』

『それと、はやてが海上警備隊の艦をそっちに派遣するよう、要請している』

「助かる」

『あたしももうすぐ着く。それまでしっかり頼むぜ』

そう言うと、通信を切った。

シグナムは苦笑する。

部下の前では上官としての口調を徹底している彼女だが、同じ守護騎士同士だと昔の話し方になった。

「ん!？」

破壊の爪痕が刻まれる施設内部。その一画に、倒れた武装隊員が転がっている。シグナムが駆け付けると、彼は気絶しているようだった。肩と背中にダメージを受けた傷がある。そこから近い場所で、隅の部屋のドアをアームケーブルで叩き壊しているガジェットがいた。

バキッと頑丈なドアが裂け、破片が散る。

部屋の中から大きな悲鳴が聞こえた。聞き覚えのある声だった。

「アギト!」

シグナムはガジェットの両断し、部屋の中を確認した。

「シグナム!」

ルーテシアとアギトが机や椅子で、バリケードを築こうとしている

所だった。

「二人とも、怪我はないか!？」

「あたい達はなんともないよ」

アギトの言葉に、ルーテシアが無言で頷く。

「でも、あたい達を助けてくれた局員の兄ちゃんが……」

あの倒れていた魔導師か。

シグナムは二人を連れ出すと、ガジェットに敗れた隊員を介抱した。

「面目ありません……」

息を吹き返した若い武装隊員は、バツの悪そうな表情で言った。

彼は、まだ魔導師として管理局に採用されて間もない新人で、AMF下の戦闘には不慣れだった。

ちなみに、デバイスは汎用的なストレージ・デバイスだ。

「シグナム。あたい達はどうしたら」

現状を聞いたアギトが、ルーテシアにしがみつきながら問うた。

「とりあえず、私はギンガや戦闘機人達を助けに行く」

「あたい達も一緒に」

「危険だぞ。これから行く区画はガジェットがまだ暴れている」

「貴女と一緒にの方が、安全だわ」

と、か細い声でルーテシアが言った。幼い容姿に見合わない、落ち着いた拳止であつた。

「貴女方に着いて行つた方が生存率が上がると思う」

シグナムは二人は敵の少ない外部で守つて貰おうとしたのだが、自分の回りにいる方が心配する必要があると考えを変えた。

「わかつた。私達の側を離れるなよ」

「ああ！」

アギトが元気に返してきた。

ルーテシアはこくこく、首を振る。

もう一人の武装隊員と共に、施設深く入って行つたギンガを追つてシグナムは向かつていった。

少し時間を巻き戻すと。

ナンバーズをすんでのところで救つたギンガは、戦闘機人達を逃がすため、転送ポートに急いでいた。

だが、すぐ後に転送ポートがある区画がガジェットにより破壊された事を知り、行き先を変更する。

「緊急用の脱出通路から外に出るわ」

シグナムから通信が入った。

『私はルーテシアとアギトを保護した。そちらはどうだ？』

「ナンバーズ達は救出しました。ですが転送ポートが使えないので、魔法でここから脱出するしかありません……」

『とは言え、クアットロがいる。転送魔法だと妨害される可能性があるな』

「クア姉もいるの!？」

と、ノーヴェが目丸くして尋ねた。

『奴は逃げた……お前達を　いや、その事は後で話す』

姉が、自分の姉妹を抹殺するつもりだった、とはシグナムといえど、この場で口にするには躊躇われた。

『後はガジェットだけだ。ヴィータ副隊長達もこちらに向かっていく。我々だけでどうにかできるはずだ』

戦い慣れした魔導師なら、ガジェットはもはや恐ろしい敵ではない。

『ギンガ、いまどの辺にいる』

ギンガは自分達の現在位置を伝えた。

シグナムは合流地点を定めてそこで落ち合おうと、提案した。

「解りました。では」

ギンガは合流する場所を指定した。了承したシグナムは通信を切る。

「ルーテシアお嬢様、無事だったんだなあ」

セインがホッとした様に呟いた。

スカリエツティの元にいた時、ナンバーズ達はルーテシアを「お嬢様」と呼び、敬ってすらいた。それは変わらずに至っている。

ガジェットとの遭遇戦をくぐり抜け、ギンガとシグナム達は合流を果たした。

拘留中だった他の犯罪者達も、なんとか護衛されて建物を脱出していた。

一方。

時空管理局本局。

凄まじい殺気を放ち、新たな敵が武装隊員達を打ちのめしていた。

がっしりとした体格をした、短髪の女。

光の翼を手足に生やし、縦横無尽に疾走する。

「トーレ!？」

スカリエッティのアジトで戦った戦闘機人の姿を見て、フェイトが驚いた。

では、やはり衛星軌道拘置所を襲い、戦闘機人を逃亡させたのは遊星主なのか。

「しかも、今度は本局にまで……」

「主命により、ジェイアークを貰い受けに来た」

「なんだと!？」

」が怒った声を上げた。

艦船ドックの発着ポート。

そこに、ジェイアークを守るため戦力を固めて配置していた。

「アベルの差し金か」

」がプラズマの剣を腕に宿して立ちはだかる。

「ジェイアークは貴様らには渡しも、破壊もさせん」

「面白い……」

異界の戦闘機人と戦うのも一興だ。

「J、そいつは強い。気をつけて」

フェイトの警告が飛ぶ。

「アベルに力を封じられた失敗作が私に敵うと、な……笑止だ」

トーレはISを発動。

「ライドインパルス

！！」

トーレの肉体が音速に匹敵する速度で加速した。

Jも邀撃の態勢に入る。

フェイトも加勢するため、真・ソニックフォームで跳ぶ。

《Z a m b e r F o r m》

カートリッジをロード。

「デイドとの連携がなければ！！」

スカリエッティのアジトでの戦闘とは逆の状況だ。フェイトは勝利を確信する。

輝く刃が、トーレを挟撃した。

「ぬんっ……！！」

人間の動きを越えた体捌きで、二人の攻撃を受け流す。

だが。

「貴女の攻撃は、あの時に見切っている!!」

フェイトは華麗にライドインパルスの翼を避け、大剣となったバルディッシュを打ち込んだ。

「ぐあつ」

空中で、トーレが傾いだ。
腕を斬られた。

「もらった!!」

Jのラディアントリッパーが、死角からトーレを切り裂く。
脇腹に斬撃を受けたトーレは、痛みに怯まず蹴りを放ってくる。
Jは蹴りで受け止め、中断から斬りつける。

「ちいっ」

トーレがライドインパルスの翼で弾き、床に降り立った。

「ソルダート並の能力はあるようだな!」

Jは久しぶりの白兵戦に、熱くなっていた。

「トーレ。大人しく捕まる気はない?」

フェイトは職務上、投降を呼び掛けるが、トーレは無視。

「ならば。叩きのめせばよい!」

」が疾った。

フェイトはプラズマランサーを起動させ、トーレに照準を合わせる。
戦闘機人は待ち構えた。

「貴女の方では難しいようですね」

「はっ!？」

トーレは振り向いた。

そこに、ローブをまとった幼い顔立ちの少女がいた。

「アベル……!」

」が足を止めた。

遊星主の指導者とは、この世界において初めて遭う。

「アベル、邪魔をするな」

と、トーレは釘を刺した。

戦闘機人は忠誠心まで遊星主に捧げたわけではないようだ。

「私は、彼らを圧倒する力を授けに来たまでですよ」

「どうやって、ここに」

フェイトがランサーをセットしたまま、アベルに問うた。

「ガジェットとやらが派手に活躍してくれたおかげで、楽に侵入で

きましたよ……ふふ」

「なんですって」

と、小さく呟いたのは、別の場所でガジェットと戦うのはだった。ドックの周囲の光景は、モニターで把握出来るように通信を繋いでいた。

「J、これを覚えていますか？」

アベルは懷から何かを取り出して訊いた。

「そ、それは　！？」

「ふ。貴方が忘れるはずありませんか」

Jは押し殺した声で、

「なぜそんなものを持っている」

「懐かしいでしょう？」

アベルはトーレに近寄ると、一瞬でその物体を彼女の額に押し付けた。

「あ……ああ……っ！」

「やめろっ……！！」

Jは制止の叫びをあげた。

しかし、もう遅い。

トーレの身体が変化していく。

「ファイアー!!」

フェイトは得体のしれぬ恐怖を感じて、プラズマランサーを撃つ。

アベルはそれを自分の体から生やした、無数の火砲で、ランサーを相殺してしまった。

「うそっ……」

アベルはJに猫撫で声とも呼べる声で、

「さあ、J。貴方に今一度、戦士の使命を授けましょう。死ぬ前に、ね」

「貴様」

「創造主としてのせめてもの情けですよ。……存分に戦いなさい。」

高笑いをあげ、アベルは飛び去ろうとした。Jが追おうとする。そこへ

「J!!」

巨大な打撃が振り落とされた。Jは跳躍して回避。フェイトは、冷や汗を垂らした。

「こいつは……なんなの？」

と、トーレの成れの果てを見上げた。

「く……アベルめ」

」は歯ぎしりした。

首魁は逃したが、手駒となった機械兵器はあらかた消えていた。

「気になるのは、あの遊星主が言った『面白い事』」

「本局にも遊星主が侵攻していると言いますし、早くなんとかしないと……」

シグナム達は荒れ果てた海上隔離施設の一隅で、管理局の艦が来るのを待っていた。

護もフュージョンアウトし、ガイガーはギャレオンに戻っている。そこにヴィータらも駆け付け、施設に侵入したガジェットは全て撃破していた。

「一体、あいつら。何を企んでいる？」

ヴィータはシグナムの横で、苛立だしげに言った。

「わからん……それより、本局の方も心配だ」

「そうだな。なのは達が……」

それは突然だった。

『ミッドチルダの諸君！！ 元気にしてたかね？』

若い男の声が、大音声で轟き渡った。

「なっ、なんだ!？」

「シグナム空尉、クラナガンからの中継を」

『シグナム、これはどういうことや？』

地上本部から、はやてが青ざめた顔で困惑した思いを口にしてきた。通信モニター越しに、シグナムはわかりません、と答えた。彼女に何が起きつつあるのかなど、推測できるはずもない。

困惑の原因は、首都から送られてきた映像にある。ガジェットはすでにいなくなり、閑散とした町並みに、一人の男が立っている。

『これは、夢か……』

はやての表情が強張る。

「そんな、まさか」

ギンガも瞠目した。

「なんでこいつがいるんだよお!？」

ヴィータがモニターを凝視する。

白衣を着た、長身の男。

生けるロストログア。

「ジェイル・スカリエッティ……」

「馬鹿な、死んだはずだろ、奴は!」

その光景を、クラナガン市街内で見ていたゲンヤ・ナカジマ陸佐は、思わず声を荒げた。

「俺あ、あいつの首なし死体の証拠画像を、この目で確かめたんだぞ……」

フェイトによれば、スカリエッティは遊星主ピア・デケムの鎌に刈り取られたはず。

「なぜ、奴が再び」

護には、心当たりがあった。
おそらく……

「あの人も、レプリジンなんだ。きっと」

どんな魔導師にも 例えば、プレシア・テストロッサの様な
にも、死者の完全蘇生は不可能だった。
もし、可能性があるのなら、スカリエッティのレプリジンを遊星主
が作り上げた、ということだ。

「ピサ・ソールはデータさえあれば瞬時に複製を創造できる……」

ガジェットのレプリジンが造れるのなら、スカリエッティのレプリ
ジンを造ったとても不思議ではない。

『さて、諸君。これより私の実験を再開する。究極の生命体を造る、
という、ね』

くくく、と楽しげにスカリエッティが笑った。

『私が考えた祭は、まだまだこれからだよ』

「おい、あれ……」

スカリエッツィの隣に、逃げたクアットロとピルナスが現れた。

「あいつら！」

『さあ、この街全てを蹂躪しなさい』

ピルナスは掌に奇妙な物体を握っていた。
まがまがしい紫色のそれを、スカリエッツィに取り付ける。

『楽しいお祭りを始めましょう！』

「なんだよ、あれは!?!」

ヴィータが喚く。

護は信じられないという面持ちになった。

「どうして　それを……」

『おお………』

歓喜に堪え難い、といった表情でスカリエッツィが両手を広げた。

「ねえ。ドクター、どうなっちゃうの？」

混乱してウエンディが言った。

「人じゃ、無くなる……」

護はぽつんと、呟いた。
その髪が逆立ち、緑に輝く。

「妙な反応が……？」

戦闘機人の目で分析していたノーヴェが、未知の要素をスカリエツ
ティから感じとった。

「どういう事です」

ディードが訊ねる。

「……すぐにわかるよ」

厳しい眼差しで、モニターを見ながら、護は答えた。

「あつ……！」

普段は感情を表にしないオットーが、驚愕した。

紫の石とスカリエツティの肉体が融合し、瞬く間に膨張した。その
近くで、クアットロが恐怖に染まった瞳を主に向けていた。

『この世界のマイナス思念を持った有機体を、全て喰らいなさい！
Zの力よ！！』

『ぞおおんだあああああ！！！！』

禁断の、滅んだはずの力が、また解き放たれていく。

「なぜだ、なぜなんだ　　! !」

護は遊星主に対して、激しい怒りの感情を発露した。
その叫び声に同調するように、ギャレオンが吠えた。

そして、悪夢が蘇る。

第五話 襲撃（後編）（後書き）

い s t r i k e r s キャラ出てないぞ、て感じですが、許してください

挿入歌（前書き）

元ネタはダ・ガーンです。

無印A's仕様の替え歌です

挿入歌

星の未来へ

翼 空に向かうように 君もいつか飛び立つんだ
できるわ 信じてるの

大人達が忘れてる 力を今解放とう
君にもできるはずさ

でも 私一人じゃそんなに 強いわけじゃないんだ
だけど杖がもし 今すぐに力を貸してくれたら

We Can Fly この星は
全力のスターライトブレイカー
なのはさん 立ち上がれ
果てしない未来の光へ

街のとても大切な 人達へと危険がくる
その時 どうするだろう

もしも逃げてしまったら
私はきつと 悔やむだろう
怖い の 本当はね

でも 勇気を振り絞って 君と戦うだろう
だって フェイトの事 救いたい

君を無くしたくないよ

We Can Fly 友達になりたいと 翼を広げ
なのはさん 想い込め
手を伸ばし 希望の未来へ

We Can Fly 風の中髪飾り
気持ちを伝え
なのはさん 別れても
再会を笑顔で誓って

挿入歌（後書き）

執筆は遅れますごめんなさい

第六話 犯罪者ゾンダー（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ゾンダー」

「首都戒厳令」

レジェンド・オブ・クリスタニア　　くはじまりの冒険者たちく
「Eddy」

ほか

第六話 犯罪者ゾンダー

ゾンダーとの連戦。

ゾンダリアンとの激闘。

原種との苦闘。

Zマスターとの死闘。

そして、機界新種との、最後の戦い……。

天海護が決して忘れることのない、原種大戦の記憶。

苦心惨憺たる思いで勝利を手にした護たちを嘲笑うかのように、滅んだはずの存在が復活したのだ。彼は、はやてのように、悪い夢を見ているような気持ちになった。

「アベル……君は」

広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティを素体にゾンダーが成長していく。機動勇者隊の面々は、その異様さに慄然とした。

「あれが、ゾンダー……」

巨大な機界生命体を見て、はやては唾を飲み込んだ。あんな巨大なモノが暴れたしたら、街は

「くっ。総員、ゾンダーを迎撃せよ！」

はやては部隊にゾンダー攻撃を命じた。

『ぞおおんだあああー！』

スカリエッティ・ゾンダーは周囲の有機物や無機物を吸収し、さらに巨大になる。

そのシルエットが不定形なものから金属的な人型ロボットへと形態が変わる。

およそ30メートルはあろうかという、白と黒を基調とした配色のゾンダーロボ。

ゾンダーロボは、ゆっくりとした動作で、動きはじめた。

「アイツを止めるっ！」

スバルはマッハキャリバーで駆け出した。

「おおおおっ！」

スバルが、リボルバーナックルを唸らせて巨人に向かう。

そんな彼女をティアナが誘導弾で援護する。

「我等も続けっ」

他の部隊員達も、一斉に砲撃や打撃をゾンダーに与えた。

だが。

「効かない！？」

スカリエッティ・ゾンダーは無傷のまま立っていた。

「バリアやて……！？」

ゾンダーはバリアを使った防御ができる。

原種大戦でも通常の火器や武装は通じなかった。

しかも厄介なことに、ゾンダーロボはスカリエッティを素体にして
アンチ・マギリング・フィールド
いるためなのか、AMFを発生させているのだ。

これでは魔法を分解されてしまう。

そして、ゾンダーはただやられているだけではなかった。

ミサイルやビームを撃ち、機動勇者隊に反撃を始めたのである。

「あかん。街が破壊される」

戦闘区域にある建物が、攻撃の余波で次々に崩壊していく。

隊員達は結界魔法や防御魔法で被害を食い止めようとするが、焼け
石に水の状態だった。

「デイバイディングドライバーがあれば……」

と、護は悔やんだ。

GGはゾンダーとの戦闘で市街に被害が及ばぬよう、デイバイデ
ィングドライバーを使用していた。空間を湾曲させ、デイバイデ
ィング・フィールドを造りだして閉じ込め、ガオガイガーはゾンダー
を仕留めてきた。

G ツールと呼ばれるその装備は、別の宇宙 三重連太陽系に置き去りにされたG G G 艦隊が持っている。

（ここに、G G G のディビジョン艦が一隻でもあれば……！）

どれほど助けになっただろうか。

護が焦慮する前で、魔導師達は強装結界をゾンダーのいる空間全域に張った。

これは、武装隊が捕捉した魔導師を逃がさずに捕らえる為に使う手であった。

結界内部に閉じ込められたスカリエッティ・ゾンダーだったが

腕から放つ赤いビームが、強装結界を貫いた。

強烈な熱エネルギーが、大気を揺るがした。

「そんな……！？」

その一撃は、高町なのはの《スターライトブレイカー+》や闇の書の《破壊の雷》にも匹敵する程の威力を持っていた。

結界を撃ち破ったゾンダーは進撃を開始、破壊を行う。

「魔法が通じなくても、これなら……！！」

スバルは勢いをつけて疾走。

ウイングロードでゾンダーに肉薄する。

「振動拳!!」

スバルの固有技能は魔法による攻撃ではない。それゆえにAMFには影響されず、ゾンダーにぶち込まれる。

スバルの拳がバリアに衝突するが、力ずくで押し切った。

「うおおおおっ!!」

バリアを砕き、ゾンダーロボの装甲に打撃を食らわした。

スバルの接触兵器《振動破砕》は機械に対し、最も効果を発揮する。振動波により目標となる物質を粉砕。その力はスカリエッティの戦闘機人といえども敵わない。ゾンダーは機界生命体すなわちロボットでもあるため、外装や内部の機構は共振波による破壊現象を免れなかった。

GGGの獅子王雷牙博士や高之橋両輔博士がここにいれば、スバルの振動破砕が、マイク13のディスクXと同じ原理の攻撃だと見抜いただろう。

さらに、それは地球にいる未知の変身生命体ソムニウムの戦闘形態ネフラの必殺技「サイコヴォイス」とも共通していた。

「やった!!」

ゾンダーロボの上腕が砕け散り、周りから歓声があがった。

「ああっ……!!」

だが、しかし。

ゾンダーは欠損部分を瞬く間に再生させた。

「なんやて!？」

はやては目を疑った。

周りにある様々な物質を取り込むゾンダーは、有機生命体と機械生命体が融合した機界生命体だ。その身体は変幻自在に変化した。

コア（ゾンダーメタル）さえ無事ならば、いくらでも機体を再生することができるのである。それは、彼らの上位存在であるゾンダリアンやマスタープログラムたる原種　Zマスターにも当て嵌まる。

「あの再生能力は、まるで……」

遙かな昔の、だが忘れ難い記憶が、はやての脳裡に甦った。

「闇の書の……防衛プログラム　」

だが、ゾンダーの再生速度は、防衛プログラムの再生能力より上回っている様に見えた。

機械でありながら生物のように動く。流動的なその姿にははやては戦慄を覚えた。

「ガオガイガーや超竜神でないと倒せない……」

原種大戦での経験が、護にそう言わせた。

「なあ、護くん。その、ガイガーでなんとかできんか？」

「ガイガーじゃ……無理だと思います」

はやての問いに、護は首を振って答えた。

「ガイガーだけの力じゃゾンダーロボには」

確かに、ジェネシック・ガイガーは原種大戦時のガイガーよりも優れた運動機能を持っているが、それでもガオガイガーには劣るだろう。

ギャレオンと合体したマシンのGSライドが組み合わせり、強大な出力が得られるのがファイナル・フュージョンした勇者王なのだ。ファイティング・ガオガイガーであれ、ジェネシック・ガオガイガーであれ、持ちうるパワーはガイガー単体の比ではない。

しかし、ジェネシックマシンが完全修復を終えていない以上、ガオガイガーの出撃は不可能だった。

でも……

「でも、なんとかしないと……」

ゾンダーメタルを抽出さえできれば 浄解できるのに……！
護はモニターに映ったゾンダーを、歯痒く思いながら凝視した。

「たとえ、どれ程強い敵が出たとて、諦めるわけにはいかない。騎士として、な」

シグナムが、そう呟いた。

側にいた護が、その顔を仰いだ。

シグナムの双眸に、静かに闘志がみなぎっている。

ゾンダーの力を見せ付けられてもなお、シグナムの戦意は失われてはいない。

「私達も、戦うぞ」

皆を見回して、告げた。

ヴィータやギンガ達が、その言葉に頷く。
その時。

「な、なあ。シグナム」

と、アギトが思い詰めた表情で、近づいてきた。

「なんだ、アギト？」

シグナムは怪訝そうに訊いた。

「あのデカブツと戦いにいくつもりなら あたいも、一緒に……
連れて行ってほしいんだ」

「なんだと!？」

シグナムは驚いて、小さな融合騎を見た。

「……なあシグナム。旦那が最後に言った言葉を覚えてるか？」

旦那。

「騎士ゼスト・グランガイツの事か」

哀しい運命に翻弄された、誇り高き騎士の無表情な顔を、シグナムは思い起こした。

彼と地上本部で武器を打ち交わしたシグナムは、同じ古代ベルカの伝統を継ぐ騎士として、深い敬意を抱いていた。

ゼストは卓越した戦闘力を持った現代に生きるベルカの騎士だった。親友・レジアス中將により、戦闘機人事件捜査中に戦死、スカリエツティの人造魔導師素体にされて蘇生し、結果的には管理局の中枢を揺るがす事件に荷担してしまう。

アギトはそんな彼と共にずっと過ごしてきた。主なき融合騎である彼女にとって、ゼストは自分の力を役立てる機会をくれたロード（主）だった。

アギトは、古代ベルカの技術で造り出された融合騎だ。しかし、彼女は違法な実験でボロボロになり、希望もない日々を送っていた。苦痛の毎日はルーテシアとゼストが研究所から彼女を救い出した事で終息する。

恩義を感じて以来、アギトは、戦いの度にゼストとユニゾンし、力を貸してきた。

しかし、騎士ゼストですら、属性の不適合の故に、アギトの真の能力を発揮させられずにいた。

完全に属性が適合する騎士がいれば……

アギトは《烈火の剣精》たる己の力を、最大限に使いこなせるロードを求め続けていた。

そしてスカリエツティに協力している時、シグナムと出会いアギトは動揺した。

本物の、古代ベルカの騎士。
炎の属性をもつ、烈火の将。

待ち望んでいた相手が、ついに見つかったのだ。

「ゼストの旦那は最期、あんたこそあたいに相応しいロードだと託して、逝ったんだよ、シグナム」

「アギト……」

地上本部で、一騎打ちでシグナムに敗れたゼストは、事件の真相を記録したデバイスとアギトとを、彼女に預けて物故していた。

「あんたが本当にあたいに相応しいのか。旦那より優れたロードになれるのか。それを見極めたい……」

だから自分を戦いの場に連れていけ、とアギトは言った。

「私は騎士だ。だからゼストとの約束は守る。だが、あの相手はお前の想像を絶した敵だぞ。今のお前では危険過ぎる」

「覚悟はしてるさ」

挑戦的な眼差しで、アギトはシグナムを見上げた。

（良い目をしているな……）

「絶対の安全は保証しかねるぞ。それでもいいのなら」

「シグナム……！」

「私の傍についている」

アギトは喜色を浮かべ、

「ありがとうな、シグナム」

礼を述べながらシグナムの肩に乗る。

「あんたの強さ、あたいがこの目で確かめてやるぜ！」

はしゃぐアギトの姿に、思わずシグナムは苦笑した。

そんな彼女を見ながら、グラーファイゼンを担いだヴィータが言った。

「ま、リインが不在な時だし。ユニゾン・デバイスが居るなら心強
いかな。でも、いいのか。勝手に連れていったら問題になるぞ」

アギトはまだ扱的には一囚人である。情状酌量の余地はあるとはいえ、更正プログラムを受けている最中は管理局の意向に従わなくてはならない。シグナムがアギトを戦場に連れていく事は、規定違反に相当し処罰を受ける可能性があった。

「責任は全て私が追う。どのような処分も受けるさ」

「シグナム、すまない……」

とたんに表情を曇らせるアギトに、

「お前は気にするな」

とシグナムは声をかけた。

「勝手にしろ。さて」

ヴィータが首都の方角を向いて言った。

「そろそろ行くか。戦場に」

時空管理局本局。

そこへままと侵入した遊星主アベルに、ソルダートJは激昂をぶつけた。

「貴様、あろうことが我らの故郷を滅ぼした力を利用するということか」

「Zマスター迎撃システムの開発のため、入手したZメタルのサンプルでしたが、まさかこのような状況で使う事になるとは私も意外でしたよ」

あどけない笑顔でアベルは言う。それが余計にJの怒りをかきたてた。

「Zの力を否定したのは貴様自身ではなかったのか!? それをためらいなく使うとは……そうまでして三重連太陽系を再生させたいのか!」

「それが私達、遊星主の務めですからね」

「許せん……！」

」の声が怒りに震える。

「ぞおんだああ　　！！」

戦闘機人トーレと融合したゾンダーは、器材や人間を取り込み成長していった。

「ゾンダーロボに……っ」

「いいのですか？　早く倒さないと、このまま成長を続けて、ゾンダー胞子がこの宇宙に撒き散らされるかもしれませんよ」

「ぬう……ゾンダーメタルプラントが精製されれば……」

次元世界はやがて機界昇華されてしまうのか。
三重連太陽系のように

「そんなことはせんっ！！」

「ふふ。ジエイアークも無しで、ゾンダーとどれだけ戦えるか……見物させてもらいますか」

「貴様……！！」

「は、次元航行艦と同じほどに巨大化したゾンダーロボへと立ち向かった。

トーレ・ゾンダーは鋭角的なボディで、腕は刃の様な形状をしている。

手首に当たる部分と腿からは、トーレのライドインパルスによるエネルギーの翼を生やしていた。

その動きは速い。

そして、ゾンダーの持つバリア能力に魔導師達は苦戦した。

「くそう、チェインバインド！」

魔力の戒めが、ゾンダーの巨体を拘束する。しかしゾンダーはそれを、紙紐の如く引き千切り、ISを発動させて魔導師達を翻弄した。

「いけない、下手に戦えば本局を破壊してしまう……」

フェイトはそのことに気づいた。

ゾンダーを無差別に暴れさせれば、アベルは何もしなくても、時空管理局を麻痺させれるというわけか……！

「結界だ、結界を張るんだっ！」

結界魔法が使える魔導師が、被害を抑え、ゾンダーを制肘するため強装結界に重なる形で《スフィアプロテクション》などの魔法をかけた。本局の内部は爆発や破断の衝撃で、魔法の防御が無ければ厳しい状況になっている。

「……倒せたとしても、被害は甚大」

「ジェイアークが復活すればゾンダーごとき」

ゾンダーは腕の刃でところ構わず切り裂く。その斬撃は魔力を纏っているため、結界の耐久力もいつまでも保たれず、碎けてしまう。

「まずい、これじゃあジェイアークも破壊される……」

フェイトは一か八か、大技を仕掛けてみるつもりだった。

「いや、奴を倒すにはゾンダー核を取り出さなければ……でないといくら攻撃で傷ついても再生する」

そんな……

フェイトが絶句しかけた時、なのはがそこに駆け付けてきた。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

二人は並んで飛び、攻撃のタイミングを計った。

「デイベインバスター！！」

「サンダースマッシャー！！」

貫通力を増した設定で撃たれた、二方向からの砲撃。

ゾンダーはバリアを展開。

しかし、全てのエネルギーを遮断できずに攻撃を食らう。ゾンダーロボの機体が破損する。

「だめだ、再生していく」

ゾンダーが腕を振るった。

「インパルスブレード……！」

高速で刃の翼が襲い掛かる。なのははプロテクションで衝撃を防ぎ、フェイトは真・ソニックフォームで加速して斬撃を回避した。

エース二人の攻撃も、異常な再生能力のために効果は半減し、いたずらに体力と魔力を消耗するだけになっていた。

「凱……まだか。まだジェイアークは」

焦る」を、高みから見ているアベルが冷笑した。

「無様ですね」

ソルダート」の攻撃も、ゾンダーのインパルスブレードに弾き返される。

「さあ、ゾンダーよ、ジェイアークを破壊しなさい……もうこの艦は用済みです」

創造主から、非情なる決定が下された。

「させんっ」

」が超弩級戦艦を庇うため、ゾンダーロボの前に飛び出す。

「危ない、」！！」

フェイトは」に追い縋り、その前面に回り込んだ。

「フェイトちゃん　　！？」

ゾンダーロボの胸が展開し、球状の器官が表れる。それは、融合した機器を利用して造られた奇電粒子砲だった。そこからほとばしったビームの束が、ジェイアーク目掛けて放たれる。

「間に合えっ」

フェイトはバルディッシュをカートリッジ・ロード。防御魔法発動。

《Round Shield》

使い慣れた防御魔法だが、範囲と防御力を拡大して使用した。

「フェイトちゃん　　ん！！」

なのはが叫ぶ。

ビームとシールドが衝突し、目も眩む爆光が生まれた。

「このような異郷の地に没するとは、哀れなものですね」

「Jの運命を歎くようなアベルの口調だったが、創造主に逆らった不良品に対する憎しみが見え隠れしている。

「最も、反逆者には当然過ぎる『罰』でしょうが……ソルダート」
- 0 0 2
「

第六話 犯罪者ゾンダー（後書き）

もう少し

ゾンダー戦続きます

第七話 《獅子の女王》（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「アバンタイトル」

「ゾンダー」

「リオン・レーヌ」

魔神英雄伝ワタル

「龍神丸」

ほか

第七話 〈獅子の女王〉

……ゾンダーへと変貌するスカリエッティ。

その変容に、ルネの中に忌まわしい記憶が蘇った。

あれは、ちょうど原種大戦の頃だった。

G G Gが原種と戦っていた一方、ルネは対特殊犯罪組織シャッセー
ルの捜査官として、国際犯罪シンジケート《バイオネット》を追っ
ていた。

中国・内モンゴル自治区。観光客で賑わう万里の長城。そこでルネ
はバイオネットのエージェント、シュヴァルツェ・オイレを発見し
た。彼は中国の科学院航空星際部から盗みだした機密情報を仲間に
渡そうとしていたのである。

ルネにとって運の悪い事に、同じ場所が原種とG G Gとの戦闘
の舞台となってしまう。しばらく前に起こった、衛星軌道上での戦
闘で外殻を破壊された機界31原種の一体、ZX-05脊椎原種が
万里の長城と融合し、活動をはじめたのである。

あるうことが脊椎原種は観光客らをゾンダーにしまった。オイ
レもその中の一人だった。

バイオネットに憎悪を燃やすルネは、パートナーのエリック・フォ
ーラーの制止も待たずに原種に立ち向かったのである。

なんとルネは小型戦術核で原種を爆破しようとしたのだ。

その前に、戦場を飛んでいた凱に救助されたおかげで（無理矢理、

ステルスガオーに取り付いたというのが正しいが)、小型核の辛くも発射は止められたが……。

そんな中、危うくルネも脊椎原種に融合されるところだった。その時は助かったが、原種大戦末期、地球に撒き散らされたゾンダー胞子の影響でルネもゾンダーに融合してしまう。だが、Zメタルの反物質であるGストーンのおかげで融合から免れた。

……バイオネットの野望をぶっ潰すためにも、必ずオイレを捕らえる。その目的だけがルネの頭にあり、原種がどれほど危険な存在か考えようともしない。シャッセルの優秀なる捜査官エリックが、もはや万事休すかと思った。しかし、GG機動部隊の活躍により、脊椎原種は撃退され、オイレも天海護少年の浄解を受け解放された。浄解されすっかり善人となっていたオイレから、バイオネットの画策を知るシャッセルの二人。
だが、直後、オイレは口封じに殺害された。
そして

(あたしのふがいなさのせいで、あいつは……)

《ジェントルマン》エリックは、バイオネットの獣人からルネを庇い、殉職した。

初めて体験した仲間の死は、彼女の胸に密かな蔭を落としている。自分の過失の為だと理解していても、その時は冷淡な感情で彼の死を評していた。

(なんで、私なんかを守るんだよ……)

フランス製勇者ロボ《ポルコート》の超AIは、死亡したエリック・フォーラーの人格パターンを移植していた。ルネはその真実を『光竜強奪』事件を追っていた時には、知り得なかった。そして、エリックの魂は勇者ロボに受け継がれたのか、再びルネを守ったのである。

《G・ギガテクス》戦の渦中、ポルコートはルネのかわりにバイオネットと戦い、大破した。傷つき倒れたポルコートの姿に、ルネは泣いた。抱えていた感情を全てさらけ出して

この時、ポルコートの人格モデルがエリックだとルネが見抜いていた事に、パピヨン・ノワールが驚いている。

パピヨンは機体は破壊されたが、超AIは無事なのだと告げた。そのパピヨンもオリジナルはオービットベースにおいてリプリジン・護に生命を奪われている。

さて、事件解決後、ポルコートの超AIはローパーミニに搭載、シヤッセル所属の乗用車で、新しいルネのパートナーに配備された。それをルネが喜んだのはもちろんだが、彼女は仲間の大切さを光竜奪取とを通して痛感していた。

（もう二度と、仲間は私のせいで、死なせない……！）

次は自分が仲間を守る。

それもまた、「勇気ある誓い」だった。

（ゾンダーの恐怖なんか……もう私からは無くなったはずだ！）

Gストーンの力で身体の全てがゾンダーになる事はなく、機界化は

下半身だけで済んだが、なまじ自我を保っていただけに言い知れぬ恐怖を覚えた。
融合は不快極まり、異質なモノに同化される恐怖がルネの心に残された。

（ゾンダーなんか……あたしには）

Zの力に対するトラウマはずっと眠り続け、そして今、目覚めた。

（あたしはもう、あの頃のあたしとは違う　！）

回想していたルネは、一瞬で現実に引き戻される。

「たああああっ！！」

激情を込めて、ルネはスカリエッティ・ゾンダーに突っ込んだ。

「今度こそゾンダーをぶっ飛ばす！」

鋼鉄の拳が放たれる。

しかし、Gストーン・サイボーグの剛力をもってしても、たやすくゾンダーのバリアを打ち破れない。

GとZの力、そして魔力がぶつかり合って拮抗し火花が散る。やがてルネは弾かれた。

「ちいっ」

舌打ちをする。

ゾンダーのバリアは圧縮した空間を折り畳んだ、空間湾曲技術の応用で、原理的にはガオガイガーのプロテクトシェードに近いものだ。

かてて加えて、スカリエッツィの魔力を使い防御魔法をも併用していた。

その防御力はこれまでのゾンダーロボより桁違いである。これにより、魔導師たちの砲撃魔法も効果が減ぜられていた。

だが。スバル・ナカジマの先天固有技能である《振動破砕》は、そのバリアを打ち抜いて、機体に到達した。見事にゾンダーの腕が破壊される。

しかし、ゾンダーはすぐさま傷ついた部位を再生させてしまう。攻撃が通っても、瞬時に再生しては意味がない。

「くそつ、もつと、強い力がある……Zの力を越える力が……！」

ルネは唇を噛みつつ、ある決意を抱いていた。

ルネ達がゾンダーと対峙していた頃。

首都への移動中、飛行する護はゾンダーとの戦い方について、はやくに説明していた。

『一撃で破壊……！？』

「はい。僕達はガオガイガーの必殺技……ヘル・アンド・ヘブン、ハンマー・ヘル・アンド・ヘブンでゾンダーの外殻を一撃で撃破して、ゾンダーメタルを露出させていました。もちろん、それには、途方もないエネルギーがかかりますが……」

ガオガイガーもゴルディオンハンマーも今は無い。
それでも、ゾンダーを止めねば、大変なことになる。

この世界のために、誰もが命を懸けて戦う所存だった。

『あの巨大な身体を一瞬で吹き飛ばせれば』

「ゾンダーロボの核さえ露出できれば僕がすぐに浄解できます！」

カインの遺産。Zマスタールの抗体たる護の力は、ゾンダーに変えられた人間を元に戻す事ができる。機界昇華を阻む、ラティオの力、それがあるからこそ、GGGは原種たちにも勝利できたのである。

『一撃で破壊……か……ふうむ』

はやては護の言葉に考えこんだ。

「八神、長官……？」

しばし思案にふけたはやては、護に訊ねた。

『なあ、そのデカブツ、なんとか足止めでけへんかな？』

「やってみます」

と、シグナムが答えた。

はやては頷き、

『よっしゃ。ちょっと準備に時間がかかるけど……うちがどうにかする』

「主はやて、何を!？」

『でっかい一撃が必要なんやろ？ それなら、あたしが出る!』

守護騎士は驚愕した。

「主自ら……!」

夜天の主が前線に出ることは、滅多にない。JS事件の時でも、数えるほどだ。

だが。確かにゾンダーを破壊できるとしたら、オーバーSランクを持つはやてくらいしかない。だが、普段は照準や補正には、融合騎リインフォースIEIが必要になるのだが、今回は一人で魔法を使わねばならないのがネックだ。
はやてはそれでも気丈に笑い、

『まあ、司令部の皆もサポートしてくれるしな。とにかくうちが魔法を撃つ準備が整うまで、なんとかあいつの動きを止めといてほしいねん』

「はやての頼みだ。あたしたちに任せろ!」

「スバル達と協力すれば足止めくらいは可能でしょう」

『よっしゃ、頼んだで。あたしもすぐに出撃する。そうそう、護くん』

「はい？」

『こつちが片付いたらすぐに本局に向かったって。あちらにもゾンダーが出たらしいからな』

「はい、わかりました!!」

「おい、狸女！」

はやてとの通信に割り込んだ声がある。
ルネが地上本部に呼び掛けた声だ。

「お前に頼みたいことができた」

『狸て、あたしのことが……?』

乱暴な呼び方にはやては目を丸くした。

「そんなことはどうでもいい！」

ルネの声は切迫さをはらんでいた。

『あの、ルネさん?』

「アレをよこせ！」

『アレ!? アレって』

「あたし専用のアレさ！」

『ちよっと待ちや、アレはまだろくに実験データすら録って』

「それどころじゃないんだ！」

サイボーグ少女の語気が荒れた。

「あいつをぶつ叩くにはもっと強い力があるんだよ！ 今のあたしの力よりも！！」

はやては迷った。

開発されたばかりの新装備を、こんなに早く投入して万が一、取り返しのつかない事故が発生したら……。

はやては『組織の一員』としてそのような思考をしていた。

けれど、彼女が六課や勇者隊などの部隊を結成したのは、そんな理由に捕われずに行動するためだ。

はやては、即断した。

『わかった。あたしはルネさんに賭ける。だから、頼んだで！』

「ああ。今すぐに、実験データを録らせてやるよ。あいつとの戦いでな！」

ルネは勇ましく言った。

はやては本局に通信。

シャーリーことシャリオ・フィニーノに繋げる。

『シャーリー。ルネさんの新装備、こちらに送ってくれへんか』

『え、でも、アレは 』

シャーリーは躊躇した。

『かまへん。あたしが許可したんやし。さ、早う頼む』

『本当によろしいんですね。わかりました、すぐに転送します』

『ありがとう』

『はやてちゃん。私がいなくて大丈夫ですか？』

リインが心配そうに訊いた。

融合騎として主を傍でサポートできないのが心苦しいようだ。

『あんたがおらへんと、正直きついけどな。でも、皆が助けてくれるし、なんとかなるよ。それより本局もガジェットやゾンダーのせいでかなりの被害を出しとるんやろ？ 二人はそのまま、本局の皆に協力したってや』

『了解。八神長官』

『わかりましたです、はやてちゃん！』

敬礼し、はやてに告げるシャーリーとリインに、はやては微笑して応えた。

新たなる決意を抱き、彼女たちは行動を開始した。

『ルネさん。ちゅうわけで、すぐ、そちらに届くはずや』

「メルシー。感謝する」

母国語で礼を言い、ルネは通信を切った。
ルネと入れ替わるように、今度はシグナムがはやてに話し掛けた。

「主はやて、私からもお願いがあります」

『なんやシグナム、言うてみ』

「アギトの能力封印を、解除してほしいのです」

「……！」

シグナムの肩の上で、アギトが驚いた顔になった。

「ゾンダーを破るにはルネ捜査官の言う通り、強い力が必要になります。そして、アギトにはその力を与える能力があるのです」

『うーん。これはまた、難しい頼み事やな』

情状酌量が適用されたとは言え、テロリストに加担した者の封印を、戦力になると解つてはいても、おいそれと解除するわけには管理局側としてはいかない。下手をすれば犯罪者に逃げられる恐れがあるからだ。

「アギトは逃亡したりは決してしません。私が保証します！」

「……シグナム」

アギトの顔が歪んだ。目元に光るものがある。

「お願いします。主はやて。私を信じてください」

『うちは、これまでシグナムを信じなかったことはあらへんよ。アギトもだからこそあんたに着いて行ったんやろ？』

アギトは何度も首肯した。

『うちはこの部隊を編成する時、けっこう融通の利く権限をもらってんねん。ちよつと時間をくれたらアギトの能力封印、解いたるよ』

「ありがとうございます、主はやて！」

これあるかな、我等が主よ、と、シグナムは胸中に呟いた。

『そのかわり、しっかりやってや』

「もちろんです」

「あたい、絶対にシグナムを失望させないように頑張るぜ！」

張り切ってアギトが言う。

そんな彼女を、シグナムは信頼の眼差しで見つめるのだった。

「それじゃあ、ここの事は頼んだで〜！」

はやては司令部をグリフィスやルキノらに任せて、ゾンダー迎撃に出動していった。

「ねえ、ギャレオン」

並走して飛行する鋼鉄の獅子に、護は言った。

「ここは僕達がなんとかする。だからギャレオンは本局にいる凱兄ちゃん達を助けてあげて」

無論、ファイナル・フュージョンできない状況はいぜんとしてあるが、やはり凱のパートナーはギャレオンこそが相応しいと、護は思っていた。

機械と直に繋がる能力がある超人エヴォリューダー……ギャレオンとフュージョンするにはやはり、彼こそ最適な人材だと、ガイガーとして戦ってみて出した結論である。

「きっと凱兄ちゃんもギャレオンを必要としているよ　だから…」

…」

ギャレオンは護の意を汲んで、承諾の色を双眸に浮かべた。

「よし、じゃあギャレオン。凱兄ちゃんに会ったら僕がゾンダーを浄解してすぐに駆け付けるから、って伝えといてね！」

ギャレオンと離れて戦うのは寂しいが、護は心強い味方がいることで不安を忘れられた。

ゾンダーに、もう怯む事はない。Gの力は、Zの力には負けない。勇者王ガオガイガーと共にゾンダリアンや原種と戦い抜いた日々が、護にそんな確信を抱かせていた。

やがて。護やシグナム達が、クラナガン上空に到達する。

ゾンダーは、巨体を揺らして街を壊し続けている。
いままで戦っていた者たちが、援軍の到着に歓喜の声を上げた。

「待たせたな！」

スバルに、降り立ったヴィータが言った。

「待ちくたびれましたよ、副隊長！！」

また、湾岸地帯のガジェットを一掃した部隊も応援に来て、ゾンダー
― 包囲網を形作った。

その中にはエリオとキャロ、そしてフリードリヒがいる。
ここに、機動六課フォワードチームが勢揃いを果たした。

「なのはじゃないけどよ、久しぶりに全力全開やってみるか！」

勢いづいたヴィータが、グラーフアイゼンをラケーテン・フォルム
に変える。

隣ではシグナムがカートリッジをロードしていた。

アギトの封印解除はまだ出来ていない。今かいまかと、アギトは氣
を揉んでいる。

「そう焦るな。私の力を見るのだろう？」

「そうだけど……」

「なら。そこで見ている、ヴォルケンリッターの力を、な」

「ヴォルケンリッター……」

「お前がそんな大言壮語するなんて珍しいな。悪いものでも食ったのか？」

と、ヴィータがからかうのをシグナムは、

「なに、アイスを食べ過ぎて腹を壊したお前ほどではないよ」

「それいつの話だよ！？ はやてが小学生の時のだろうが」

「副隊長たち、なに呑気にやってるんですかー！？」

ティアナが、軽口をたたき合う守護騎士達に、慌てた口調で言った。
ゾンダーはすぐ側まで近づいている。

「お前、なのはに言われたのを忘れたのか。頭冷やせて……」

ティアナが赤くなった。忘れたい彼女の汚点である。隣にいたスバルは汗を垂らしてパートナーを見ていた。

「そうだぞ。戦場ではつねに冷静さが肝心なのだ」

シグナムの分別臭い発言に、かつとなつてあたしを殴ったのはどこの誰でしたかね！？と、心の中でツツコミを入れるティアナ。

「それより、ティア、攻撃を……」

「歓談の時間もこれまでだな」

と、シグナムは呟く。ティアナはやっぱり心の中でツッコんだ。

（歓談じゃないでしょ……）

そんな彼女をよそに、ヴィータがラケーテン・ハンマーを振り上げ、疾駆する。

「たりやあああつ!!」

ドリルの破壊力が、ゾンダーの巨腕をぶち抜く。

上空からは、キャロの騎乗する火竜フリードリヒが、炎のブレスを吐き出した。

火球が炸裂し、ゾンダーロボの頭部が傾いた。しかし、バリアのためか、いまいちダメージが通っていない。

ゾンダーは無事な腕から赤い紐状の武器を何本も発した。

それは、スカリエッティが使っていた魔法だった。

「フリード!!」

赤い紐は竜の首に巻き付き、ギリギリと締め上げる。

悲鳴と共に、キャロとフリードは地面に叩きつけられようとした。

シグナムはすかさず魔力の紐をレヴァンティンで切断し、フリードの身体はキャロがすんでで発動させた補助魔法で事なきを得た。

「よくもキャロとフリードを!!」

エリオはストラーダを構え、突進した。

電気資質を用い、威力を強化する。

「危ない！」

ゾンダーは胸に火砲を造りだし、エリオ目掛けて撃った。
炎の弾丸が少年騎士に向かう。

「くっ……！」

飛行魔法を使っているわけではないため、エリオは軌道を変えるのが難しい。空中で制止し、自ら自由落下をすることにより炎弾を回避した。

さらに、ゾンダーは周囲に魔法や熱線を発射し、機動勇者隊は防戦に追い込まれる。

「攻撃の手を、緩めるなっ！」

シグナムが叱咤し、ゾンダーに肉薄する。

「飛竜一閃——！」

シグナムの攻撃を食らって、ゾンダーロボの肩が粉碎された。
だが、瞬時に再生し、襲い掛かって来る。

「ちっ……キリがない」

ヴィータはキガント・ハンマーを使うべきかどうか、考えた。魔力の消耗が激しい技をここで使ったほうがよいのか。それよりはやてを待ってからのほうが……。

いや、はやてから足止めを頼まれたんだ。

ためらってどうする。

同じく、シグナムも、自身の最大の直射型魔法シュトルム・ファルケンを使用することを決
めていた。

「同時に行くぞ！！ シグナム」

「我等の力を結集するんだ！！」

「あたし達も行こう、ティア」

「待つて、スバル。あれを……」

ティアナは後ろを指さして、言った。

「あ、あれは」

スバルの目が大きく見開かれた。

「いくぞアイゼン！」

《J a w o h l ! ! 》

「ギガント……ハンマー！！」

グラーファイゼンが超巨大なハンマーへと変じる。

「レヴァンティン」

《S t u r m f a l k e n 》

「烈風の隼よ……翔けよ！」

二人の守護騎士が、奥義を放とうとした時

「みんな、そいつから離れてえな!!」

後方から響いた声と共に、

『……………!?!』

強大な魔力が、彼らがいる空間に満ちていった。

「これは……………!!」

「はやての……………!?!」

「ディアボリック・エミッション……………!!」

騎士服に身を包んだはやては、騎士杖シュベルクロイツを手に、呪文を詠誦した。

一般市民の避難が済み、ゾンダーと管理局の人間しかいないからこそ、放てる大技。

はやては効果範囲を限定した設定で、広域型魔力攻撃を放った。亡きリインフォースから受け継いだ、純粹魔力攻撃の魔法。

闇の球塊が、ゾンダーを直撃した。

対象の魔力を食らい打ち消す働きがあり、魔導師には効果的な魔法で、かつバリアを消滅させる。しかも、一つの街全域をカバーできるため、巨大なゾンダーもすっぽり中に納まってしまふ。

素体であるスカリエッティの魔力はこれにより、ほとんどが消失してしまった。攻撃魔法、防御魔法は使い物にはならないだろう。あとは、空間湾曲によるバリアのみ。それすらも強い衝撃には耐えられない。

「いまや、みんな!!」

「おおっ!!」

ヴィータ、シグナムがそれぞれ大技でゾンダーを攻める。そこを、さらにスバル達がしかけた。

ティアナの誘導操作弾がゾンダーを惑わし、隙をついたスバルとエリオの渾身の一撃が、敵を打ち砕いた。キヤロはそんな彼女らをバックからサポートする。

ゾンダーロボの機体は、見る間に損壊した。

だが、今度も再生能力を発揮し、元に戻ろうとしている。

「来た!」

ようやく、ルネの手元に転送が完了した。

ルネの掌に実体化したのは、ルビーをあしらったペンダントだ。もちろんただの宝石ではない。

Gストーンを組み込んで開発された試作型のデバイスである。検査の結果、凱とルネには兩人ともリンカー・コアの存在が認められた。はやてはそれを受けて、二人でも扱えるデバイスを用意するように取り計らった。G式、と仮に呼称されるそれは、GSライドとデバイスの技術を融合させた全く新しい試みである。

なのはのレイジングハート・エクセリオンにも、同様のシステムが採用され、新たにレイジングハート・ジェネシスに生まれ変わった。最初、ルネのデバイスはインテリジェント・デバイスになる予定だったが、「人工知能搭載型はウザいから」という理由で退けられ、結局、ストレージ型のデバイスに決定した。

それを光竜と闇竜が聞いたらどう思うか。おそらく悲しむだろうが、ポルコートあたりなら気障な嫌みを返したかもしれない。

そのかわり、といつてはなんだが、ルネの戦闘スタイルを鑑みて、機体は近代ベルカ式を基調としてもらった。

即ち、魔力で身体や武器を強化する方向に特化した機能を持たされているのだ。

「さっそく、いくか。《リオン・レーヌ》！」

ルネはデバイスに自らのコードネームを与えていた。
リオン・レーヌ……獅子の女王である。

《Equip》

待機モードからデバイスモードへ。

ルネの右腕に、光が絡み付いた。

獅子の女王はルネの肘までを覆った、黄金に輝く金属製のガントレット（手甲）に変形する。スバルのリボルバーナックルにも似ているが異なるもので、腕の一点では、Gストーンが鮮やかに緑の光を放っていた。

デバイス・コア、GSジェレイトーに接続完了。システム異常なし、機体は良好。魔力安定。

リオン・レーヌはリンカー・コアから供給される魔力に、Gストーンのエネルギーを上乘せして蓄積した。

「さあ、魔導師ってやつを体験してみようか」

颯爽と、ルネはゾンダーに立ち向かう。
再生したゾンダーから熱線が飛ぶ。

手をかざしたルネが、デバイスにプリセットされていた防御魔法を発動させる。

「プロテクション……！」

防御における、ミッドチルダ式の基本魔法。
それが熱線を弾き、拡散させた。

「いいぞ……」

カートリッジが排莢される。

近代ベルカ式の術式は、拳を強化、魔力が赤く発光した。

「ゾンダーめ、食らいやがれっ……！」

ルネが咆哮した。

跳躍して、ゾンダーロボの胸部に剛拳を打ち込む。

バリア貫通。

凄まじい破壊衝撃が、ゾンダーの外殻をえぐり取った。

「すごい……！」

呆然と、ヴィータが呟いた。

この威力は直射型砲撃魔法にも匹敵するだろう。

「これが…… G ストーンのパワーかよ……」

「実験は成功つてとこだな」

ルネが頭上のはやてに笑いかけた。それは百獣の王が持つ猛々しい
笑みだった。

はやてはビツと、親指を立てて返す。

それからシグナムに、

「さつき、アギトの封印解除手配が済んだからな」

と伝えた。

「ありがたい……！！」

アギトはついにこの時が来た、と喜んだ。

融合機としての真価を見せる時が。

「シグナム、アギト。あたしが次の一撃を撃つ発射準備の間、存分に
暴れて時間稼いでな」

「わかりました。主はやて」

「よく見てろよ！！ アギト様の活躍をよ」

「こつちだって、リインがいりやもつと……」

アギトがはしゃぐ姿を横目に、ヴィータがぼつりとこぼした。

「……では、ヴォルケンリッター、シグナム。参る！」

「烈火の剣精アギト。見参だぜ！」

ゾンダーロボに不敵な表情を向けるベルカの騎士たち。

その力が、いま、放たれる。

第七話 《獅子の女王》（後書き）

strikers25話、よかったですよね（^^）！

というわけで（ナニが）、次回、

アギト・ユニゾン

承認！！

第八話 永遠の炎
に続く

第八話 永遠の炎「- ETERNAL BLAZE -」(前書き)

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「赤と青く超竜神」

「浄解」

魔法少女リリカルなのはA・S 「ETERNAL BLAZE」

電子戦隊デンジマン

「デンジマンのテーマ」

ほか

第八話 永遠の炎「・ E T E R N A L B L A Z E ・」

空高く。

奇跡を起こす輝き。

（これは……まるで……）

騎士は熱く風を巻き起こし、舞い上がる。

（フュージョン）

天海護はその光景に、不思議な既視感を抱いた。

「いくぞ、アギト！」

シグナムは腕を広げ、融合騎へと合図した。

「おうっ」

胸を高鳴らせ、アギトは新たなロードに応える。

二人の身体が重なった。

「「ユニゾン・イン！！」」

古代ベルカの騎士に、アギトが溶け込んでいく。

（熱い……！）

シグナムの裡にあるものに触れ、アギトは震えた。

冷然としたシグナムだが、その胸には常に燃え盛る火焰が渦巻いていた。

（これ……っ）

融合騎はロードと一体化しながら、力を同調させる。

肉体、魔力、そして記憶

シグナムの全てがアギトのものと融合する。

（昔の、昔の……遥かな記憶？）

アギトの脳裏にフラッシュバックするイメージ。

途切れ途切れのそれらは、戦乱の時代を描いていた。

（シグナムが、見てきた……戦いの……）

流れ込む記憶。そして想い。

（闇の　いや、夜天の書の、守護騎士……ヴォルケンリッターの
将　　）

主との、出会い、別れ。喜び、悲しみ。死闘、敗北。勝利、消滅。
絶望と

アギトは膨大な記憶に押し潰されそうになった。

(希望)

シグナムが最後に出会った希望。守るべき希望。贖罪。

「騎士の……剣に誓って……」

守り、戦う。

「ああ。あんたは……あたいに似てたんだな……」

この身を託すに足る、主に出会いたい。

「自分の全てを受け入れてくれる……主」

アギトの魂に温もりが広がる。

「戦う為だけに生まれてきたあたい達にも、幸せをくれる人は、いるんだな……」

シグナムの中にも、アギトの想いが伝わる。

実験による苦痛。覚えていない過去。長きにわたる孤独。ロードなき融合騎の寂寥。

世界のどこかに自分を使ってくれる主が、きつという。

ゼストと出会い、初めて幸福を手に入れたと思った。

だけど、ゼストは

「お前は、こんなにも羨望と絶望を小さな胸に抱えていたのだな……」

アギトの心を見つめ、シグナムは吐息した。

「ならば。私がお前に希望を与えてやる」

己の中に入ってくるものに、強く語りかけた。

「かつて、私が主はやてから与えられたように」

「ああ……！」

あるいは、星と雷が夜天に与えたように……

「お前にあたいの全ての力を」

想いと炎が、一つになった。

融合が加速する。

ユニゾンにより、シグナムの外見がかなり変化していた。

騎士服は上着が無くなり、色は青紫色になる。箆手は金色で、髪が薄桃色に変わり、ポニーテールを結びボンも形を変えていた。瞳は薄い紫だ。

背には炎の四枚翼が生え、融合は完了した。

（……力が、満ちる）

（……力が、重なる）

（（……力が、溢れるッ！））

そうして、新たな騎士　アギトユニゾン・シグナムが誕生する。

その姿を皆は声もなく、振り仰いでいた。

「おい　シグナム！」

沈黙を破ったのは、ヴィータだった。

静かに佇んだシグナムに、ゾンダーの拳が飛ぶ。

「ふっ」

レヴァンティンを上段に構えた。

「紫電」

炎が刀身に宿る。

「豪閃！！」

振り抜く。

ゾンダーの手が、凄まじい衝撃を受けて粉碎された。

「おおっ！！」

仲間達から、歓声が上がった。

「剣閃烈火！！」

燃える長剣を中段へ。

『火龍一閃！！』

シグナムはゾンダーロボに向かってレヴァンティンを薙いだ。激しい爆炎により、ゾンダーの体が傷を負う。

「あたし達も負けてらんねえな」

ヴィータやルネが追い討ちをかけるように、ゾンダーに攻撃を加える。

「おおおりやああ　　！！」

巨神の鉄槌が振り下ろされる。ヴィータのギガントハンマーは、風をも断ち切る勢いで、叩き込まれた。

バリアすら役に立たず、ゾンダーは脚部を割られて横転する。片膝をつき起き上がるが、すかさずルネに打撃を食らう。

「はあっ！！」

ブロウクン・ファントムに匹敵する拳撃が光を放つ。

スカリエッティ・ゾンダーのフレームがへしゃげ、開いた傷穴から内部の機器が飛び散った。そこをさらに、スバルやティアナ達が攻める。

「おおおおっ、ディバイン・バスター！！」

「クロスファイヤー・シュート！」

「ルフト・メッサー！！」

「アルケミック・チェーン！！」

集中的に攻撃を浴び、さしものゾンダーも再生速度が追いつかない。

その頃。

シグナムは大規模な魔法に備え、魔力をチャージしていた。その手には、弓が握られている。

レヴァンティンがボーゲンフォームをとったものだ。

シグナムが扱える遠距離用直射魔法。シュトルム・ファルケン。だが、これは少し違った。

「隼よ　さらなる羽ばたきを我に見せよ！」

ユニゾン状態により、通常のシュトルム・ファルケンを遥かに凌駕する、砲撃。

「炎熱の翼よ、焼き尽くせ！！　ローエン・ファルケン！！」

光熱に輝く矢が、解放される。射程内にいた者達が、慌てて待避していた。

炎の矢がゾンダーロボの胸部に命中する。

「！！」

ローエン・ファルケンは爆発を起こし、ゾンダーの機体を穿つ。

「やった……！！」

護が快哉した。

彼は、浄解モードで飛翔し、戦況を見守っていたのだ。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ」

「主はやて……」

振り返ったシグナムが、呪文詠唱を完成させたはやてに微笑んだ。

はやては頷き、

「後はあたしが……引き受けたよ」

魔力のほとんどを先程の砲撃で費やしたシグナムに替わり、はやてが前に進み出た。

はやての魔法は、引き金を引けばすぐ発動する状態になっている。

「フリースヴェルグ!!」

管理局でも一、二を争う魔力の持ち主の魔法が炸裂した。

本来は、超長距離攻撃魔法だが、的が巨大であるうえ、中距離からの発射のため、設定をいくつか改編して、魔力チャージや照準に掛ける時間を省略している。その分威力には手を加えていた。複数の弾がゾンダー一体のみに着弾したのだ。とてつもない閃光と熱が局地的に発生した。

ゾンダーロボの全身を衝撃が揺るがし、金属の装甲が融解する。小爆発によって四肢は碎け、胸から胴にかけて断裂した。

そしてついに、ゾンダーメタルが機械の狭間に露頭する。

「いまだっ!!」

護は見えたゾンダーの核目掛け、高速で突っ込んだ。
しかし、ゾンダーは門を閉じる様に、破壊された部分を再生しようとする。

「させないっ」

護は手を組み合わせ、ゾンダーへと近づく。
みるみるゾンダーロボの巨体が視界を埋め尽くす。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……」

破壊と守護、二つの力を寄り合わせる。

「ウィーター!!」

真のヘル・アンド・ヘブン。

ガオガイガーの必殺技をも越えるそのパワーは、ゾンダーの再生しかけた機体を完膚なきまで粉碎し、吹き飛ばした。
完全に姿を顕したゾンダーメタルに護は手を添える。

「クーラティオー・テネリタース……」

命を甦らせる呪文を唱え、Zの力を浄解していく。
その神秘的な光景に、人々は目を奪われた。

「あ……ゾンダーの核が」

毒々しい紫をしたコアから、徐々に人の形を取り戻していく。

「もう、大丈夫だよ」

護は素体となっていた男に、優しく言った。

機界生命体から人間へと戻った男は、落涙しながら座り込んだ。

「私は……私は……ああ」

その男　広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティは、頭を両手で抱え、その場に泣き崩れるのだった。

第八話 永遠の炎「・ E T E R N A L B L A Z E ・」(後書き)

今回登場したシグナムの魔法はオリジナルです。あしからず。
さて、次回は本局組のお話の予定です。

第九話 ジェイアーク復活！（前書き）

今回のイメージBGM

ロードス島戦記 - 英雄騎士伝 -

「怒れる狂戦士」

スレイヤーズTRY

「ダークスター」

勇者王ガオガイガー

「ジェイアーク〜キングジェイダー」

「イーQUIPP〜フュージョン」

魔法少女リリカルなのは

「レイジングハート、セットアップ！」

ほか

第九話 ジェイアーク復活！

トーレ・ゾンダーの荷電粒子砲が、放たれる。

白熱した輝きが、ソルダートJとフェイト・T・ハラオウンの網膜を灼^やいた。

「バルディッシュ……！」

ラウンドシールド
防御魔法を範囲を拡大して展開するフェイト。
柱の様なビームが、目前に迫る。

ビームはシールドにぶつかり、眩しい光が弾けた。
シールドは数秒間、エネルギーの奔流を塞き止めた後、耐えられずに揺らいで消滅する。すかさずバルディッシュは、フィールド系の防御魔法で熱と衝撃から、主を護ろうとした。

「フェイト！」

Jは前に出てフェイトを庇い、退避しようとする。
その時にはすでにビームの先端が二人を飲み込もうとしていた。洪水の様なプラズマの流れが、ジェイアークへ至る射線上の空間を、音速で貫く。
それはまさに数瞬の出来事だった。

「貴方は逃げて。私は大丈夫だから……！」

その数瞬の間に、フェイトはJの体を押して、ビームから回避させようとした。

ブラズマ流の影響はフェイトなら電気変換資質があるため、ある程度はダメージを軽減できるはずだ。また、防御魔法も使える。

一方、Jはいくらサイボーグ戦士・ソルダートとはいえ、あのビームを受けて無事でいられるわけがない。

もはや判断を躊躇っている時間はなかった。

逃げるには、今しかない。

「お前やジェイアークを捨てて生き延びてなんとする！」

一人だけ助かるのは、Jの誇りが許さない。戦場で死ぬのなら、仲間と共に、とJは思っている。

その光景は遊星主アベルの目には、滑稽な底い合いに見えた。

「神に逆らう者の末路としては、当然の事ですね」

ジェイクオース級の攻撃でなければ、ゾンダー核を一瞬で摘出できないであろう。魔導師とやらがちました攻撃を与えても、ゾンダーは欠損箇所をすぐに自己修復できる。今のJに決定的な必殺技がない以上、時間が経つ毎にアベル側が有利になっていくのだ。

「そう。無限の再生力を持つ者が、最後には勝つのです」

アベルは勝利を確信した笑みを見せた。

眼下。

ビームはJとフェイトを直撃し、ジェイアークを打つ。

艦船ドックに爆発の光が満ち、なのはは強烈な閃光のため、顔を背けた。

「フェイトちゃん　！」

衝撃波が防御シールドを叩き、突破して、武装隊員達を翻弄する。建材にはひびが走り、壁や床の一部が砕けて割れた。

ゾンダーは展開していた胸部装甲を閉じ、インパルスブレードを構える。さすがのジェイアークも、ひとたまりがなかったはずだ。

「む……！？」

光と爆風が消えてイオン臭が漂う空間。Jとフェイトの姿はどこにも見当たらない。ビームの爆発で蒸発してしまったのか。

だが、ジェイアークは無傷で在った。しかも、少しずつだが、動きは始めているではないか。

「外したはずはない………もしま　」

アベルの疑問に応える様に、ジェイアークから声が響いた。

『みんな！遅くなってすまなかった』

紛れも無く、獅子王凱の声だった。

『助かったぞ、凱！』

」が礼を言った。

『間一髪だったよ』

聞こえてきたフェイトの安堵した声に、なのはは涙を浮かべた。

（よかった……無事で）

「私がトモロに打ち込んだ凍結プログラムを……解除したのですか」
愕然となるアベル。

赤の星の指導者である自分の技術を破られ、信じられない気分になる。

「Gストーンの能力をつかったのですね……あの生機融合体が」

エヴォリユーターが機械の回路に直接、神経を繋げる能力があることは判明している。だが、彼女が設置した、あの無数の罠を潜り抜けてトモロの中枢に到達するのが、あまりに早過ぎた。常人ではもつと時間がかかるはずなのだ。

本人は認めたがらないだろうが、アベルは超人である凱の力を見くびっていたのである。

己らに対する絶対的な過信が、ジェイアークに復旧を成し遂げさせた、と言えよう。

今や、ジェイアークは艦首をゾンダーに向け、数百キロを離れて、対峙していた。

ジェイアークの艦橋。部屋は三角形を基調とした設計で、いかにも異星文明の産物らしく感じられた。

Ｊは艦長席に着き、ジェイアークの状態を確かめた。

艦体は、管理局の手を借りて、ほとんどの破損箇所は修復済みである。トモロ・コンピューターとジュエル・ジェネレーターも正常に稼動していた。

ジェイアークは三重連太陽系でアベルにダウンさせられる前の状態に戻ったのである。

それも、凱のＧストーンあつてこそだ。

トモロの凍結解除のため、凱はＧストーンのパワーをありつたけ籠めて流し込んだ。この時、ＧストーンとＪジュエルの共鳴により発生した莫大なエネルギーに、ペンチノンは強制的に起動させられた。凱がＧストーンを通して現状を伝え、トモロはすぐさまジェイアークの武装を待機させる。

間もなく、ビームが向かって来るのを感知したトモロは、ジェネレーターティングアーマーで艦を保護しつつ、ＥＳミサイルを発射した。物質透過能力を持つＥＳミサイルは、弾頭を外す事で、ＥＳ空間經由で遮蔽物に邪魔されることなく離れた味方の救助が可能となるのだ。これでＪ達を回収し、ミサイルの弾道をトモロがコントロールすれば、艦に帰着できる。

そして、ビームはＧストーンとの共鳴でパワーを上げたジェネレーターティングアーマーにより、防がれた。

《すまない……ソルダートＪ。お前を一人で戦わせてしまった》

ペンチノンは謝った。

「気にするな、ペンチノン。動力源を断たれてはお前とて仕方あるまい」

《だが、これからは私も戦う。お前の翼となつて……！》

「頼むぞ、ペンチノン。凱、貴様にも礼を言う。よくぞジェイアーを蘇らせてくれた」

凱は苦笑し、

「正直、間に合わないかと冷や冷やしたぜ。これでここでの俺の役目は終わった。俺も出撃する」

「ギャレオンはここにはいないぞ」

「そのかわり、俺には新しい力がある！」

凱はGの紋章が輝く腕を掲げて見せた。その手首には、金色のブレスレットが装着されていた。

「ジェイアーくはお前に返したぜ」

「武運を祈ろう」

凱はジェイアーくを下船した。フェイトはかなりの魔力を消耗したので、休養のため艦内に残った。

《ジェネレーティング……98%から70%に出力低下》

凱が降りたため、Gストーンとの共鳴が無くなった。ジュエルジェネレーターの出力が下がる。

「それでも」

単体で戦うよりは戦力が上がっている。

ペンチノンの働きで、超弩級戦艦ジェイアークは速やかに、武器に回すエネルギーを充填した。

「ふ。いくら復活したとは言っても、死に損ないのソルダートとジェイクオースを喪失したジェイアークなどに……」

アベルは再度、ゾンダーに攻撃を指令した。

ゾンダーには、いや、素体となったトーレには、パルパレーパのケミカルボトルが埋め込まれている。これにより、遊星主の操り人形となるのだ。

ゾンダーの荷電粒子砲は、撃つにはエネルギー・チャージが必要だった。エネルギー充填が終わるまでにはしばらくかかる。遠距離用兵器が使用できないゾンダーは、そのため近接戦を仕掛けた。

間合いに入ってしまったえば、ジェイアークの武装の大半が意味をなさなくなる。戦艦故の弱点だ。

「ペンチノン！」

《反中間子砲、斉射》

原子核を維持する中間子に対消滅させる事であらゆる物質を破壊する、ジェイアークの主砲がゾンダーへ放たれる。攻撃を受け、ゾンダーは動きを止めた。砲撃に、肩や腕部が砕け散

る。だが、再生してしまうためダメージは軽度だった。そして、再びジェイアークに向かう。

「ペンチノン!？」

……なぜ、頭部や胸部を狙わない？

でなければ、致命傷を与えた事にはならないだろう。

《すまない、ソルダート》。私のミスだ《

「奴が来るぞ!」

トーレ・ゾンダーは跳躍。艦の上空に飛び、艦橋をエネルギー翼で斬り裂かんとした。

五連メーザー砲が空中にいたゾンダーを撃つ。その衝撃でゾンダーは体勢を崩した。

（できれば、施設を破壊する事はしたくないのだが、やむを得ない）

Jは艦体後部からESミサイルを発射させた。

ES空間を経由する空間跳躍攻撃は、移動距離を無視して、一瞬で相手への着弾が可能になる武装である。ただ、爆発の影響でこの場にかんりの被害がでるのではないかと予想される為、Jは躊躇した。しかし、ゾンダーを倒すことが最優先だと判断し、ジェイアークの重武装を使用する決意を固めた。

だが、ESウィンドウを越えたミサイルは何故か見当違いの空間に出現し、着弾した。ゾンダーへのダメージは僅かしかかった。

「なぜ、弾道が逸れる……!？」

《私の弾道計算が狂っていたようだ》

「何だと」

ジェイアークの武器の制御もトモロ・コンピューターの役割だが、ミスが頻発しては強力な攻撃力も宝の持ち腐れになってしまう。

「一体、どうしたのだ。まさか、アベルの」

凱はアベルが仕掛けた罠を全て外し、凍結プログラムも解除した。だが、彼の気づかぬ何らかのウィルスがひそかにトモロを犯していたのなら

《いや、そのような類いではない》

ペンチノンは自己診断した結果、Jの言葉を否定した。

《恐らく、強制的なシャットダウンによる後遺症だろう》

言うなればいきなり電源を引き抜かれたPCのようなもので、再度立ち上がったとしても設定やデータなど動作に不具合が起きる事がある。それと似ていて、トモロも計測・計算能力などに不調が生じていた。

無論、いつまでも続くわけではなく、現在、急いで自己修復機能を働かせ完全回復を目指している。

「だが、今この状況でこの不調は……不利になるな」

Jは唇を噛んだ。

「トモロは事前にメンテナンスができなかったはず。故に機能的な支障をきたすのは目に見えていましたよ……」

優れた技術者でもあるアベルは、ジェイアークらの創造者なだけあり、その構造的な弱点を熟知していた。

「たとえ……私のプログラムを打ち破っても、今のトモロは機能低下の状態。さあ、」。役立たずのトモロでどう戦いますか……」

アベルの視界でジェイアークが激しく震動した。

ゾンダーがインパルスブレードで艦体を攻撃したのだ。

エネルギー翼は艦を保護する防護フィールド、ジェネレーティングアーマーに阻まれ、白い艦体自体に傷はなかった。

《ジェネレーティングアーマー、出力50%》

だが。攻撃と防御、双方のぶつかり合いにより、ジェネレーティングアーマーに使われるエネルギーが確実に消耗する。それに伴い出力も低下した。いかにジュエル・ジェネレーターが効率的で強力なエンジンとは言え、莫大なエネルギーにも限りがある。防御力に回し過ぎれば今度は攻撃力が落ちてしまう。その加減はトモロが得意とするところだったのだが。

《破損軽微。」、『次元の海』で戦うほうが有利ではないか》

もっと広い空間に出ればいい。そうすれば、キングジェイダーにフュージョンできる。

「そうしたら、海にいる奴らとこのゾンダーの挟撃を受けるかもし

れん。　　まずはこいつを倒してから他の遊星主を伐つ！」

ゾンダーは一旦間合いをとり、胸部装甲を開いた。
苛電粒子砲だ。

「ぬう……エネルギーチャージが完了したのか!？」

ジェイアークは防御力エネルギーを回した。
ジェネレーティングアーマーにビームが衝突する。

「く」

《出力68%から40%にダウン！　外部装甲に若干の影響あり》

「堪えろ」

その時。ジェイアークの近くになのはが飛んできた。
加勢するため、なのはが結界を張る。

ビームの連続照射時間はおよそ三十秒ほど。その間、耐えきれば…
…勝機は必ず掴めるはずだ。」はそう信じた。

「エクセリオン……バスター！」

デイベインバスターはあのビームには効かなかった。
だが、より威力が進化したエクセリオンバスターならば。

なのはの砲撃が、苛電粒子ビーム発生器官目掛け、ほとばしった。

レイジングハート・ジェネシスから、大口径カートリッジが排夾されると同時に、空中で魔法と科学の砲撃が激突した。

「おおっ……！」

今度はなのはが勝った。

エクセリオンバスターは苛電粒子ビームを押し戻す勢いで進み、ついにこれを爆散させた。

水しぶきの様なプラズマの輝きが飛び散り、エクセリオンバスターがゾンダーの胸を打つ――！

「いまだ！」

「は即断した。」

彼は飛び上がって叫んだ。

「フュージョン！」

「はジェイアークと一体化した。」

「ジェイバード、プラグアウト」

小型戦闘艇と後部艦体の二機へと、ジェイアークは分離する。

「ジェイダー――！」

ジェイバードはさらに変型し、全長20数メートル程のメカノイドとなった。

その機動性はガイガーにも匹敵する。

「ペンチノン、後を任せたぞ」

ジェイダーは疾駆した。

「プラズマウイングー!!」

背部から扇状に羽根が拡がり、一気に加速する。
なのはの頭を飛び越え、距離を詰める。

「プラズマソード!」

中性イオンの集合体が刃を形成し、伸長して剣となる。

トーレ・ゾンダーはプラズマソードを、インパルスブレードで受け流そうとした。

「はあっ!」

裂帛の気合いとともに一閃されたプラズマソードは、インパルスブレードの翼を打ち壊し、ゾンダーの機体を袈裟掛けに斬り裂いた。

「五連メーザー砲!」

ジェイダーの指先は砲口でもあり、そこからメーザーが放射された。
狙うは斬撃で破壊された傷だ。

爆発がゾンダーを打ち倒す。

「よし このまま奴のゾンダーメタルを」

抽出すれば、ゾンダーは停まる。

「「J!」」

警告の声が、その時響いた。
重なる声は、なのはとフェイトのものだ。

「むっ……!?!」

アベルが何かを仕掛けてくるかと警戒する」。そんな彼の前でゾンダーが変化を起こした。

ギユアッ!! 凄まじいエネルギーの嵐がゾンダーを中心に巻き起こる。

「なにっ。これは !?!」

ゾンダーの形態がさらに巨大に、そしてまがましいものへと変わっていく。それは、魔神とも形容すべき姿だった。

「Jよ。ジェイクォース無くしてこいつに勝てるかな?」

いつの間にか、白衣の遊星主が高みから彼らを見下ろしていた。

「貴様……パルパレーパ!」

ケミカル攻撃を得意とする、遊星主の一人。

「貴様があれを仕掛けたのか」

パルパレーパは様々な効果を持つケミカルナノマシンを自在に操る。その中の一つに、機体のポテンシャルを限界まで引き上げるものがあつた。

いわば、ドーピングだ。

本来ならパルパレーパが自分に使う物だが、アベルの命令でゾンダーに用いたのである。それにより、ゾンダーは機界新種に迫るパワーを手に入れた。無論、出力限界を越えた力はゾンダー自身にも反動を与え、機体を崩壊させるだろう。

とは言え、アベルやパルパレーパたちにとっては、単なる手駒にし過ぎない存在だ。

敵を滅ぼしてくれるなら、破壊されても胸は痛まぬ。

彼らにとってもZの力は嫌悪すべき力だからだ。

しかし。それにしても、ゾンダーを強化する行為は

「Zの力を利するもの！……赤の星の名を汚す、邪悪なる者共め！」

Jは、怒した。

赤の星を滅ぼしたZの力をためらいなく使う事に、心の底から激怒した。

Zの力により故郷を失った彼だからこそ。

貴様是最もしてはならない事をしたのだ、アベルよ。

「故郷を護れきれぬまま死んだ、ソルダートたちの無念を、貴様は

「忘れたかあ！！アベル！！」

激昂し叫ぶ」の言葉も、遊星主にはどこ吹く風だ。

「ふ……何をいいますか。全ては三重連太陽系再生のため　そのためになら私は如何なる力をも行使します」

「我々の行動を妨害する貴様は、神への反逆者として死ぬがいい！」
パルパレーパは傲慢に告げた。ゾンダー・プラジュナーはジェイダーに猛威を向ける。

「ぐああ」

さしものジェイダーも押され気味となり、窮地に陥った。
しかも、強化されたゾンダーのスピードはジェイダーをも凌駕するものだ。

「J！」

なのはとフェイトは彼を助けるため、飛び出した。
だが、ゾンダー・プラジュナーの圧倒的な力の前に、エース達も手こずるばかりだ。

《ESミサイル発射！》

ジェイキャリアーからミサイルが撃ち込まれるが、やはり、弾道の狂いが生じて致命的な攻撃にはならなかった。
《機能の回復は、まだ完全ではないのか……》

ペンチノンは己を齒がゆく思った。

《そうだ……凱はどうしたのだ！？》

青の星の勇者は、戦うために下船したのではなかったか。

ペンチノンがその事に思い到っていた頃。

凱は本局内で局員達の避難を手伝っていた。主に非戦闘員の隔離区画への待避、及び、地上への転送を、ガジェット襲撃に備え、警護していたのだ。

その途中、治療を受ける命を見てきた。意識が戻ってはいないが、容体に異常はないため、凱はジェイアークの元へ駆けつけようとした。

復活したジェイアークならどうにかゾンダーと戦えるだろう。凱はそう考えていた。

現状の分析と連絡、避難誘導をリインフォースエーに任せて凱は艦船ドックに向かった。

そこで目にしたものは、遊星主と、巨大ゾンダーと戦うジェイダーの姿。

「おおおおっ！遊星主！！！」

凱は二人の遊星主に躍りかかった。

驚異的なジャンプで、パルパレーパに接近する。

「獅子王凱、この前の決着をつけるか」

「ぐおっ……！」

パルパレーパの攻撃に、凱は壁に叩きつけられた。
余裕の笑みで凱に追いつき、腕のメスに似た剣で斬りつける。

「くっ！」

「ギャレオンも、ジェネシクマシンもない貴様に、神と戦えるのか!？」

それは、聖王のゆりかごの中でも言われたことだ。

「このままケミカル・フュージョンし、無力な貴様を踏み潰すのはたやすいが……」

巨大ロボット形態のパルパレーパ・プラスは、ガオフアイガーをも上回る。

「それでは面白くない。この状態で戦ってやろう」

慈悲深げに、パルパレーパは言った。

「最も、貴様に勝ち目のない事实は、変わらんがな」

「パルパレーパ。お前こそ、俺を見くびりすぎだぜ」

立ち上がった凱は、左腕を上にかざした。

「《ガオーブレス》！イークイーップ!!」

《equip》

「なにをするつもりだ？」

いぶかしむパルパレーパの前で、凱の腕のブレスレットが光を放った。

凱の肉体から着ていた衣服が粒子に分解され、魔力により構成された《バリアジャケット》へと変換される。凱は、身体各部に装甲を纏った。かつて、GG機動部隊の任務で装着していたアーマーと同じ形状のものだ。

そして、左腕には獅子の頭部を模した手甲が輝いている。これこそ、ルネと並んで、凱専用デバイスとして開発された、G式インテリジエント・デバイス《ガオーブレス》である。

凱は魔導師として、パルパレーパに戦いを挑むつもりだった。

「さあ、いくぜ、パルパレーパ！」

「神の前では無駄なことだ！」
パルパレーパが、先に仕掛けた。

《Protect Shade》

その攻撃を受け止める防御の魔法。

「小癩な！」

「うおおおおっ！」

Gストーンの光が、凱の拳に集まった。

「ブロウケン……マグナムッ!!」

射ち出された魔力は、弾丸と化してパルパレーパに向かう。スバルの技に似ているが、ガオガイガーの武装と瓜二つの打撃だった。

「ぬおおっ!!」

パルパレーパは凱の直射型砲撃魔法を食らい、予想外にダメージを負った。

「貴様っ……!!」

「俺は聞いた。魔法もまた、勇気の手だて。ならば、俺にも使いこなせるはず!」

凱のエヴォリユーターとしての能力は、魔導師のとっても有利に働いた。

高速演算、魔力の運営、デバイスとの相性……凱には優れた魔導師になれる素質を秘めていた。

さらに。機械と直接、神経を接続できる凱は、生機融合能力で完全にデバイスと一体化していた。ファントムガオーとそうしていたように。

「貴様もまた忌まわしきZの手を使うか……」

「違う。俺の手は」

嘲笑うパルパレーパに、凱は高らかに言った。

「大切なみんなの手を護る、勇者の手だて!」

魔法陳展開。パターンは円と方形を組み合わせたもの。

「詭弁だな。貴様の勇氣などでは何も守り抜けぬ！」
バルパレーパは、パーツキューブを召喚。

「ケミカルフュージョン！」

無数のキューブと融合。

「バルパレーパー！」

巨大ロボットになった。

「なら、こつちも思い切りいかせてもらうぜ！」

闘志を沸かせた凱は、ドックの天井と壁をうち破ってそびえ立った
バルパレーパ・プラスに、Gストーンの輝きを見せた。

一方。

ゾンダー・プラジュナーと戦闘中のジェイダーは、苦戦し追い詰め
られていた。

ジェイキャリアーとの連携で攻撃するが、上手くいかない。
フェイトは焦慮しながら、打開策を思案する。

そんな彼女に、バルディッシュが一つの提案を示唆した。

フェイトはすぐさま、「にそれを伝え、」はジェイキャリアー
のペンチノンに要請した。

《了解。回線オープン……情報を受信》

トモロの不調子を補うため、バルディッシュが協力してジェイキャリアーの制御を行うのだ。もともと、インテリジェント・デバイスは主に代わり魔法の起動、様々な情報、複雑な計算を処理するのが役割であり、しかも人間には不可能な高速演算が可能となる。同じ、意思を持った人工知性としても、トモロ・コンピューターと遜色のないバルディッシュは、トモロの補正には実に最適だった。

バルディッシュとペンチノンは膨大なデータを瞬時に共有し、計算を行った。

助かった。感謝する。

私は自分にできることをしているだけです。

お前は……どこか、あの紫のロボットに似ているな。

ペンチノンはボルフォッグを思い出していた。以前、まだ原種との戦いが続いていた時。彼はGGG諜報部の勇者ロボ、ボルフォッグのサポートを受けた事があった。

人ならぬ人工の生命体同士、短い期間だがよき交流を果たしたと思う。

ボルフォッグがそうであった様に、バルディッシュも常に冷静な思考を保ち、主に対する誠実な態度などは好感が持てた。

軌道計算・弾道計算・プログラム完了。発射シーケンス、用意……

ミサイル発射！

協力体制を築いたペンチノンは、次々に武器を撃った。

ES空間を通り、ミサイルはゾンダーの背後から着弾した。衝撃に揺らぐゾンダー。

しかし、それくらいで倒せる相手ではない。再生能力もより速くなっている。

倒すためには、どうしても、致命傷を一撃で与える必要があった。

（キングジェイダーにフュージョンできれば、あるいは）

宇宙最強最大のメカノイド、キングジェイダーの戦闘力は絶大ではある。が、この場所で下手に戦えば本局にも破壊の爪痕が残ってしまう。管理局の中心が破壊されてしまったら、次元世界の治安が維持にくくなるかもしれない。

（と言って、ジェイダーだけでは奴の出力に劣る）

Gストーンを持つ凱ならば、この窮地を打破できるかもしれないが、センサーによると彼はパルパレーパと交戦中らしかった。

《J。あのゾンダーと戦うにはキングジェイダーでなければ無理だ》

「それはわかっているが……」

《宇宙で戦えば遊星主に挟み撃ちに合う可能性がある。なら》

ゾンダー・プラジュナーの連撃をいなしながら、Jはペンチノンの

話を聴いていた。

《J-019との戦いで使用した手法を、使えばいい》

「そうか……！」

Jはたちどころに理解した。

ジェイダーはジェイバードに戻り、ジェイキャリアと合体、ジェイアークへとなる。

「よし、ペンチノン。ESウィンドウを展開しろ！」

《了解、ソルダートJ》

さあ。いまこそ、反撃の刻！

《ESウィンドウ……展開！》

「牽引ビームだ！」

ジェイキャリアから一条の光線が伸び、ゾンダーを捕らえた。指向性のある、潮汐力を帯びたビームで、対象を拘束し引っ張ることができる。

ゾンダーはもがき、剛力で逃れようとした。

ジェイアークはES空間にゾンダー^{エスケープ}を連れていく。

「Jは、なにを」

アベルは知らなかったが、原種大戦時、Jは強敵とES空間内部で行っていた。

赤の星での攻防戦で敗れたソルダートの一人 J-019は、絶望から自らゾンダリアンと化し、原種の走狗となっていた。原種は目障りなアルマとJ-002を始末するため、J-019を太陽系に呼び寄せたのだ。

かくして、同じソルダート同士の戦いがはじまり、JはGGGらの介入を嫌ってES空間での戦闘を敢行した。

ES空間は物理法則が異なる並列空間で、ES兵器はこの特殊な空間を渡って空間跳躍する。

「ここの被害を抑えるため、ですか。我々とは関係のない世界なのに、優しいことですね」

アベルはJの行動を小馬鹿にするように、評した。

しかし。次の瞬間、アベルと、そしてパルパレーパの表情が、苦痛に歪んだ。

「ジェネシクオーラ……！？」

魔法陣の光の中から、彼ら遊星主の宿敵が現れた。

「ギャレオン！」

緑の星、カインの創りし鋼鉄の獅子。

Gクリスタルの行動端末。

そして、勇者王の基幹をなすもの。

ギャレオンは凱達を護るように、遊星主の前に立ち塞がった。

遊星主はギャレオンが放つジェネシックオーラの波動で迂闊に近寄れない。

「ギャレオン、よく来てくれた！」

凱は原種大戦を共に戦い抜いた仲間を見上げ、嬉しそうに言った。

「フュージョンだ、ギャレオン！！」

ジェネシック・ガイガーの性能は彼の許にも届いていた。

ピサ・ソールの自爆で果たせなかったフュージョンを、いまこそ実現させる。

だが、パルパレーパがそうはさせじと、ある男の名を叫んだ。

「カインよ！汝の機体を奪い返すがよい」

ドックの壁を打ち抜き、緑の光を伴って現れたる長身の遊星主。

緑の星の指導者・カイン。

いや、厳密にはカインの人格と能力をコピーした、ペイ・ラ・カインだ。

ラティオ　天海護の本当の父は、緑の星の機界昇華で生命を落としていた。

「カイン　！」

凱は、彼を本物のカインと思い込み、敗北した過去がある。結果、新生して間もなき勇者王ガオファイガーが完全に破壊される事態に陥った。

（あの時はカインを複製と見抜けず、自分の勇気を信じられなかったから　　）

パピヨンはレプリ地球で凱に予言した。

貴方の信じるものが信じられなくなった時、凱自身の戦いが始まるのだと。

その戦いはもう、始まっている。

（今度こそ、俺は　　全てを信じて……戦う！）

迷いなき心で、凱は魔法を発動させた。

「プラスマホールド！」

「ぬお、体が　　！？」

雷撃の鎖がパルパレーパ・プラスの巨体を捕捉した。ガオガイガーの技を元に編み出したバインド系魔法である。

凱はすかさず《ブロウクンマグナム》でパルパレーパを打つ。

「があっ！」

パルパレーパ・プラスが衝撃に倒れた。それと同時に、凱はカインとギャレオンの許へと跳ぶ。

「偽のカインに真のギャレオンは渡さない！」

「ギャレオンは私のものだ　　緑の星の指導者であるこのカインの

……！」

ギャレオンの主は自分だとカインは宣言する。

だが、彼に本当の意味で意思と呼べるものはない。元来、遊星主アベルの操り人形にしかすぎないからだ。

彼を止めようと向かってきた凱に対し、カインはサイコキネシスにラウドGストーンの力を上乗せして放った。

「うわぁっ」

《ガオーブレス》がプロテクションで凱を守るが、吹き飛ばされてしまう。

カインはその行方を追わず、空中で静止するギャレオンに近づいた。

「さあギャレオンよ、お前の主を受け入れるがよい」

護が聞けば憤慨するであろう傲岸な口調で、ギャレオンに呼びかけた。

「ジェネシクにフュージョンできる資格があるのは、この私だけ

」

「違う！」

唐突に割り込んだ声。

視線を移すと、ギャレオンの肩になのはが立っていた。

「貴方には解らないの……？ ギャレオンが貴方を、拒んでいることを」

「なにを言う……ギャレオンの創造者である私を拒む理由がどこにある？」

カインは鷹揚に笑った。

「ギャレオンの目を見れば……明らかだよ」

カインは鋼鉄の獅子の顔に目をやった。

赤い双眸に、断固たる意思が宿っている。

「ギャレオン！？」

「ギャレオンは、真の勇気を持つ者だけを認める……！」

なのははかつて、護が言った事と同じ主旨の言葉を彼に突き付けた。

『ギャレオンは知ってる、本当の勇者を……！』

勇気を持つ者　勇者。

恐怖を乗り越え、諦めずに戦う者。

「そつだ、カイン。本当の勇気を持たない遊星主では、勇者にはなれない……！」

態勢を立て直し、追いついた凱が言った。

木星決戦の時に会った本物のカインこそ、「勇者」と呼ぶに相応しい高潔なる人物だった。だが、このカインのコピーは感情のない人形だ。そのような者にGストーンは輝かせられない。Gストーンは勇気を力に変えるのだから。

「ギャレオン！俺に力を貸してくれ！！」

「……黙れ！」

カインは怒気をあらわにした。しかし。これも単に、アベルが作ったプログラムに従った表情に過ぎなかったのだが。

カインはラウドGストーンのパワーを凱に叩きつけようとする。

「させない、レイジングハート！」

なのはが凱を守るため、カインに《アクセルシューター》を撃った。

「くっ」

カインは防護の力で防ぐ。

「凱さん、早くフュージョンを……！！」

「おう！」

凱はギャレオンの口腔部に飛び込もうとした。

「なにが……勇気だっ！」

「があっ！」

飛来したパルパレーパ・プラスが、背後から凱を攻撃した。

「弱き人間の貴様に……勇気などあるものかあっ！」

「パルパレーパっ……ぬおっ、体が！？」

「苦しいか。私のケミカルナノマシン、充分に味わうがいい」

彼が凱に放ったのは、パレッス粒子に似た毒物で五感の神経を破壊する、ケミカル攻撃でもあった。

「くっ」

《ガオーブレス》が治癒魔法を発動しようとするが、それを制して凱が言った。

「パルパレーパ、超人エヴォリューダーの力を知らないのか」

凱は体内のケミカルナノマシンに干渉し、そのプログラムを書き換えた。それによりナノマシンの効果を無効化してしまう。

「ぬう……大人しく痛みなき死を与えてやろうとしたが……。いいだろう、神を本気にさせた後悔、貴様に思い知らせてくれるわ！」

「望むところだぜ……！」

凱は長髪をたなびかせ、不敵な表情を浮かべた。

一方、なのははギャレオン破壊に目的を切り替えたカインと交戦していた。

ふと、上方を見ると、ESウィンドウの中にジェイアークがゾンダー・プラジュナーを引きずり込もうとしている。

「ギャレオン、主に逆らうか！」

カインに向かって、なのはに協力したギャレオンが、牙や爪で攻める。

「むう。我一人では分が悪いか」

カインは不利を悟った。

パルパレーパも凱との戦いで手を離せないようだ。アベルのほうは先に母艦に帰還したのか、姿が見えない。

彼は戦場からの離脱を決めた。

「ギャレオンよ、いかにお前が我らと敵対しようが、最後に敗北するのはお前たちだ……ラティオも、な」

そう呟くカインは、遊星主の飛行空母ピア・デケム・ピットに通信を送った。

「ウーノ、私を転送させろ」

と、命じる。

遊星主の手助けで衛星軌道拘置所より逃亡した戦闘機人ウーノは、直ちに命令を実行に移す。

だが、カインがピア・デケム・ピットに転送されようかという瞬間を狙って妨害する者がいた。なのはだ。

「貴方を行かせるわけにはいきません」

できれば捕獲し、遊星主の企みを聞き出したいところだ。

「小娘……」

ならば、戦ってこの場を脱出しよう。

カインはソール11遊星主の戦闘用オプシオンであるパーツキューブを呼び出す。

「ソールウェーブ！」

パーツキューブから強力なエネルギービームが発射される。なのはがバリアで防御した。

「なんて……パワーなの！？」

サイコネシスなどの超能力にラウドGストーン。そしてパーツキューブ。

ペイ・ラ・カインは侮れない敵だと、なのはは再認識した。

「全力全開でいかないと……でも」

本局に被害が出るような戦い方は避けねばならない。それは」が危惧していたことでもあった。

「同じ魔導師相手なら、純粹魔力ダメージのみでもいいんだけど」

それなら建物への被害は少なくできる。

しかし、遊星主は質量兵器のみの世界から来た存在だ。物理的な破壊の力だけが、彼らを倒すことができる。

いや。一つ、遊星主に有効な手段があった。

そのことをなのはは知らなかったが、ギャレオンは、凱は、知悉していた。

「えっ……！？」

なのはは振り返って、ギャレオンを見た。

なのはの胸に、声なき声が聞こえたのだ。

それは、なのはに勇気ある選択を決めさせるものだった。

「ギャレオンの……声？」

ギャレオンの意思。その想い。

「私、が……？」

勇気あるものよ。汝は勇者の資格ありき。

「ギャレオンと」

なれば、勇気ある誓いに基づき、大いなる遺産の力、汝に与えようぞ……

「でも、貴方は凱さんの……」

「俺に構う必要はない　君がギャレオンにフュージョンするんだ
！！」

なのはの愛杖、レイジングハート・ジェネシスはG式に進化した、
新たなデバイスだ。

Gストーンを組み込んだレイジングハートには、フュージョンを可能にする機能を有していた。

「ジェネシックこそ遊星主に対する最大の切り札。奴らを倒す為にはギャレオンの力があるんだ」

パルパレーパ・プラスの斬撃を回避しながら、なのはに伝えた。

「さあ、早く！　君の勇気を、俺は信じている」

まだ躊躇するなのはに、凱は大きく叫んだ。

それで、彼女の気持ちは固まった。

「わかりました……私、やります！フュージョンを！」

「馬鹿な。この宇宙の人間がフュージョンなどと……！」

パルパレーパが吐き捨てた。

「彼女も蒼の星の人間だぜっ」

凱はなのは達について、ある程度の話は聞いていた。

「ましてやデバイスの助けがある。サイボーグだった俺よりも有利なはず……!!」

ゾンダー・プラジュナーは、ESウィンドウの彼方へと消えようとしていた。

「あの小娘にジエネシックが使いこなせると……?。カイン、なにをしている。その娘を始末しろ」

冷やかな声に、僅かに焦りのようなものが感じられた。

「ジエネシックはお前達の天敵だったな。よほど、怖ろしいらしいようだな」

「神に怖れるものなど……ない!!」

パルパレーパの振るうメスを、凱の直射型攻撃魔法が破壊した。

「やはり、凶星のようだな、パルパレーパ!!」

「貴様」

彼らが戦うのを視界の片隅に捉えながら、なのははレイジングハート・ジェネシスを手にギャレオンの前に飛んだ。

「フュージョンー!!」

《Fusion Mode》

なのはのバリアジャケットが変化する。
光に分解されて、新たに再構成された。

機体とフュージョンするために造られた特殊な防護服だ。胸元に宝石の形態に変わったレイジングハートが光っている。

「むっつ」

カインが小さく呻いた。

ギャレオンの口蓋部になのはが吸い込まれる。

「やったな……!!」

凱は歓声をあげた。

「ジェネシク・ガイガー……!!」

なのはがギャレオンの体内に接続され、メカノイドヘシステムを組み換える。

だが、変化はさらに続く。

《Fusion Revolution》

そして　　かつてない奇跡が、起こる。

「不屈の心よ・星の輝き・大いなる力を・勇気ある誓いのもとに
！！」

パルパレーパは、驚愕した。

「信じられん……これは……どういうことだ!？」

彼は魔法を理解していなかった。

想いが奇跡を生む、勇気の力を……！！

鮮やかな緑と桜色の輝きのなか、レイジングハート・ジェネシスは、
創成の力を解き放った。

第九話 ジェイアーク復活！（後書き）

エンディング・テーマ

エターナル・ブルー

煌めく星座は　なのはの砲撃
それは選ばれた　術師の証

赤い宝石掲げ

防護の服を纏って　oh　yeah

ああ　なのはの空はブルー

君の願い　信じれば叶うよ

ああ　心を繋ぐブルー

シユートの輝き

傷つき倒れた　夜には逢いたい

フェイトの腕の中　眠れるように

辛い戦いを越え

あなたと友達になれた　oh　yeah

ああ　見上げる空はブルー

熱い勝利　デバイスに誓った

ああ　忘れはしないブルー

ブレイクの輝き

ああ 明日の空はブルー
共に夢を 信じてる仲間さ
ああ 心も空もブルー
永遠の輝き
ああ 見上げる空はブルー
夜の終わり 新しく誓った
ああ 未来へ続くブルー
永遠に輝く

第十話 奇跡！ スター・ガイガー！！（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ファイナル・フュージョン」 「勇者王誕生！ - PREVIEW -
未発表Ver」

魔法少女リリカルなのは

「星よ集え！ スターライトブレイカー」

ほか

第十話 奇跡！ スター・ガイガー！！

ジェイアークの艦橋に戻っていたフェイトは、そこからはがギヤレオンとフュージョンするのを目撃していた。

（なのは……！）

メカライオンの姿から、人型のメカノイドに変わるのを、息を飲んで見守った。

（あれが……ガイガー！）

ジェネシック・ガイガーの勇姿にフェイトは感嘆した。

一瞬の後、フェイトとジェイアークはゾンダー・プラジュナーを引き連れて、ESウィンドウに突入していった。

カインは、己のために開発されたと思い込んだ機体の変型するのを、固い表情で見ていた。

通常のガイガーを越える、対遊星主用アンチプログラム・ジェネシック・ガイガー。

ギヤレオンのGSライドとなのはのリンカー・コアが接続され、その全身に魔力が行き渡った。

レイジングハートがその機能を掌握し、なのはの意思とフィードバックする。

なのはの魔力光と同じ色の翼が六枚、ガイガーの背から伸びた。神々しい印象を与える翼だ。

これこそ、魔法の奇跡が生んだマジカル・メカノイド。

魔法の勇者とも呼ぶべき機体。その名も、スター・ガイガー！

「ジェネシク・クロウ」

ガイガーの格闘戦用武器が装着される。

「ぬっ！！」

スター・ガイガーはカインに迫った。

カインはサイコネシスで戦おうとするが

「ぐああっ！」

ジェネシク・オーラを纏ったクロウの一撃で、カインの肉体を撃破。ジェネシク・オーラに遊星主は太刀打ちできない。彼は細かな粒子に分解され、消滅した。

「カイン　！？」

パルパレーパは忌ま忌ましい敵の誕生に、憎悪の視線を送った。

「次はお前の番だぜ、パルパレーパ！！」

凱は気迫を籠めて攻撃を繰り出した。

「うぐっ……小癪な！」

パルパレーパ・プラスが揺らぐ。凱は一気に踏み込み、至近距離からの砲撃を胸にぶつけた。パルパレーパのダメージは軽いように見えたとが……

「この程度の攻撃で……ぐわあ!？」

苦痛の叫びがパルパレーパから漏れた。

「か、体が　!？」

痛みに震えるパルパレーパは、機体の制御ができなくなった。

「お前がさつき俺に打ち込んだケミカルナノマシン、返したぜ!！」

先程のケミカル攻撃、凱はナノマシンのプログラムを書き換えて逆にパルパレーパに注入したのだ。それはパルパレーパ・プラスを蝕み、動きを封じた。

「ぐおおおおっ!」

凱の腕に緑の光が集う。

なのはの必殺技と見紛うような、収束砲。

「ブロウクン……ファントム!！」

ブロウクンマグナムを越えた一撃。

パルパレーパ・プラスの機体が、砕け散る。

「ぬああああっ……！！！」

爆発が、パルパレーパを粉碎した。

「はあはあ……」

初めて魔法を使った実戦で、凱は疲労を覚えた。
だが、まだ敵の全てが倒されたわけではない。

（「……」）

並列空間で戦っているはずの「」達に、凱は思いを致した。

（あいつらは、勝てただろうか……）

それまで戦場だった場所に、沈黙が落ちた。

本局の各所が戦闘で半壊し、局員達が事後処理に走りはじめた。

ES空間内。

トーレ・ゾンダー・プラジュナーは、空間に入ったところで、牽引
ビームから解放された。

そこは無重力の世界であり、特異な法則に支配されている空間だ。

「メガ・フュージョン！！」

ジエイアークは再度、二機に分離し、合体する。

「キングジエイダー!!」

百メートルを越える全身に、無数の武器を搭載した、ジャイアント・メカノイド。

「決着をつけてやる!」

」は鋭い闘志を燃やした。

そこへ、桜色の翼を生やしたガイガーが現れる。
なのはがフュージョンした、スター・ガイガーだ。

そして、二体のメカノイドと強化ゾンダーとの戦いが開始される。

ゾンダー・プラジュナーは肩や胸の装甲板を開き、白い球体を露出させた。小さな稲妻が爆ぜる光球が、その球状の器官の上に浮かぶ。
なのはのアクセルシューターのような技だ。

それが、キングジエイダーとスター・ガイガーに向けて発射される。
自動追尾機能があるのか、回避しようとする彼らに正確について来る。

《Wide Protection》

だが、ゾンダーの機雷攻撃も、なのはの防御魔法には通じず、キングジエイダーはジエネレーティングアーマーで身を守った。

「反中間子砲、十連メーザー砲!!」

キングジェイダーは凄まじい火力で反撃、ゾンダーの身体は爆発に包まれる。

「シュートッ!!」

なのはも得意の砲撃でゾンダーにダメージを与える。

ゾンダー・プラジュナーは再生能力で傷を癒そうとするが、「となのはは休まず猛攻を加えたため、再生が追いつかなくなってきた。

それでも、死を恐れぬゾンダーは、自己の破損に構わず戦う事を辞めない。

《Restrict Lock》

しかし。ゾンダーはなのはのバインドにより、拘束されてしまう。

以前、強化前のゾンダーは管理局武装隊のバインド魔法を容易に引きちぎったが、魔力とGストーンのパワーで威力を増したなのはの《レストリクトロック》は剛力を以ってしても無理であった。

「うおおっ!!」

キングジェイダーは、拘束により動きを止められたゾンダーに、集中砲火。

そこへさらに

「スターライトブレイカー!!」

ガイガーの胸　ギャレオンの顎の前方に形成された魔力球が、最強の魔法を発動させる。

一撃必倒。

砲撃が、ゾンダー・プラジュナーの胸部に直撃した。

「！！」

その装甲が、まるで紙で出来ていたかのように、易々と砕け散った。

「いまだっ」

キングジェイダーがゾンダーに強襲をかける。

腕を穿たれた胸に突っ込む。

ゾンダーの機体から、核となっていたゾンダーメタルを引き抜いた。

「ディバインバスター！」

ゾンダー核を失った機体を、なのはが粉々に破壊した。

ゾンダーを構成していた物質は、きらきら輝きながら、砂粒のような粒子がES空間に消えていく。

「これで……ゾンダーを浄解できるな」

Jはペンチノンに通常空間への復帰を命じた。

ES空間からの脱出のため、時空を隔てる扉が開かれる

時空管理局本局。

凱やシャーリーは、固唾を飲んで戦士達の帰還を待ち続けた。ESウィンドウが閉じてもう数時間は経過した気がする。無論それは錯覚で、実際には十数分しか経っていない。

（ゾンダーは……）

倒せただろうか

凱が自問した時、《ガオーブレス》が知らせてきた。

《The distortion of the dimension was perceived》（時空間の歪みを感じしました）

はっと、上空を見上げると、そこから圧倒的な存在が感じられた。

ES空間から、超弩級戦艦ジェイアークと、スター・ガイガーが還ってきたのだ。

「ゾンダーメタルは、回収した！」

Jは高らかに捷報を伝えた。局員達は歓びの表情をあらわした。

「あとは、次元の海にいる遊星主か」

クロノ提督は三段式飛行空母ピア・デケム・ピットの映像を睨んだ。
アベルは艦に撤退し、パルパレーパとカインは敗退している。

（さあ、どう出る？）

緊張しながら出方を待ったが、やがて攻勢を断念したのか、ピア・デケム・ピットは艦首を翻して退きはじめた。

魔法陣が出現し、巨艦は光に包まれて、かき消える。本拠地であるピサ・ソールに戻ったのだろうか。

クロノはほっ、と息を吐いた。彼は指揮下にある艦隊に、ピサ・ソールの動向をより徹底して監視するように、通達を出した。

「第一種警戒体制、ここに解除する！」

管理局は戦闘状態を切り替え、施設の復旧と負傷者救助を優先して活動をはじめめる。

その間に、護がミッドチルダから駆けつけてきた。
ゾンダーメタル浄解のためである。

「ラティオ、どうした。顔色が優れぬようだ……？」

少年の顔を一瞥して、怪訝そうに「が訊いた。

「大丈夫、ちょっと向こうで戦って疲れただけ……」

無理しているのだろうが、護は明るい口調で言った。

「そうか、ならいいのだが……」

「は、ミッドチルダでなにかあったのではないか、と疑ったが敢えて問い質したりはしなかった。」

護はゾンダーメタルの浄解に取り掛かった。

ゾンダーメタルはジェイアークの保管室に保存されている。かつてはゾンダークリスタル保管に使われていた部屋だ。

淡い、緑の輝きを発しながら、護が断ち切られた命を繋ぐ呪文を唱える。

ゾンダーメタルから人型へ。

生機融合の力が解き除かれ、トーレの姿を取り戻していく。

かつて、浄解を受けた数多の者達と同じ様に。トーレもまた、滂沱と落涙しながら己の罪を悔い改めていた。

「さあ。奴らの計画について、知っていることを全て吐いてもらうぞ」

「は冷淡とも呼べる声で言った。それは、ゾンダー化の悲劇を微塵にも考慮にいけない口調だった。」

「何でも言います」

トーレは性格が一変した態度で、供述する。

彼女の口から、遊星主の企みが語られた。護はアベルの計画に対し、衝撃を受けた。

「アベル……君は、なんという……!」

クロノはこの会話を、ミッドチルダにいるはやてにも聞かせるため、
急いで通信を開かせた。

第十話 奇跡！ スター・ガイガー！！（後書き）

ソール11遊星主の計画により、次元世界に危機が迫る。
はやては決断する。

「今度はこちらから、ぶっ叩きに行くで！！」

かくして、新装備を配備した機動勇者隊は、遊星主への逆襲を開始する！

なのははヴィヴィオを取り戻すため、カインの遺産を我が為に行使する事を決めた。

フェイトもまた、Jと共に新たな力を啓かんとしていた。

凱と護は、己が宿命に決着を着けるため、勇気ある誓いを改めて自分に課していた。

決戦に至るための序章 第十一話「未来への光」 TAKE OF

F！

第十一話 未来への光（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「前話回想」

「いのちつきても」

「勇気ある戦い」

「希望」

ほか

第十一話 未来への光

ミッドチルダを見舞ったゾンダーによる破壊活動は終息した。

「……コクトウーラ！」

緑の髪の少年 天海護の唱える浄解の呪文が、ジェイル・スカリエッティと呼ばれる人間をこの力から救い出す。

凶悪な広域次元犯罪者として名を馳せた男は、全くの善人として生まれ変わったようだった。

泣いて罪を悔い、罰を請う姿は、一種の異様さを見ている者に覚えさせた。

「ぐぎゃあっ!？」

その、スカリエッティの口から奇妙な悲鳴が上がった。

同時に、ミッドチルダの平和を震撼させた男の胸から、鮮血が噴き出す。

「なっ……!」

護の眼に、信じられない光景が映った。

スカリエッティの胸から、細い繊手が突き出ていた。手は血で濡れている。

「な、なぜ……」

スカリエッツィの掠れた声が問う。

腕が引き抜かれ、致命傷を負った体が光に染まった。

それがレプリジン消滅の運命だと、護は知っている。だが、複製とはいえ、せつかく浄解できた人物が消えていくのは、彼には堪えられなかった。

「どうして!？」

悲しみを含んだ護の叫び。スカリエッツィの体は光の粒子と化して崩壊していった。

「仲間なのに……!」

レプリスカリエッツィを殺害した女は、悪びれることもなく言い放った。

「あんなの、私が知っていたドクターじゃないわ」

そう。彼女　クアットロが愛し忠誠を尽くしたドクター・ジェイル・スカリエッツィはあのような、柔弱な男ではなかった。ゾンダー化と浄解について十分な知識が無かったクアットロは、スカリエッツィが急に変節したように見えたのだ。それゆえ、余計なことを話される前に始末した。

最後までスカリエッツィを慕い、ゆりかご戦でも執念深くドクターの夢を叶えようとした彼女だからこそこ。泣いて許しを請うスカリエッツィは、失望以外の感情をもたらさなかった。だから殺した。

クアットロは戦闘機人の中では非力な方だが、それでも、その抜き手は人間一人を即死させるほどのパワーはある。そんな彼女の後ろでは、遊星主ピルナスが、嘲笑ともとれる微笑を浮かべて佇んでいた。

「どうせ、ドクターの変わりならいくらでもあるんだから……」

スカリエッティがナンバーズの体内に残した、彼自身の因子だけではない。クアットロはピサ・ソールの能力を知っている。物質復元装置があれば、何度でもドクターは蘇るのだ。

クアットロの余裕はそこに起因する。スカリエッティのレプリジンは彼女の中に在った因子を基に、ピサ・ソールで複製したものであった。

だが、それでも。

あっさりと、自分の創造主を手につける非情さに、はやて達は眉をひそめずにはいらなかった。シグナム等は露骨に嫌悪を表わにしている。

護も、仲間を裏切る行為は、許せなかった。

「ふん、まだ一戦交えたそうな顔をしてるわね」

クアットロは、自分を包囲する面々を冷たく見下しながら言った。

「残念だけど。私達の目的は大方達成されたし。今日は引き揚げさせてもらっわね」

「この状況下で逃げられると思っているのか？」

夜天の主はやて、守護騎士達、若きストライカー達。

精鋭が揃う陣容である。クアットロやピルナスといえど、無傷で逃走ができるわけがないと、誰もが思っただろう状態だ。

「馬鹿め。私達には、ピア・デケムがあるのよ　そして、ウーノ姉様も……」

クアットロはピルナスに、遊星主の旗艦を呼び出すよう頼んだ。
ピア・デケム・ビット

「ピア・デケムに私達の転送収容をさせるように姉様に　」

「ああ、それなんだけど……眼鏡ちゃん」

羽を使い、浮かんだピルナスが、不吉さを漂わせる口調でクアットロに告げる。

「ドクターちゃん同様に、貴女ももういらなくなったの」

「ど、どういう　」

「用済みってことよ」

クアットロの眼が見開かれた。

「な……！？」

「貴女の力を見せてもらったけど……大して役には立たないみたいだし。ドクターちゃんと一緒に消えてもらっわね」

あくまで明るいピルナスの言葉だったが、その内容は凄惨であった。

切り捨ての宣言に、クアットロはうろたえた。

「ちょ、ちよつと、待って……！ 私は」

「まあ、例の物を奪う役には立ったけど、あの程度の戦闘しかできないんじゃないかねえ」

ガジェットを操った戦いのことだろうか。

元来、戦闘より諜報工作に向いた能力の彼女には、酷な言いである。

「じゃあね、眼鏡ちゃん」

「ひいつ！？」

遊星主をあてにしていたクアットロは、捕縛の為に迫る管理局に恐怖の眼差しを向けた。

「私はまだあんた達の力にな あっ！？」

「うるさい、静かに捕まれ！」

クアットロの腕を、ルネが掴んだ。サイボーグの怪力である。同じ機械の身体といっても、クアットロには振りほどくパワーが足りない。ルネは慣れた手つきで戦闘機人を拘束する。

「お願い、見捨てないで……」

嘆願するクアットロに、ルネが怒鳴った。

「やかましい！ ギムレットかよてめえは！」

ルネはフランスで倒した、バイオネットのサイボーグ指揮官を思い出し、苛ついた。

ガオファイガーに敗北したギムレットは、見苦しく命請いをした拳げ句、逃げ出そうとしたところをルネにとどめを刺された。

「理不尽よっ……」

クアットロの抗議はピルナスの失笑を買っただけだった。

戦闘機人は救い主の遊星主を仲間だと認識しているようだが、実態は違う。

クアットロは遊星主と協力することで、ドクターの夢が叶うと信じていた。その喜びが、普段の彼女でなら見抜けたであろう、遊星主の魂胆を悟らせなかった。

護や」に対してそうだったように、戦闘機人などアベルには道具にしか過ぎない。

その道具があまり役には立たぬと判明した時、廃棄を決定しても遊星主の心が痛むことはない。

「さようなら。眼鏡ちゃん、この快樂と美の女神から手向けよ。受け取りなさい」

上空から凄まじい火炎の渦が、クアットロに放射された。

それはクアットロを捕らえたルネにも殺到する。

「ああっ!？」

「うわあっ!」

高熱に二人は焼かれる。

ルネのデバイス《リオン・レーヌ》がプロテクションを発動した。

短い時間だが、プロテクションは金属が融解するような高温にも耐えられる魔法である。クアットロは魔法発動までの間、ともに炎を浴びていた。ルネは彼女を盾にする恰好になったため被害は軽微だ。

「しづといわねえ、子猫ちゃんたち！」

ピルナスは襲い来る魔導師をあしらいつつ、クアットロとルネに接近する。心底愉しんでいる相貌だ。

「きゃああっ……！」

クアットロの身体を、ピルナスの鞭が打った。バインドにより彼女は回避できなかった。

「ピルナス！」

怒りに燃えたルネが、遊星主に一撃を与えんとする。それを素早い動きで避け、ルネを蹴った。

「ぐわっ！」

《獅子の女王》を無視して、ピルナスはクアットロに鋭い針を突き刺した。

「うっ……あっ……」

「できるだけ、痛くないようにしたかったんだけどねえ」

そう、うそぶくピルナスの声はもはやクアットロの聴覚には届かな

かった。

「ピ……ルナ……ス……っ！」

彼女の、天へ指し伸ばされた腕は、誰に向けたものか。

クアットロの胸に突き刺した針から、ピルナスは炎を発した。

「……っ!!」

クアットロが爆発した。

多くの野望を持っていた彼女には不本意すぎる破壊であつたろう。
最も、これまでクアットロがしてきた事を振り返れば、因果応報な
死だったかかもしれないが……。

「さすがに外道だな」

ピルナスのもとへ舞い戻ってきたルネが、吐き捨てるように呟いた。

「子猫ちゃん、貴女はまた今度よ。じゃあね」

「そうはいかん!!」

シグナムがシュランゲ・フォルムのレヴァンティンを放つ。
空中で鞭と連結刃が激突した。

「あら、おっかないわねえ」

それでもピルナスは畏れた様子は見せない。

キャラはバインドを発動して捕らえようとする。

だが、ピルナスの動きは早く、捕獲できない。

「あいつはあたしがやるっ！！」

ルネが拳に魔力を溜めて、跳ぶ。

「でやあっ！！」

「ちっ……」

ルネの攻撃力は以前より上がっている。
侮っていたピルナスは脇腹に打撃を食らい、失速した。

「逃がしはせえへんで！！」

はやては魔法の詠唱を完了させ、起動させようとした。

「ピア・デケム！」

それよりも一瞬早く、ピルナスの呼びかけが旗艦である空母に届く。
要請を受けたウーノはすぐに転送を開始。
魔法陣がピルナスの足元を照らす。

「転送魔法……か」

戦闘機人を味方にする事で、遊星主は魔法すら使えるようになったのか。はやては唇を噛み締める。

「駄目だ……阻止できなかった……」

ピルナスの姿がかき消えた。

「次は必ず……！」

ルネが押し殺した声で言った。獅子の名にかけて、絶対に獲物は仕留めてみせる。バイオネットの幹部をそうしたように。

一矢も報いずに退きはしない、とルネは誓った。

一方。

護は改めて見せ付けられた遊星主の不義に、心を重くしていた。

（自分達の役にたたなければ、協力者でも容赦なく命を奪う……）

クアットロはたしかに酷い犯罪者だったかもしれない。だけど、殺す必要はなかったはず。

罪を償う機会是与えるべきだった。改心次第では恩情も有り得たのではないか、と思う。

だが、結果的に、クアットロは夢と呼ぶ野心への執着で、身を滅ぼすことになった。

例え裁きを受けねばならなかったにしても、遊星主に殺されるのではなく、裁判によってなされるべきだった。彼女により人生を狂わされた被害者のためにも。

護の胸に、悲しさと悔しさが去来する。

「護くん」

はやてが疲労した表情で、護に言ってきた。

「ここでの戦いは終わった。護くんには、本局の応援を頼むわ」

本局にもゾンダーが現れたと、通信で知らされていた。

「後のことは皆に任せたらええ」

「はい。わかりました」

先にギャレオンが本局に行っているが、ゾンダーの浄解には護の力がある。

首都を後にした護は、本局に駆け付けた。

そこでは、管理局と遊星主・ゾンダーとの戦いが繰り広げられた痕跡が認められた。

やがて。

ES空間での苛烈な戦闘が終結し、帰還したキングジェイダーの手には、ゾンダーメタルが握られていた。

護はゾンダーの素体にされたトーレを浄解。マイナス思念を全て洗い流されたトーレは別人のような従順さを見せた。

管理局は尋問を開始し、様々な質問が彼女に浴びせ掛けられる。それらにトーレは素直に答えていった。

戦闘機人が知り得たアベルの策謀。

それについて、トーレは洗いざらい話したが、その口述は、護や凱、Jに衝撃を与えるのだった。

「時空管理局機動勇者隊の総力を以って、ソール11遊星主に対する攻勢をここに、決定します」

八神はやての宣言する声が会議室に響き渡った。

既に遊星主襲撃事件からは、数時間が経過している。

未だ被害の調査と復旧が続くなか、組織の関係者は緊急召集を受けた。

本局よりは被害の少ないミッドチルダ地上本部が遊星主対策会議の開催場所だ。

司令官はやてを筆頭に、提督、隊長クラスが出席し、さらにはかの「伝説の三提督」もこの会議に参加していた。何しろ本局が直接進攻を受けたのは開局以来、初めての事なのだ。三提督といえど黙って見ていることはできない。

レオーネ・フィルス、ラルゴ・キール、ミゼット・クローベル。創設期に活躍した三提督は、管理局の名誉職であるが、隠然たる権勢を持ち、非公式にだがはやての六課設立にも協力してくれた恩人でもある。次元世界の平和を護りたい、という気持ちは誰よりも強い人物達だ。

さて。先の襲撃事件の陰で、本局とミッドチルダから盗まれた物体がある。

「迂闊でございました。まさか遊星主が襲つて来るとは思わず油断いたしました」

警備の責任者が報告してきたその奪われた物体とは、なのとはフェイトには因縁のあるロストログアだった。

「ジュエルシードの……強奪!？」

魔力の結晶体であり、複数を用いて起動させれば次元震をも引き起こせる、強力なロストロギア。そして、なのはが魔法に出会い、フエイトがなのはに出会うきっかけを作ったロストロギアでもある。なのはが九歳の時遭遇したPT事件の解決後、ジュエルシードは管理局によって嚴重に保管されていた。

それから数年後。スカリエッティはジュエルシードを奪い、機械兵器の動力に組み込んで使用した。

JS事件後は、回収されたものを含め、全てのジュエルシードは新たに封印を受け、厳しくセキュリティを施された各管理施設に保存された。悪用されれば恐ろしい結果を生むのは自明だからだ。

しかし。遊星主にそれを奪い盗られてしまう。それが何の目的の為かは不明であったが、捕獲されたトーレの証言で判明した。

それによると、本局と地上の襲撃は、どうやら陽動と考えられる節がある。

管理局の戦力がゾンダーに集中していた間隙を縫うように、アベルは遊星主ピア・デケムとポルトンにガジェットを率いらせ、ジュエルシードを奪わせたのだ。保管所を守る警備隊も精鋭だったが、遊星主には叶わず、みすみすロストロギア奪取を成功させてしまった。

アベルの目的は三重連太陽系の再生である。だが、次元世界からの帰還方法が解らない現在、この世界に三重連太陽系を復活させるしかない。そのようにアベルは断を下した。

そのために、次元世界を滅ぼす。

だが、如何に遊星主が強大とは言え次元世界滅亡には手がかかる。

そこで、この世界で生まれた力を使い、次元世界を滅亡させる

アベルの言い方では「浄化」させる。

ジュエルシードは儀式により持ち主の願いを叶えるが、次元震を起

こしてしまつては時空連続体（つまり一つの次元そのもの）という「器」ですら破壊されてしまう。それでは、三重連太陽系を再生させる事はできず本末転倒になる。

それで、アベルはジュエルシードの力により、次元世界の機界昇華する方途を選んだ。

「機界昇華だと……？」

ソルダートJはアベルの考えに、信じられぬ思いだった。故郷に還れぬ焦燥で自暴自棄になったのか。

アベルのやり方には理性を感じられない、とJは言った。

（ゾンダーといい、なにゆえこの力を頼る……！？）

Zマスターと相打ちすら躊躇わず戦ったJには、理解不能である。

（それだけ、三重連太陽系を再生させる念いが強いのか　だが）

罪なき他者を滅ぼして得た再生に、価値はあるのか。Jは疑問に思う。

（アベルは間違っている。そのような計画のために、アルマを利用させはせん！）

アルマ　戒道幾巳は現在、遊星主に捕われ、《ピア・デケム・ピット》のメインコンピューターの代わりに使われていた。いわば人質にとられたようなもので、Jを苦悩させる材料の一つになっている。

「奴ら　機界昇華の後、アルマに浄解させる気か？」

遊星主パルパレーパは人間を操る技術に長けている。ケミカルボト
ルを埋め込まれた凱がそうであったように、本人の意に介さず、戒
道の肉体を操作するだろう。

「だが、この広大な次元世界を、彼一人に浄解させるのか。膨大な
時間がかかるぞ」

凱が疑問を呈した。それに護が答える。

「……遊星主には、ピサ・ソールがあるよ、凱兄ちゃん」

「そうか　！」

物質復元装置であるピサ・ソールには、複製を生み出す能力がある
ことはすでに周知である。一人のアルマならば、世界全ての浄解に
は、途方もない時間と労力があるだろう。

だが。それが百のアルマ……千のアルマならどうだろうか。

レプリジンを造り、操れば極めて短期間に次元世界の機界昇華を浄
解できる。

機界昇華により全生命は機界化し、浄解によって有機体を取り戻し
てももはや戦う力などありはしない。遊星主は蟻塚を踏み潰すよう
に、簡単に次元世界を亡ぼせる。

あとは白紙のごとき世界が遺るはずだ。そして、データを上書きす
るように、新しく、ピサ・ソールを使って三重連太陽系を再生させ
ればいい。

これが、トーレの証言により得られた、アベルの計画の大まかな筋
書である。

「ひどい……」

フェイトはあまりに非道な計画に、怒りより哀れみが湧きあがるのを覚えた。

人造魔導師としての出自から、フェイトは「生命」の重たさと価値を常日頃から尊んでいた。実母に失敗作として廃棄させられそうになったからこそ。生命を玩具の様に扱う者を許せない。スカリエツティのように。

そして、彼ら遊星主はスカリエツティをも越えた、人間の尊厳を踏みにじった大量殺人を行おうとしている。

「どうして……遊星主は自分達の故郷を滅ぼした力を平気で振るえるの、かな」

ぽつんと、なのはが呟いた。
忌引すべきこの力。アベルはなによりそれを憎んだのではなかったのか。

「それは、この世界が三重連太陽系じゃないからだと思う」

護が遊星主と戦う事を決意したのは、アベルがはつきり地球を見捨てる発言をしたからだだった。

護の真の故郷はたしかに三重連太陽系だ。しかし、彼という人間を育ててくれたのは、紛れもなく地球という星である。地球こそ、護にとってかけがえのない故郷なのだ。

だから、彼は戦う。正義のためではなく、大切な故郷を守るために

「自分と関係のない世界ならば、平然と滅ぼす……それが遊星主な

んだ」

「この世界はいけにえみたいなものって訳か……吐き気がするね。連中には」

ルネは腕組みしたまま、無然と言った。遊星主の傲慢な性根が、彼女を不快にさせる。

（まるで、あたしの身体をこんなにした、バイオネットみたいじゃないか、ええ？）

返すべき借りが遊星主にはたっぷりあるのだが、この会議でそれがさらに膨らんだようだ。

「未曾有の災厄……たくさんの文明の消滅……住人は全て死に絶える……」

かつて。ロストログアや質量兵器が制作され戦争に使われた旧時代。次元そのものが滅んだ事もあった、狂乱の時代。

「絶対に、止めなあかな……」

はやては、膝の上で拳を強く握った。

彼女の言葉に一同が頷く。

「こう後手に回ってたら、遊星主の思つ壺や」

はやては決めていた。

「遊星主と戦う際にネックになるのはピサ・ソールや」

複製・再生能力のあるピサ・ソールが存在する限り、遊星主はいくらでも勢力を回復できる。

「うちの総力をあげて、ピサ・ソールを叩き潰す。そうすれば遊星主とて敵ではないはず」

管理局から先制的に仕掛ける。それがはやての考えだった。

遊星主の脅威を取り除くため、電撃作戦が考案され、他の諸提督・部隊長らも賛同を示した。

はやては改めて、三提督に協力を求め、伝説の英雄達は支援を約束してくれた。

彼らは管理局の暗部を承知しながら放置し、評議会の暴走やスカリエッティの跳梁を許した事について、自責の念を覚えていた。名目だけの職とは言え、何か行動していれば悲惨な事件の数々を防げていたかもしれないのだ。

辛い役目をはやて達後進に押し付ける形となった。

次元世界滅亡がかかった今こそ、自分達の権限を惜しみなく使い、若き次元の守護者達を援けたいと思う。

三提督は自由に管理局を動かす裁量権をクロノやはやてに付与した。上層部の承認を受けた機動勇者隊は、かつての六課よりもさらにスタンダードアローンな組織としての認可を得た事になる。

そうになると、次はピサ・ソールを攻略するために必要な兵器だ。

管理局の草創期より、覇者たらんとして乱を起こせし者やテロリスト等はたくさんいたが、異世界から来た未知の文明からの侵略など、歴史上経験したことがない。ことによると、禁断の技術である質量兵器すら投入しなくてはならないかもしれないのだ。

これについては、はやてはすでに手を打ってある。

これまで、緑の星の技術をミッドチルダの技術に組み込む実験や試作品は行われていた。

はやてはデバイス製造メーカーとして名高い企業に、密かに新兵器開発を打診していたのである。

惑星級のピサ・ソールを破壊する事を考え、強力な殲滅兵器の開発を依頼した。もちろん、Gストーン等のオーバーテクノロジーの情報も一緒にだ。

企業の中には、禁じられた技術であるいにしえの質量兵器を研究する部門があり、ある程度の成果を修めているらしい。

ヴァイゼンのデバイスメーカーCW社に、はやてはピサ・ソール級の敵と戦える新兵器の開発を発注していた。

後、CW社はACE兵器を開発するが、それはこの時の研究開発が基になっているという。それはまた別の物語になるのだが……

企業にとって、三重連太陽系のテクノロジーとミッドチルダの技術を融合させるのは困難な課題だったが、開発スタッフは見事にやりこなしていた。それは、GGGのハイテクツールを次元世界の技術で再現したものに他ならない。

はやての手元には陸続と新しいデータが届いていた。

一方で、隊員のデバイスの調整も進められ、フェイトのバルディッシュはG式デバイスとして改造を受けた。

とにかく。

はやては早くとも五日以内に、ピサ・ソールに進攻する事を決め、通達した。さすがに、出撃準備が整うには時間がかかる。

遊星主に逆襲する第一歩がしるされた、その夜。
獅子王凱と天海護はともに夜空を仰いでいた。

二人が居るのは、隊舎として割り当てられた建物の屋上だ。

銀砂の瞬きは、見なれた星座ではなく、ギャレオリア彗星の軌跡も見えないけれど、神秘的な輝きには、つい、魅入られてしまう。
星の世界こそ、凱が目指した世界なのだから。

「すごく星が綺麗だね、凱兄ちゃん」

「ああ。地球の都会じゃこんなに澄んだ夜空は見れないよな」

清澄な空気は、やはり自然に囲まれたミッドチルダゆえか。

「なんだか、すごく遠いところに来ちゃったね、僕たち」

木星に旅した時もこのように思ったが、今度は遙か時空を隔てた異世界だ。

両親の待つ地球に、無事帰還できるのか。いまさらながら、その不安が少年の胸に去来した。

「心配するな」

ぼん、と、護の背中を叩き、凱が明るく言った。

「きっと戻る方法があるはずだ。絶対に、諦めるな」

「うん……」

「俺が必ず、お前をご両親の元に送り返す。約束する」

凱は知らなかっただろうが、大河幸太郎は天海夫妻に、護を連れて帰ると告げていた。

図らずも同じ内容の約束を凱は護に誓ったことになる。

「ありがとう、凱兄ちゃん。僕は信じるよ。みんなで、地球に帰るのを」

「ああ。そのためには……」

「遊星主の計画を阻止しないと！」

そうだ。

遊星主の野望をなんとしてでも打ち砕き、次元世界を守らないと。

（戒道、君も……）

囚われの身の彼を救う。

そして一緒に帰るんだ。地球の子どもとして……！

「でも、本当によかったの？ ギャレオンと戦う役目をなのは姉ちゃんに渡しても」

「寂しくはある。正直に言えばな」

これまで共にフュージョンして戦場を生き抜いてきた仲間だ。ギャレオンともある限り、ガオガイガーは無敵の機神たりえた。

「でも。彼女がフュージョンしたほうが、俺の時より強力になるのは確かなんだ」

スター・ガイガーの実力は彼も垣間見ている。

優秀な魔導師であるなのはがフュージョンしたガイガーは、強化ゾンダーを圧倒したと聞いていた。

ならば。ギャレオンと、ジェネシクマシンとフュージョンするのは彼女に任せたほうが良い。

凱はそう判断し、なのはにギャレオンを託した。
なのはの方は迷うそぶりを見せたが、承諾した。

「今、彼女はギャレオンと話している……。俺がそうしたように、ギャレオンに胸の内を明かしていることだろう」

「ギャレオンが勇者と認めたら」

「認めるさ。そして、誰も見たことのないような勇者王が誕生するんだ……！」

漆黒の天上を見上げると、星がキラキラと輝きながら流れて言った。

「新しい勇者王……か」

その姿は、護には想像もつかなかった。

ガオガイガーを越えたガオガイガー。

それは果たして、どのような機体なのだろうか。

護は大いに好奇心を刺激された。

「俺はこの、新しい力をもっと使いこなせるようにならないと」

凱は視線を《ガオーブレス》に転じた。
凱専用のデバイスだ。

「これで、魔法が使えるんだ」

不思議そうに、凱のブレスレットを眺める。

魔法使い、というとお伽話やゲームのしか思いつかない。

「事象を任意に書き換え、物理現象を自在に操作する技術、か……」

信じられないような技術だが、しかし、その点でいえば三重連太陽系のオーバーテクノロジーや、護やカインの超能力とて地球の常識を越えた存在である。

「少なくとも、この世界の人々は、遊星主みたいに『神』とは僭称してないようだな」

「次元犯罪者にはそういうのもいるみたいだよ。フェイト姉ちゃんから聞いたんだけど、僕が戦ったゾンダーの素体にされた人がそうだったんだって」

スカリエッティはまさに神のように振る舞い、たくさんの命を玩んだ広域次元犯罪者であった。

「まだ、悔やんでいるのか。その男を救えなかったことを」

レプリスカリエッティは浄解後、彼が創造した戦闘機人によって殺害されている。

「だが。トーレとかいう素体は無事に捕獲できただろう。これから

はもう、奴らの思惑通りにはさせないぜ」

「そうだね。凱兄ちゃん」

地球もZマスターや機界新種の脅威から解放されたのだ。流れ落ちる星の光を見ながら、Gストーンの絆で結ばれた勇者たちは、この世界に早く平和が訪れればいい、と祈っていた。

「凱、護。飲み物持ってきたよ」

後ろから、声が聞こえてきた。

金髪を伸ばした美しい女性。執務官のフェイトだった。手にはカップが握られている。

「すまないな」

「熱いから気をつけてね」

凱はコーヒー、護にはホットミルクが手渡される。

「……美味しいな」

カップを啜った凱が呟いた。

美味いが、やはり苦みの効いた命のコーヒーがいいとも思った。むろんそれを口に出すことはない。

「あつたまるね」

護が微笑んだ。フェイトはどういたしまして、といった様子で頷いた。

「ルネはどうしてる?」

「訓練室で」と模擬戦だって」

「……あいつも元気な奴だな」

いところについて彼はそう述べた。
フェイトは苦笑。

「むしゃくしゃして、身体でも動かしてないとたまらないんだって」

「付き合わされる」もいい迷惑じゃないか?」

「そんなことないよ。」もけっこう模擬戦闘楽しんでるみたいだったよ」

「同じサイボーグ同士、気が合うのかな」

凱は二人は似た者同士かもしれない、とふと思った。

孤高の戦士と激情家の捜査官。だが、どんな状況でも戦うことを止めない闘志の強さが共通していた。

「いいコンビになるかもな」

「そうだね」

ルネについて、護はよく知らないが、Gストーン・サイボーグである頼もしさを感じていた。

「君のバルデイツシュの改造はもう済んだのかい？」

「いま調整中なの。明日には完了すると思う」

バルデイツシュ・アサルトは、レイジングハートと同様のGSライドが組み込まれることが決定し、実行された。

Gストーンの出力が加わったデバイスは機能が飛躍的に高まることは、レイジングハート・ジェネシスの起動で実証済みである。

さらに、Gストーンは「ジュエルと共鳴することで、莫大なエネルギーを発生させることも確認されていた。

この現象をジェイアークに応用すれば、失ったジェイクォースを補えるかもしれない。

それは戦力の補強という意味においても重要な事柄だ。

G式に改良されたバルデイツシュは、ジェイアークの能力向上で期待されていた。

フェイトはデバイスを開発スタッフに任せ、部隊の編成や作戦指導等に尽力していた。

「そうか……それは凄そうだな」

「ねえ、遊星主がまた襲って来ることはないかな？」

護が危惧を漏らした。

「ゾンダーに、パルパレーパとカインを打ち破られたんだ。奴らも早々には……」

あくまでそれは願望だ。

「ピサ・ソールでまた復活させられている可能性が強いと思うけど……」

「その時は」

凱は拳を突き上げて見せた。

手の甲には、鮮やかな緑色をしたGの紋章が、光り輝いていた。

「また迎撃するまでだ！」

勇者として。

凱は未だ昏睡状態に陥っている命に向けて、そう胸で叫んだ。

最後まで俺は勇者として戦う。お前が俺を信じてくれる限り。

「凱兄ちゃん……」

この青年は今まで何度倒れても立ち上がり、敵を倒してきた。来る遊星主との決戦においても彼はそうするだろう。

勇気ある者として。

だから。自分も彼のように、戦おう。護は思いを肯定するように頷いた。

僕もG G Gの一員なのだから

「大丈夫。きっと私たちは勝つよ」

フェイトは夜風に髪をなびかせながら、言った。

「私たちには」

根拠ある答えではない。

これは直感。

経験から解る、直感だ。

「勝利の鍵……エース・オブ・エースがついているのだから」

フェイトは地上本部の地下格納庫にいる幼なじみを思い浮かべながら、二人に言った。

その光景を第三者が見れば、高町なのはが瞑想に耽っているように捉えたかもしれない。

淡いライトに照らされた空間に、沈黙のカーテンが巻き付いているようにも思えた。

しかし。余人の知覚できない領域では、なのはとギャレオンとの対話が、行われていたのだ。

宇宙メカライオンの前に立つなのははいま、胸の想いを腹蔵なくさらけ出し、語った。

「貴方はあの時、私を勇気ある者と認め、カインの遺産を使う権利を与えた……」

本局。スター・ガイガーが生まれた戦いでのことである。

ギャレオンは遊星主と戦おうとしたのはを、真の勇者としてフュージョンさせた。

「お願い。もう一度、あの力を私に貸して」

ヴィヴィオを取り返すために。その理由をはっきりと告げた。

「たぶん……私は初めて、私の力を、自分のために使おうとしている」

これまでののは誰かのためだけに手にした力を使ってきた。そのために、飛ぶ力を失いかけたほどだ。

だけど。今回は違う。

正義だとか、他人のためだとか、関係ない。ただ、ヴィヴィオを助けるという目的のためだけに力を振るおう。

ギャレオンには嘘はつきたくない。

ヴィヴィオのためにといい我が儘ともとれる思いを、打ち明けた。ギャレオンはじっと、なのはの声に耳を傾けているようであった。

「私はこう決めたの。ヴィヴィオを救うためなら、いかなる力をも行使しよう」

遊星主を撃ち破るには、ジェネシックの力が必至になるだろう。

「貴方が承知しないというのなら、仕方がないと思う。でも……ギャレオン、私の大切なものを取り返すには貴方が必要なの！」

遊星主はジュエルシード強奪に並行して、魔導師の身柄をも狙っていたという。

強力なロストロギア、ジュエルシードを発動させられる魔力の持ち主が必要だからであるが、その候補の中には、なんと、なのはも含まれていた。

拉致したヴィヴィオから聞き出したからか、それとも管理局から情報盗んだかは不明だが。遊星主は魔導師として、極めて高い能力を持つなのはに目星をつけたようなのだ。

エース・オブ・エースの異名は高名であり、はやてやフェイトに次いで目的に適う人材と言える。

ギャレオンが戦闘に介入しなければ、パルパレーパは彼女を連れ去る予定であった。

遊星主に捕えられたとて、おとなしく言うことを聞くはずもないが、たとえ抵抗しても、パルパレーパにはケミカル攻撃が有る。

レプリジン・護、凱等もケミカルボトルを埋め込まれ操り人形にされた。

もしも、なのはが同じ目にあえば。

皮肉な事に、因縁のロストログアをなのはが起動させて次元世界の滅びに手を貸すこととなるであろう。

勿論、なのはには、遊星主の手先に墮す気はない。

万が一。なのはが、或いは誰かがパルパレーパの支配を受けた場合、その者ごとピサ・ソールを破壊する様に言い渡されている。

非情だが、次元世界を守るためだ。管理局の皆が、覚悟を決めている。

「でも、私は誰も死なせたくはない。だから。ギャレオンの力が欲しいの」

遊星主を滅ぼす、Gの力が！！

ヴィヴィオがさらわれた時。

なのはは絶望感に浸り、勇気を無くしかけた。

だが、本局の戦いで、なのははまた勇気を取り戻した。

スター・ガイガーとフュージョンした時、激しい闘志が胸に湧き上

がってきたのだ。

新しく生まれ変わったかのような、熱い感覚だった。

「お願い、遊星主からヴィヴィオを取り戻す力を……」

おそらく、遊星主はなのは達を手に入れるために襲い掛かって来るだろう。しかし。なのはは敢然と邀^{むか}え撃^うつつもりだった。

「遊星主と戦う力を 私に」

ギャレオンの双眸に光が灯った様に、なのはは思った。

静かに。

鋼鉄の獅子は星光の娘に、己の意志を伝えはじめた。

格納庫より遙か天上では。

数多の輝きが、空を埋め尽くしていた。

星々の光が美しい夜だった。

その煌めきを眺めるものたちには、まるで未来を祝福してくれているように眼に映っただろう。

そうならいい、と、護は思った。そうなるようにしたい、と。

遙か彼方から届いたあの光が、遊星主により消されないように死力を尽くすと。幼い胸に誓う。

凱は、フェイトと護に言った。

「さあ、明日も早い。もう眠ったほうがいいんじゃないか？」

「そうだね」

各人にそれぞれ疲労が溜まっている。

三人は星澄める夜の屋上を降り、自分の部屋に戻っていった。

無人となった屋上を、二つの月の光が、儚い夢のように照らしていた。

そして。

勇者たちの旅立ちの刻^ひが、訪れる。

第十一話 未来への光（後書き）

物語は最後の戦いへ。

次回、第三部、最終話になります。

第十二話 エピローグ―星の子ら

闇のなか。幼き少女が泣いている

そのようなイメージが、戒道幾巳の脳裡に浮かんでいる。
柔らかそうな金髪に、左右の瞳の色が違うオッド・アイ。

（何故、泣く？）

戒道は疑問を持って訊いた。

（ママが……ママがいないの）

（母親が　　）

その時、ちくりと、戒道の胸に痛みがはしった。

（母さん……）

地球に残された養母の穏やかな顔立ちが思い出される。

（ヴィヴィオのママ……助けに来てくれたのに……あの人たちが……）

あの人？

（あの怖い人が命じるの……私は嫌なのに……体が言うことをきいてくれないの……）

（もしや　　）

戒道が思い当たる存在は、ただ一つ。

（奴に……何かされたのか）

（怖い……私が私じゃ、無くなる……！）

恐怖に震える声に、戒道は。

（やはり……！？）

彼は、高町なのはとこの少女との関係も、Jが管理局と接触していることも知らない。

だが、少女が遊星主に利用されようとしているのはわかった。

（ママも、もう私をどうすることもできなくなるの……私はあの人達に逆らうことすら　　）

少女の意識は絶望に押し潰されそうになっていた。

（諦めるな）

戒道はヴィヴィオにそう、意思を送った。

（肉体を支配されてるのは僕も同じだ）

アベルに囚われ、ピア・デケム・ピットに神経を接続され、遊星主の意のままにされている。

（だけど……心までは奴らの思い通りにはされない）

戒道は必死に、精神の奥底で遊星主の支配力に抵抗していたのだ。

（必ず……必ず、」が……ラティオ……が助けに来る）

それまで、絶対に遊星主には完全に屈しない。護に感化されたのか、彼は決して諦めないと強く思った。

（仲間を信じろ……！）

（……）

（君は帰りたくないのか、母の元へ）

（帰りたいよ！ ママのところに……）

悲痛な叫び。

（僕も 母さんの元に帰りたい）

戒道の胸には苦いものが拡がっている。戦士として生きる途を選んだ彼は、養母をあえて省みなかった。情が残れば、戦いが辛くなる。Zマスターとの決戦と遊星主との遭遇。激しい運命にさらされた戒道だったが、つかの間、複製された地球で過ごす時間を得た。

その時、養母が病から入院を余儀なくされたことを知った。すべては彼が不在中に起こったことだ。書き置きから、養母は行方不明の息子の身を最後まで案じていたことが伝わってきた。その日。母のいない部屋で、母を想いながら戒道は泣いた。素直に、彼は母への思慕を吐露した。

そして、戦いが終わったら、今度こそ母の元で暮らそうと決めた。天海護と同じ、地球人の子どもとして……

（だから、僕は負けるわけにはいかないんだ……遊星主なんかには！）

（でも……だめだよ……あの人の《力》には勝てないよ）

少女の心はまだ昏い。

（信じるんだ、君の仲間を、友を、母さんを！）

（ママ……）

（アベルがいかに……僕の創造者だとしても……僕の《勇氣》だけは止められない！）

勇氣は奇跡を起こす源だと。
護から何度も教えられた。

なら僕は、勇氣を忘れない。必ず、アベルの支配を脱し、Jに

（……ヴィヴィオも。戦える？）

（戦えるさ）

（あの人達と？）

（ああ）

気休めではない。彼は本心からそう言った。

（だから。負けるな……）

」はきつと、遊星主に勝つ。

（不死鳥は……炎より蘇る……か）

信じている。

（そうだね。私も……ママのもとに帰るために、戦う！）

少女の声には、凜としたものが含まれていた。

どうやら、遊星主に抗う強さが湧いてきたようだ。

（そうだ。僕も、絶対に諦めない）

幼いながら、戒道は数多くの戦場を経験してきた。それが少年に驚くべき勁強さを備え付けさせた。

（ラティオ……いや、天海護はきつとここに来る）

遊星主の飛行空母ピア・デケム・ピット。そして、ピサ・ソールへ。

（勇者達を伴って）

勝機は必ず訪れる。

その刻を待ちながら、アルマ・戒道幾巳はアベルの支配に抗い続けた。

いつの間にか。

少女・ヴィヴィオの声は熄んでいた。

眠ったか……？

戒道は閉ざされた闇の中、いま、Jや護はどうしているだろうと、考えていた。

彼にはむろん、判らないが、外の世界では、機動勇者隊による遊星主逆襲の準備が着々と進められていたのである。

アベルは、この期に至ってもなお、人間の力を蔑視し、軽侮していた。

彼女は、いやプログラムである遊星主は、プラス思念のもたらす力を、量り間違えていたのだ。

まさか、無限の勇気が存在することなど思いもよらぬ。

その認識から、後に手痛い反撃を被ることになる。

だが、この時のアベルは、わが計略が成就することを疑わず、ピア・デケム・ピットのブリッジにて、三重連太陽系再生の悲願が達成される、と昂揚しながら、夢見ていたのであった。

第十二話 エピソード「星の子ら」(後書き)

第三部はこれで終幕です。

第四部は完結編になる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858q/>

悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

2011年5月19日00時55分発行